

編年西村山郡史
天

202
371

202-371



1200800036839

Kodak Gray Scale



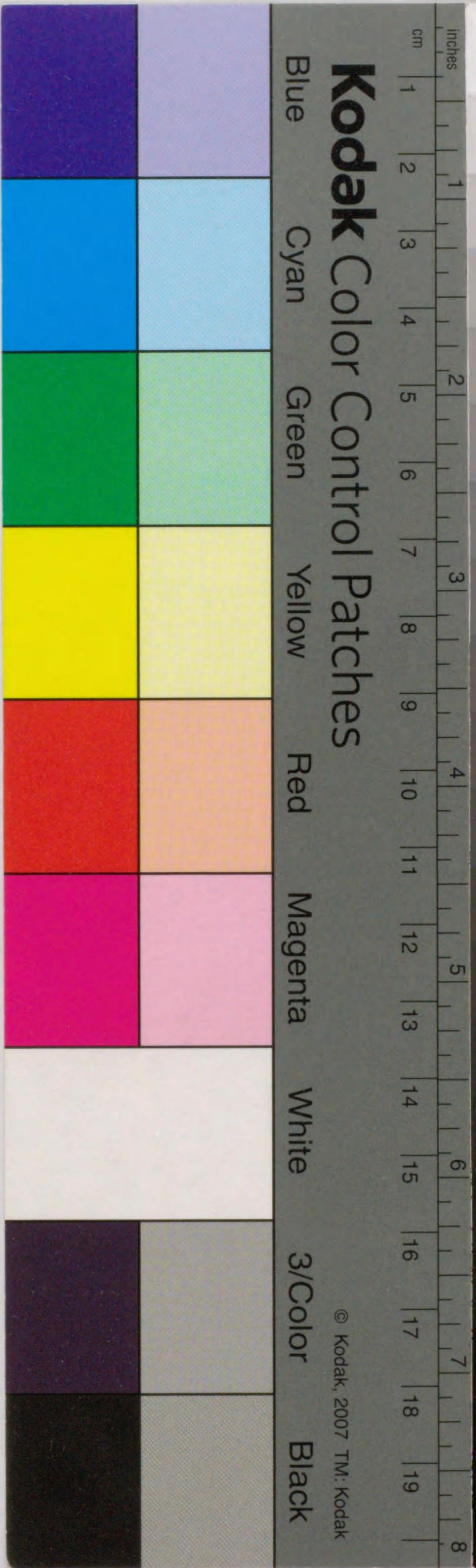
© Kodak, 2007 TM: Kodak

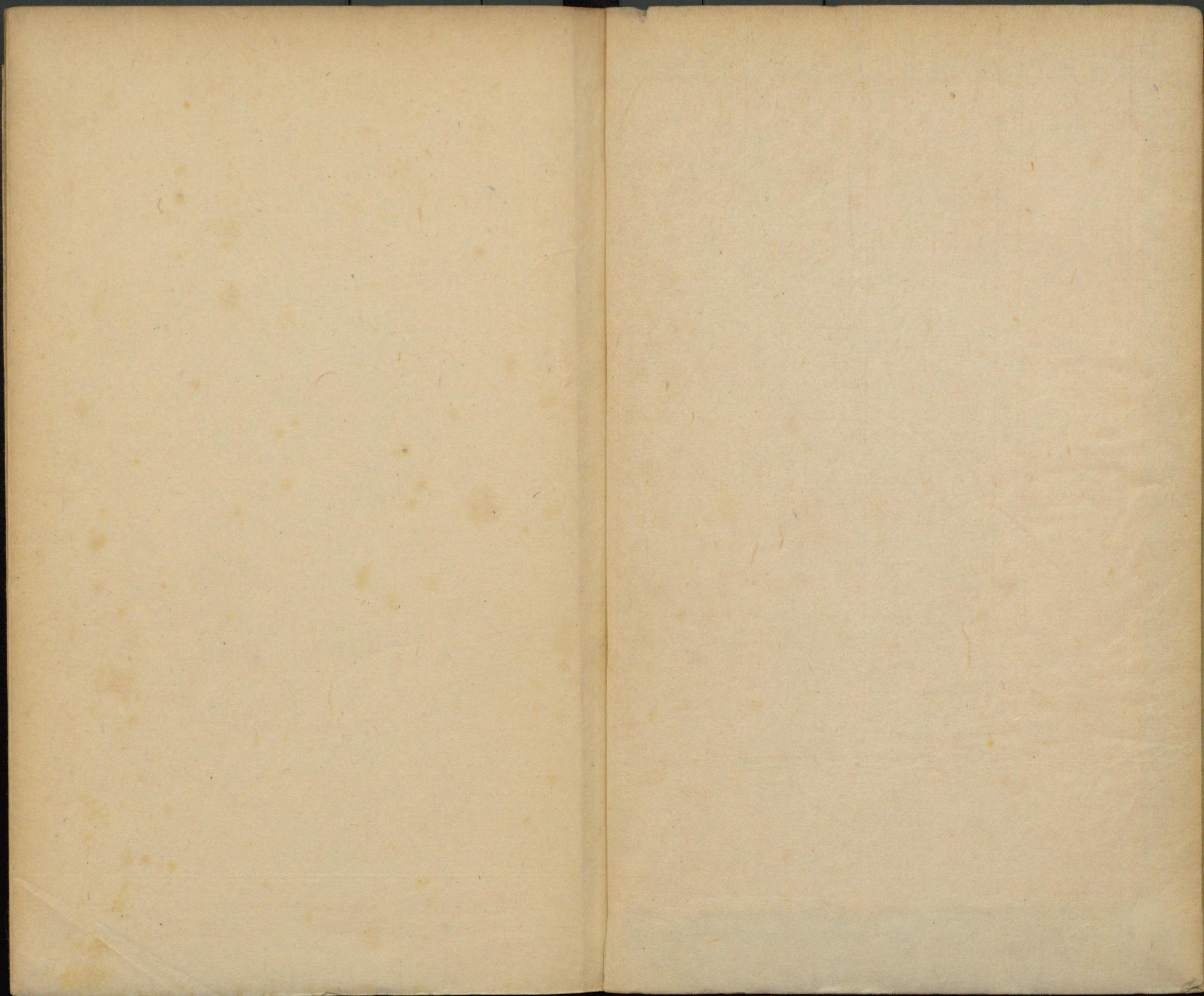
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak









徑

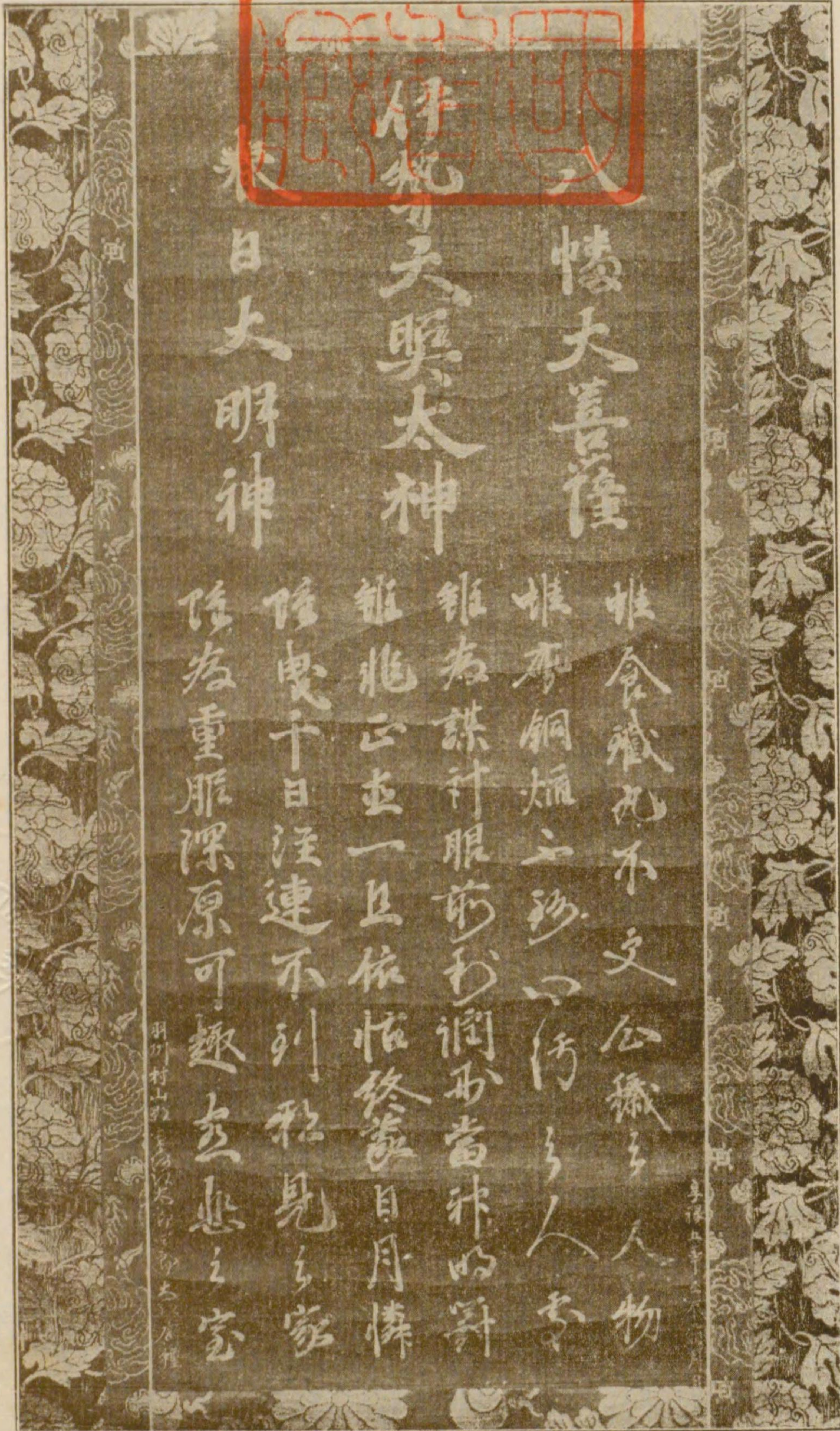
故

知

新

磐石題

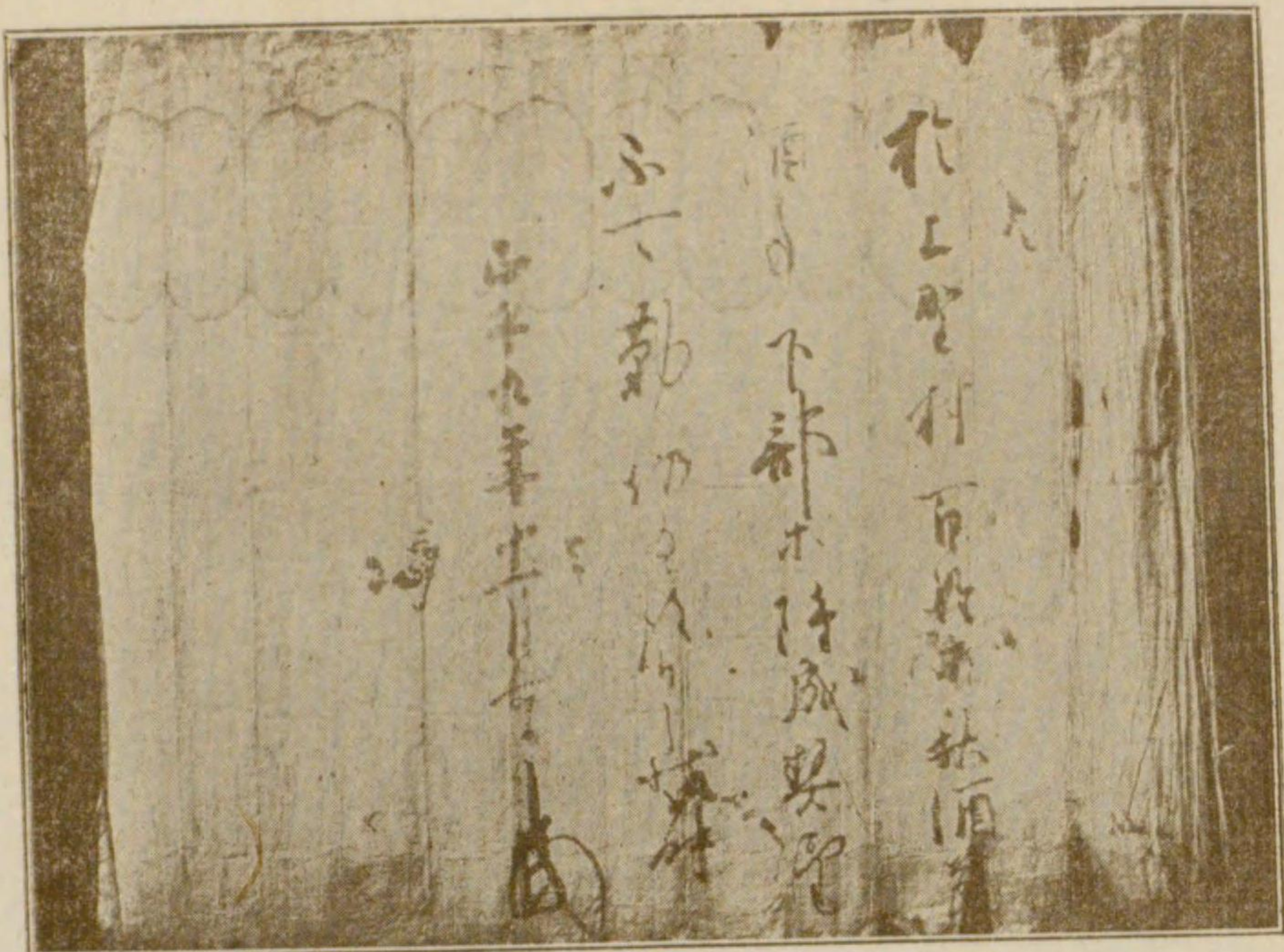




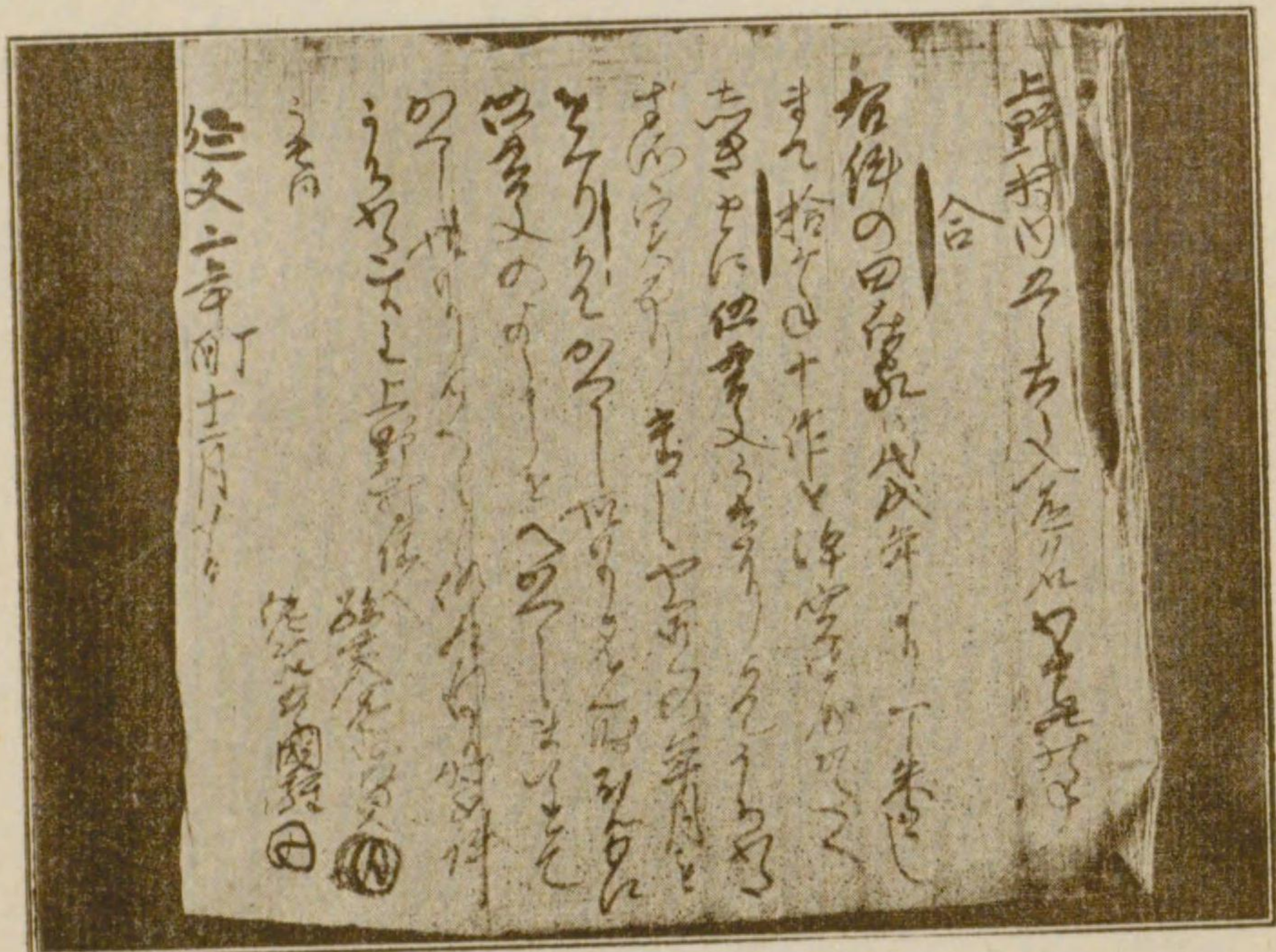
寒河江町
安孫子三五郎氏藏

三社託宣 大江廣種公筆

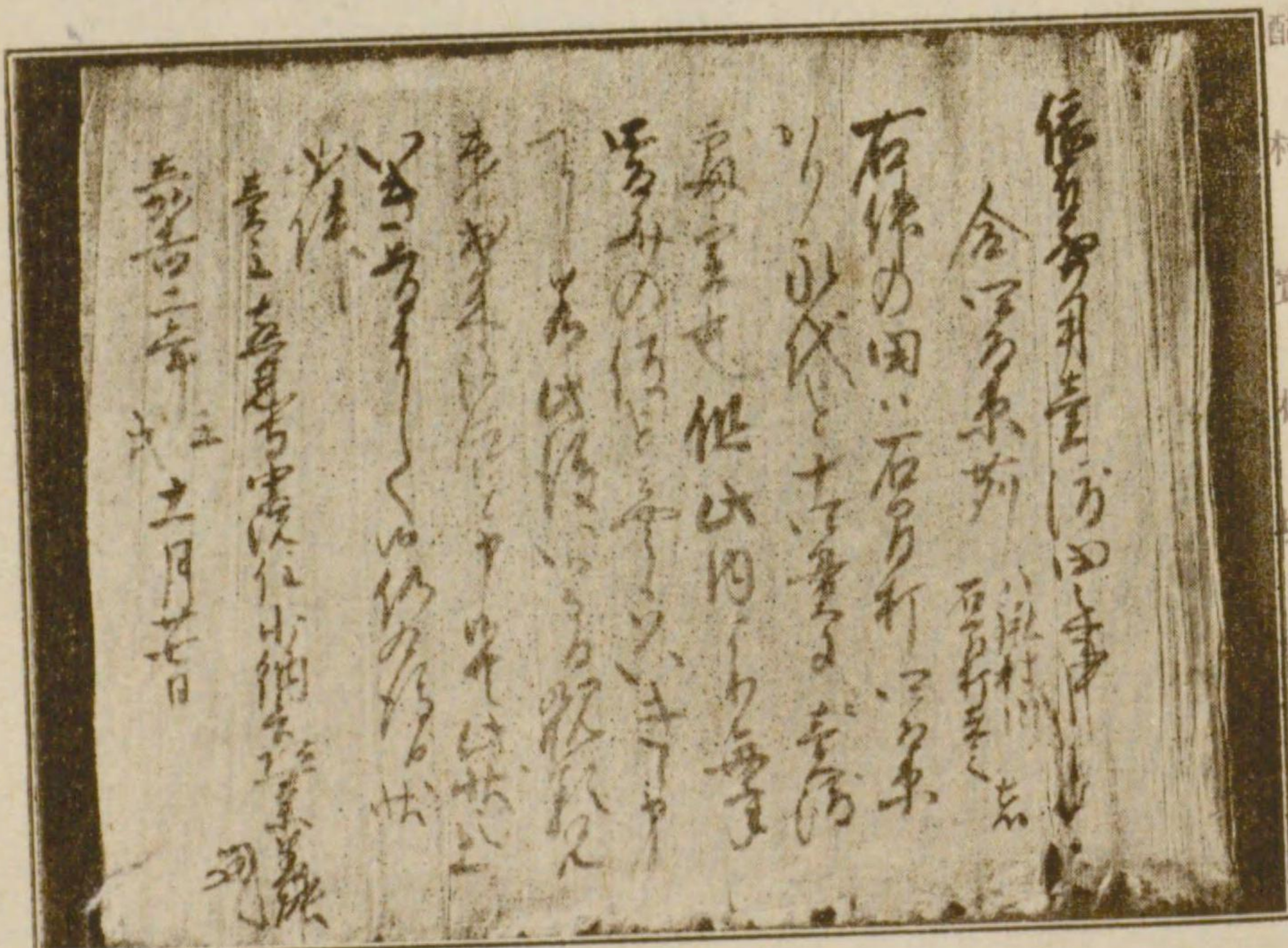




卷之二 (二三頁) 参照



卷之二 (二七頁) 参照

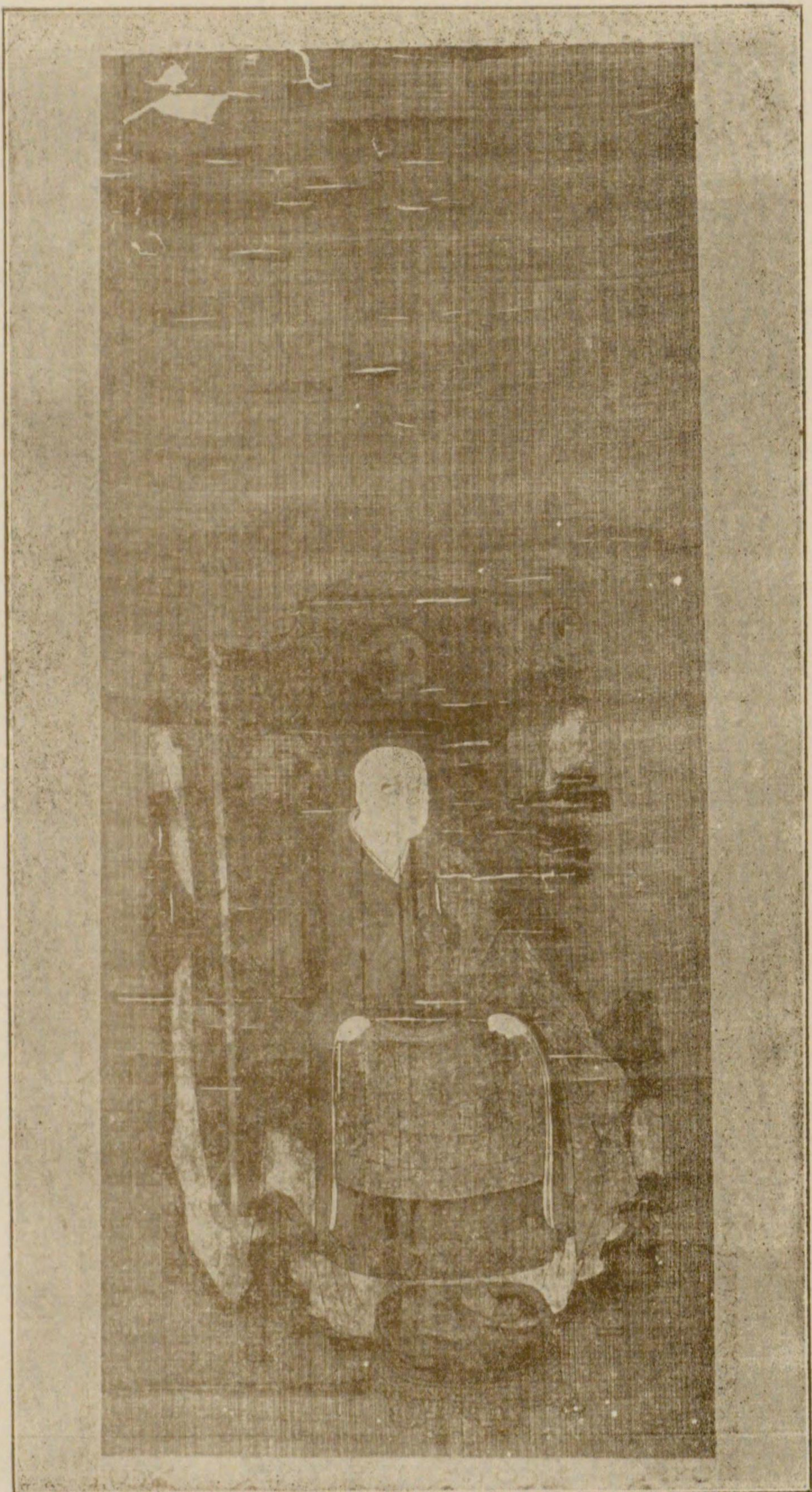


卷之二 (四四頁) 参照

醍醐村寶林坊藏



卷之二(六五頁)



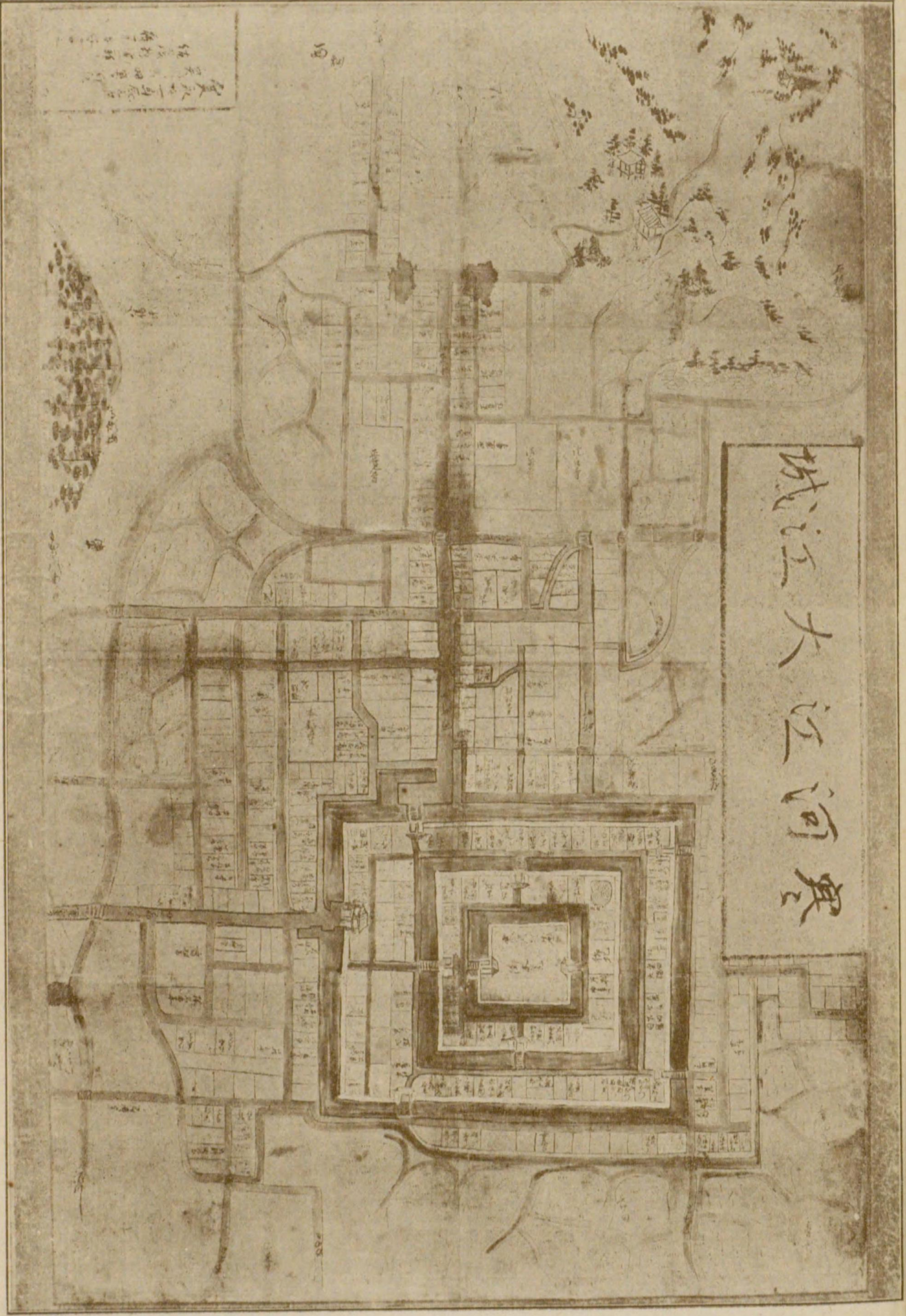
寒河江町

澄江寺藏

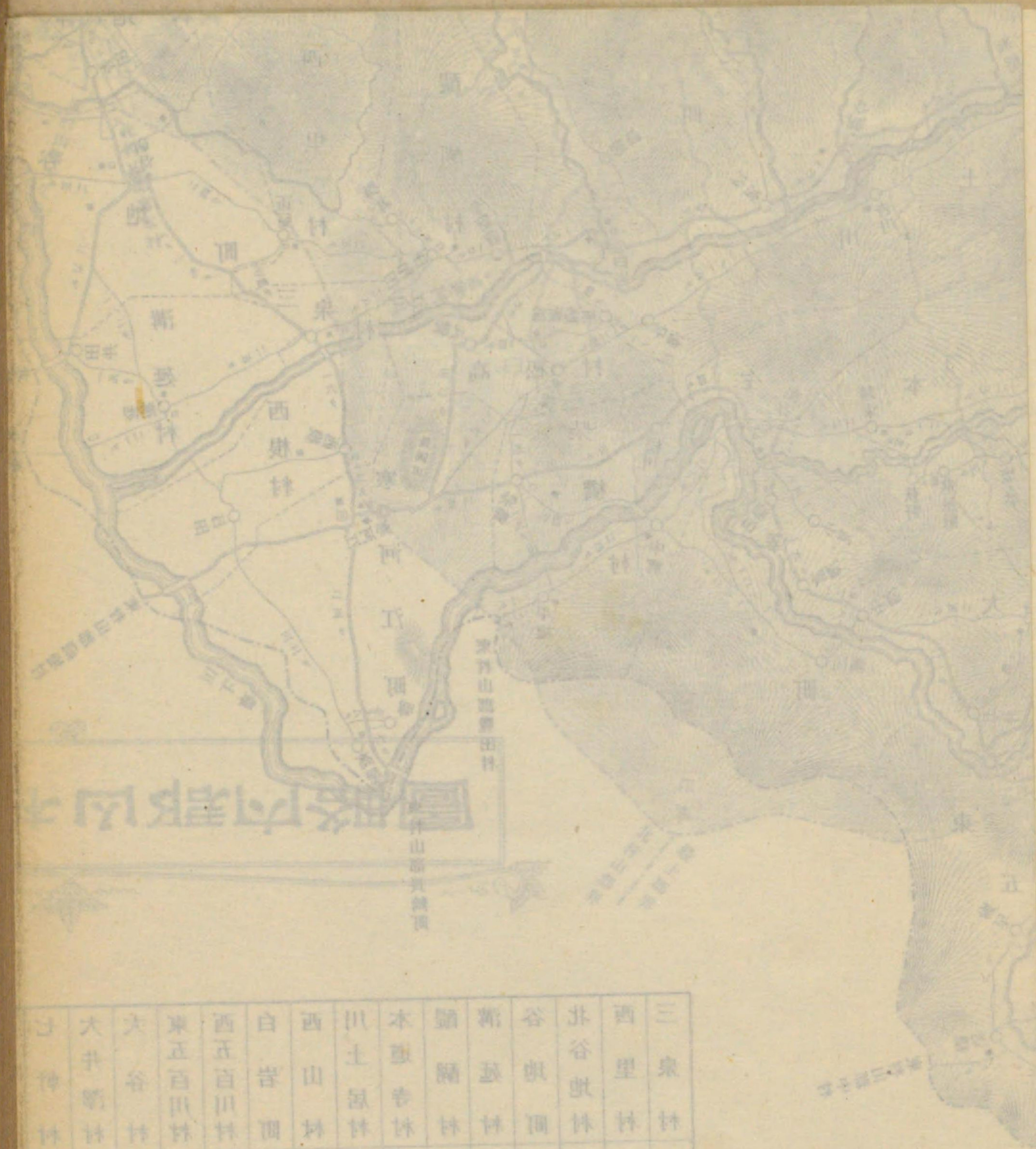
澄江寺住持淵室象外像

敬白 三願狀之事
 大泊明神 御寶前
 今度觀之義經命於
 吾志者社願建立之并
 在表背山牧下致之并探
 致之御帳者也 寒河江
 石如件
 文祿四年八月十三日 藤原家

狀願立康義親家



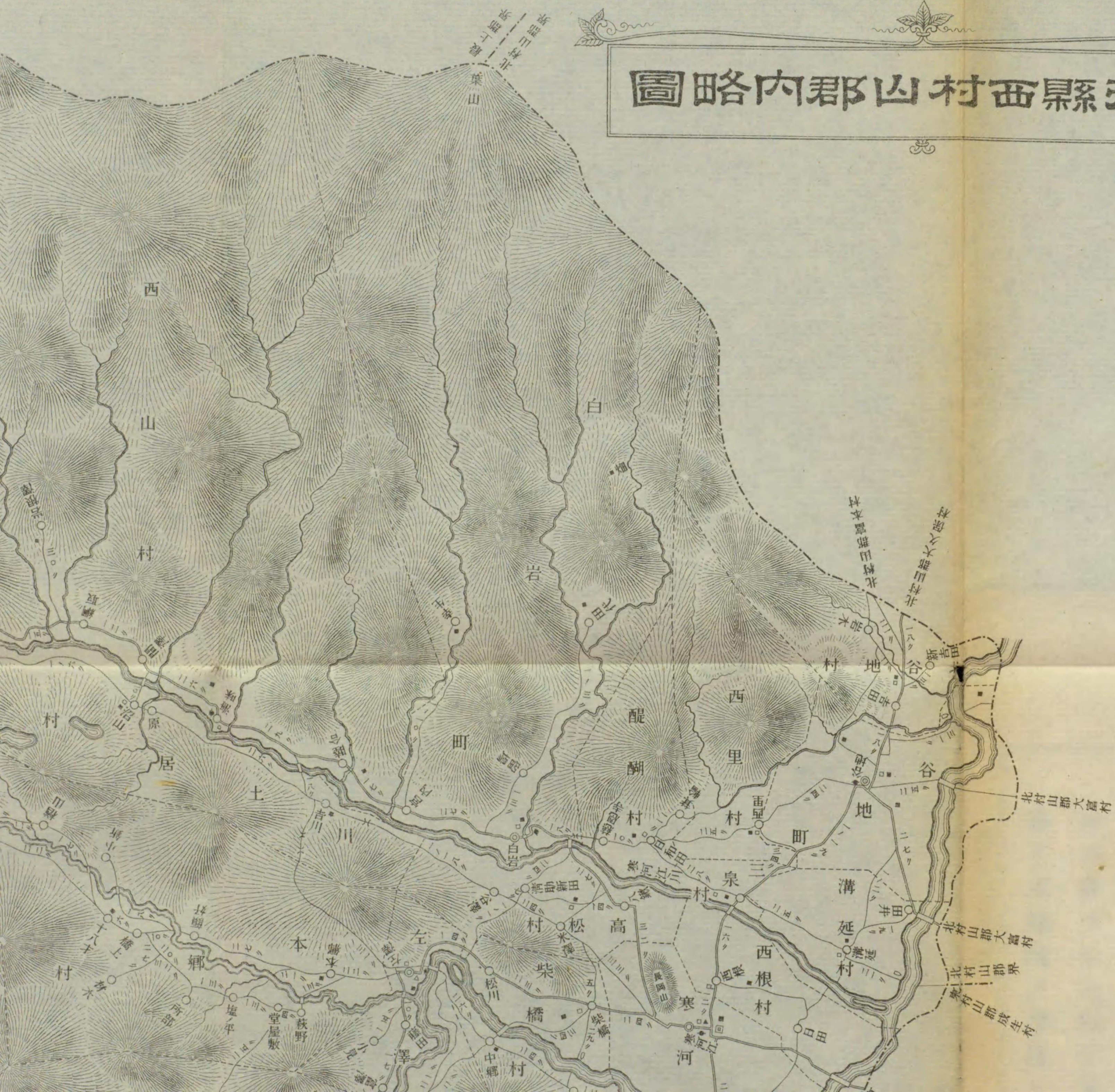




三泉村	二里二十六丁
西里村	一里二十六丁
井谷村	二里一十丁
谷旗村	二里一丁
新橋村	一里一十五丁
顯顯村	一里二十丁
本張村	六里一十二丁
川土村	三里三十三丁
西山村	三里二十一丁
白岩村	一里二十三丁
西五百田村	五里三十二丁
東五百田村	四里二十四丁
大谷村	三里一十丁
大井村	武里一十三丁
計	四里二十五丁

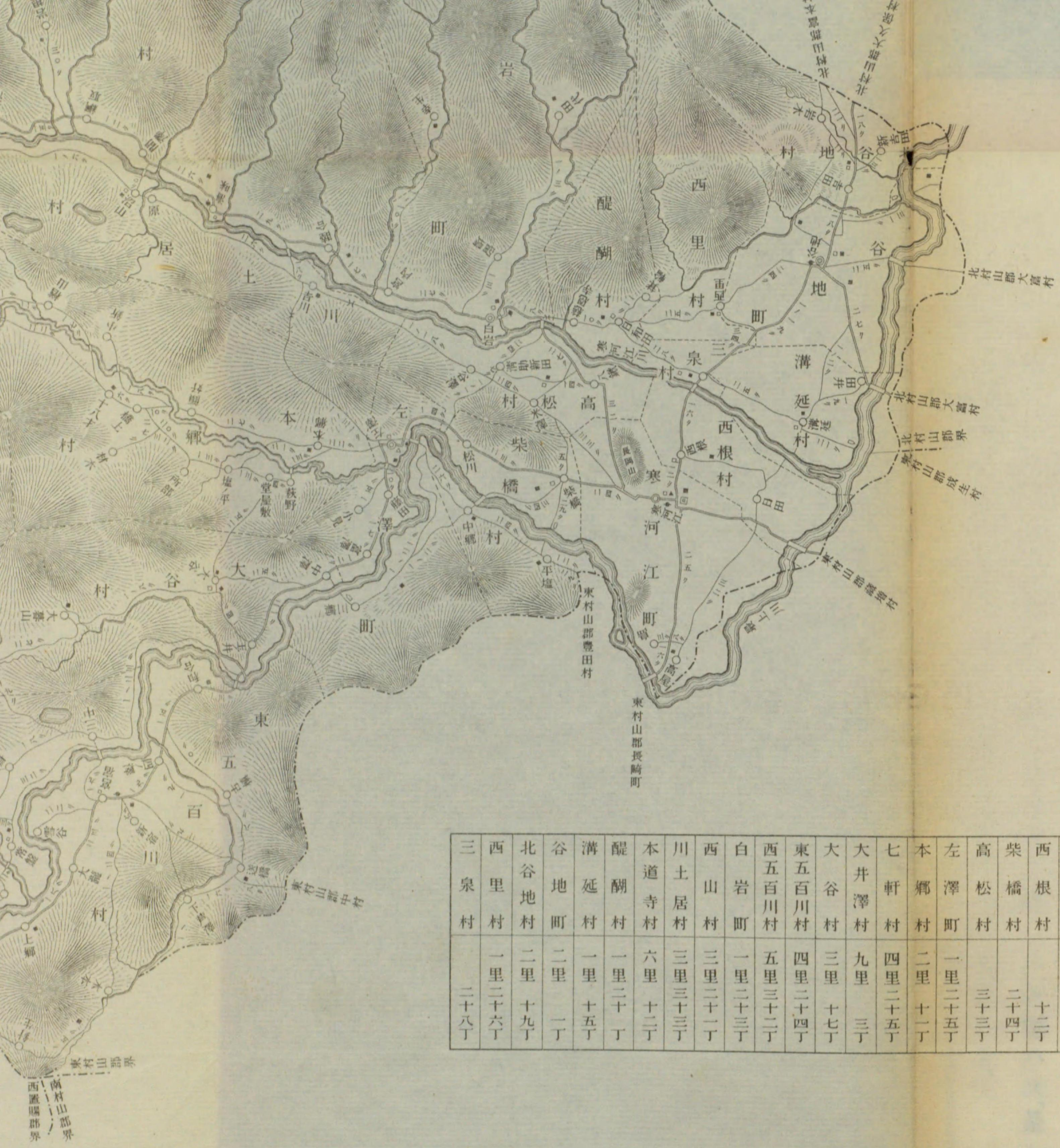


山形縣西村山郡内略圖



山形縣西村山郡役所調製
大正三年十二月

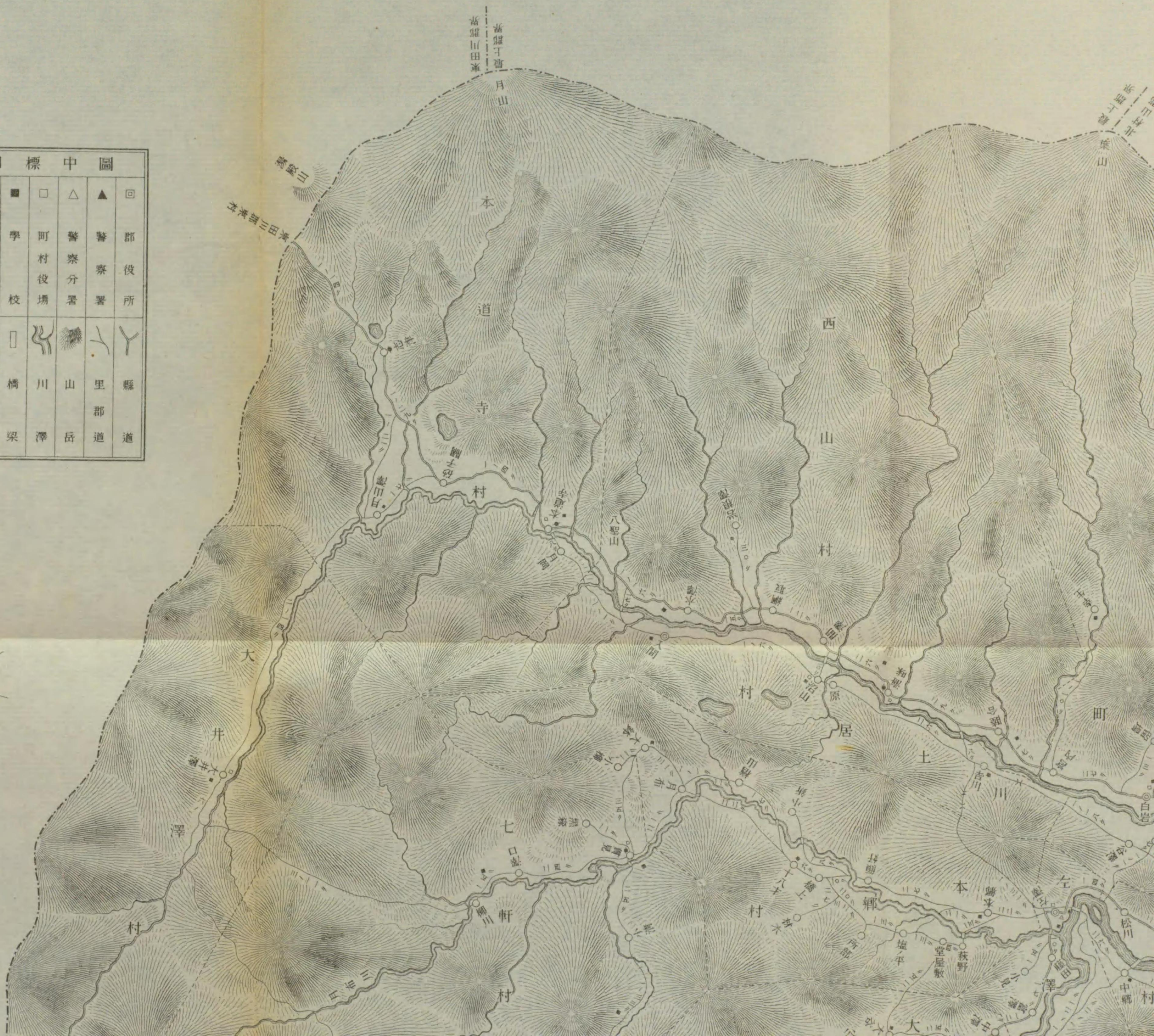
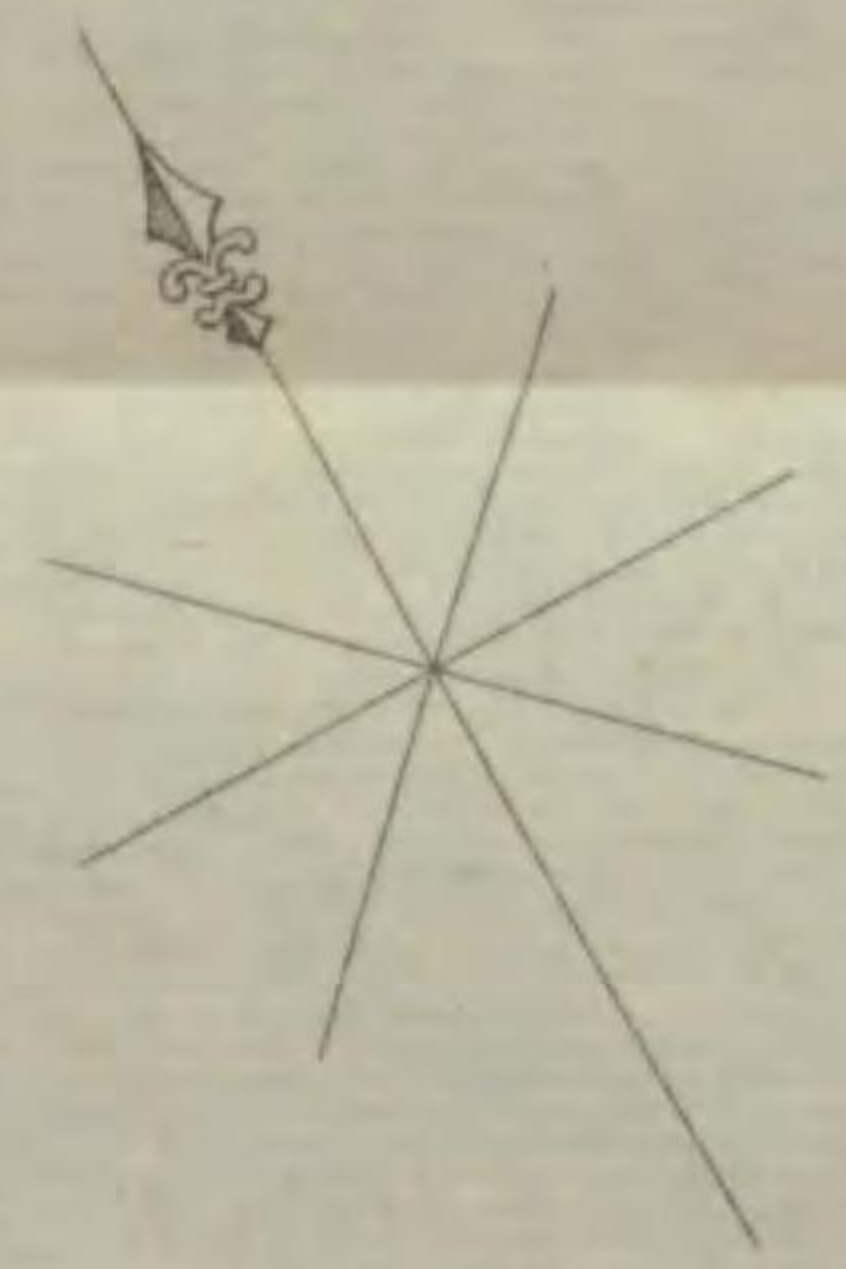
役所調製
一月

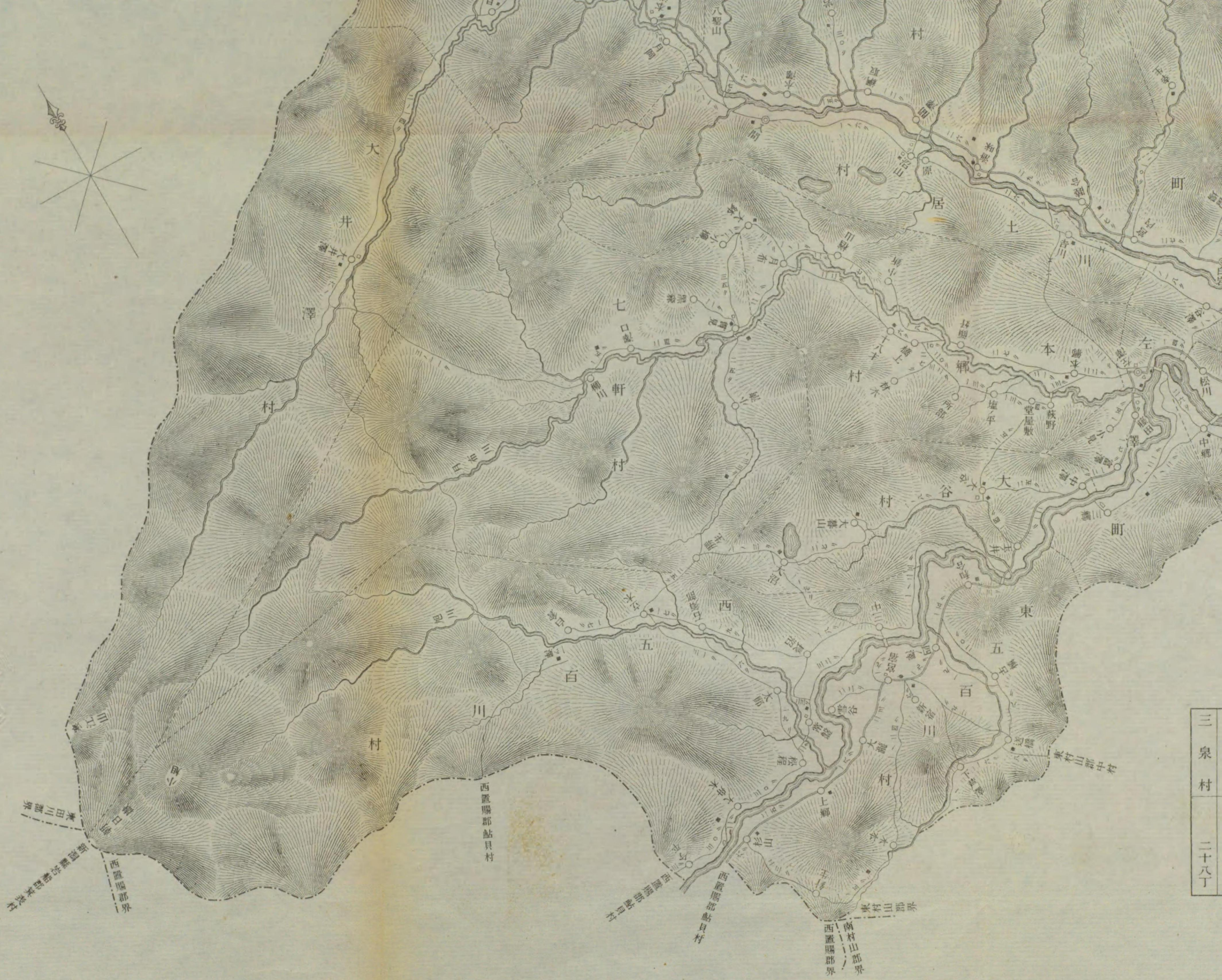
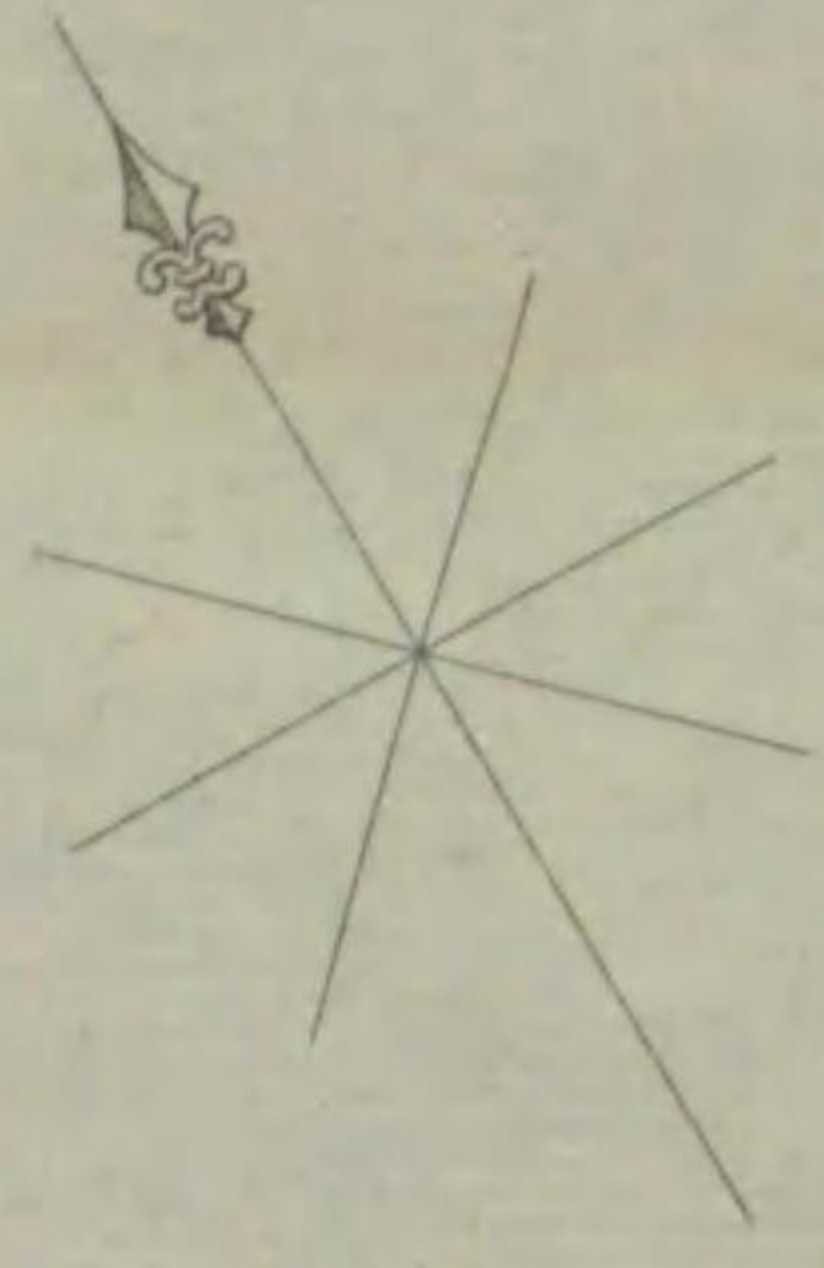


三泉村	西里村	北谷地村	谷地町	溝延村	醍醐村	本道寺村	川土居村	西山村	白岩町	西五百川村	東五百川村	大谷村	大井澤村	七軒村	本郷村	左澤町	高松村	柴橋村	西根村	寒河江町	町村役場所在地	寒河江町ヨリ各町村役場ニ至ル里程
二八丁	一里二六丁	二里一九丁	二里一丁	一里一五丁	一里二〇丁	六里一二丁	三里三三丁	三里二一丁	一里二三丁	五里三二丁	四里二四丁	三里一七丁	九里三丁	四里二五丁	二里一丁	一里二五丁	三十三丁	二十四丁	十二丁		里	程

寒河江町ヨリ各町村役場ニ至ル里程
 町村役場所在地
 寒河江町
 西根村
 柴橋村
 高松村
 左澤町
 本郷村
 七軒村
 大井澤村
 大谷村
 東五百川村
 西五百川村
 白岩町
 西山村
 川土居村
 本道寺村
 醍醐村
 溝延村
 谷地町
 北谷地村
 西里村
 三泉村

圖中標目凡例							
回	▲	△	□	■	●	◎	○
郡役所	警察署	警察分署	町村役場	學校	郵便局	町中央標	村大字中央標
Y	山岳	川	橋	渡	船場	郡界	村界
縣道	里郡道	山岳	川	橋	渡	郡界	村界
／	／	／	／	／	／	／	／
隧道	里	丁	多	間	界	界	界





三泉村
二十八丁

大正三年三月二十日
山形縣西村山郡西村山

西村山郡史例言

西村山郡	西村山郡	西村山郡	西村山郡	西村山郡	西村山郡	西村山郡	西村山郡	西村山郡	西村山郡
...

例言

一 本書ハ明治四十一年九月...

一 東宮殿下本縣御行啓ノ光榮ヲ萬世ニ紀念セン爲メ、本郡會一致ノ決議ニ因リテ、編纂ニ從事シ本年ニ及テ脱稿シタルモノナリ。

一 本郡ニ於ル、地誌類ハ出羽風土記、山形縣地誌提要、其他本郡編纂ノ村誌、古社寺調査書等、其類頗ル多シ、獨リ本郡ニ關スル古今沿革政理得失ノ大概ヲ通覽スヘキモノニ至リテハ、未タ曾テ一モ備ハル所ナシ。是レ本書ノ彼ヲ置テ、是ヲ取リシ所以ナリ。

一 本郡史專ラ、本郡ノ事ヲ記スヘシ、然レ國家古今ノ大勢大形ニ概通スルニ非サレハ、以テ本郡沿革ノ由テ來ル所ヲ詳ニスル能ハス、是レ本書ノ本郡内ノ事蹟ニ止ラスシテ、他ニ傍及シタル所以ナリ。

二
一本書和銅四年、出羽建國ヨリ、明治十一年本郡建置ニ至ル、中間一千百有餘年間ノ事ヲ編録ス、而テ建郡以後ノ事ニ及ハス、蓋シ建郡後ノ事蹟ハ、異日ヲ俟テ之ニ着手ス未タ晚カラサルヲ以テナリ。
一本書體例大日本史料ニ則ル、然ルモ其引用書名ノ如キハ、一々之ヲ注記セス、又事ノ小ナルモノハ單ニ其綱ヲ備ヘテ、其目ヲ略シタルアリ、他ナシ其繁ヲ避ケ、其簡ニ就ンコトヲ欲シタレハナリ。
一慶元以上郡内傳存ノ古文書ハ、其事ノ大小ヲ問ハス、一々之ヲ採ル、其消滅ニ歸センコトヲ惜ミタレハナリ。
一本史採録セル文書記録、總テ原書ヲ貴重シ、敢テ隻字半句ヲ改竄補修セス其ノ通スル能ハサルモノハ(マ、)ト傍注ス。
一本郡内傳存ノ史料ニシテ、本書ニ採録スヘキモノ、漏脱極メテ鮮少ナラス、今僅ニ採訪ノ材料ニ據リテ編纂セルノミ、他日精探詳訪、更ニ之ヲ補修セントス、所藏者啓秘ニ吝惜スル所ナクンハ幸甚ナリ。

一本書編纂ニ當リ、委員ヲ各町村ニ設ケ、史料蒐集ヲ委托シ、又鑑修ヲ米澤伊佐早謙氏ニ托シタリ、茲ニ諸氏ノ勞ヲ謝ス。

大正二年四月

西村山郡史編纂委員長

從六位 日向勝 見識

引用書目

日本書紀

續日本書紀

日本後紀

續日本後紀

文德實錄

三代實錄

延喜式

和名類集鈔

尊卑分脈

台記別記

著聞集

平家物語

西村山郡史引用書目
日本書紀
續日本書紀
日本後紀
續日本後紀
文德實錄
三代實錄
延喜式
和名類集鈔
尊卑分脈
台記別記
著聞集
平家物語

吾妻鏡
承久記
大江氏系圖
北條九代記
御成敗式目
鎌倉評定傳
神皇正統記
大平記
梅松論
西園寺秘錄
花營三代記
足利將軍傳
足利家御內書案

滿濟準后日記
蔭涼軒日錄
鎌倉管領九代記
最上家系圖
上杉憲實記
親元日記
大寶寺古系圖
大館常興日記
上杉家記錄
上杉古文書
太田和泉守日記
豐臣秀吉譜
伊達成實記

伊達世次考

征韓古文書

伊達家古文書

中尊寺古文書

慶元古文書

結城古文書

最上刑部書上

白川証古文書

相州文書

澄江寺古文書

最上義光事歷

藩翰譜

關原戰史

駿河日記

奧羽永慶軍記

柳營譜略

制度集

將軍家御令條

奧羽觀蹟聞老志

奧羽春秋

最上記

最上盛衰記

出羽風土記

大泉叢志

雞肋篇

長尾古文書

本山古文書
 西村山郡村志
 同町村志料書上
 山形縣會史
 戊辰出羽戰記
 最上郡史
 戊辰庄内戰志
 新庄領邑鑑
 戊辰紀事
 古社寺書上
 白鳥系圖
 泣血錄
 寬文十二年檢地

谷地町史
 鶴梁文集
 寶歷年代記
 息軒遺稿
 慈恩寺志料
 庄内年代記
 酒井家御系圖參考
 工藤家古文書
 戶澤系圖
 寶林坊古文書
 四十八楯記
 梅本坊古文書
 最上川通船記

山形縣地誌提要
 出羽國大繪圖
 庄内物語
 寶歷五年乙亥大不作記
 東遊記
 最上一揆記 同裁許記
 法令全書
 萬取集記
 御高帳寫
 寒河江誌
 山形縣内神社名簿
 探史月表
 享德公御年譜

大久保家記錄
 名主佐藤周助日記
 大庄屋大泉氏日記
 農諭
 天保凶荒記
 秘鑑錄
 御式目
 萬手扣日記
 大日寺記錄
 三重年表
 牛涎
 新聞日誌
 東京城日誌

太政官日誌

鎮守府日誌

戊辰庄内戦争録

幕府衰亡論

大正天皇御紀

大正天皇御紀

大正天皇御紀

大正天皇御紀

大正天皇御紀

大正天皇御紀

大正天皇御紀

大正天皇御紀

大正天皇御紀

編年西村山郡史卷之一

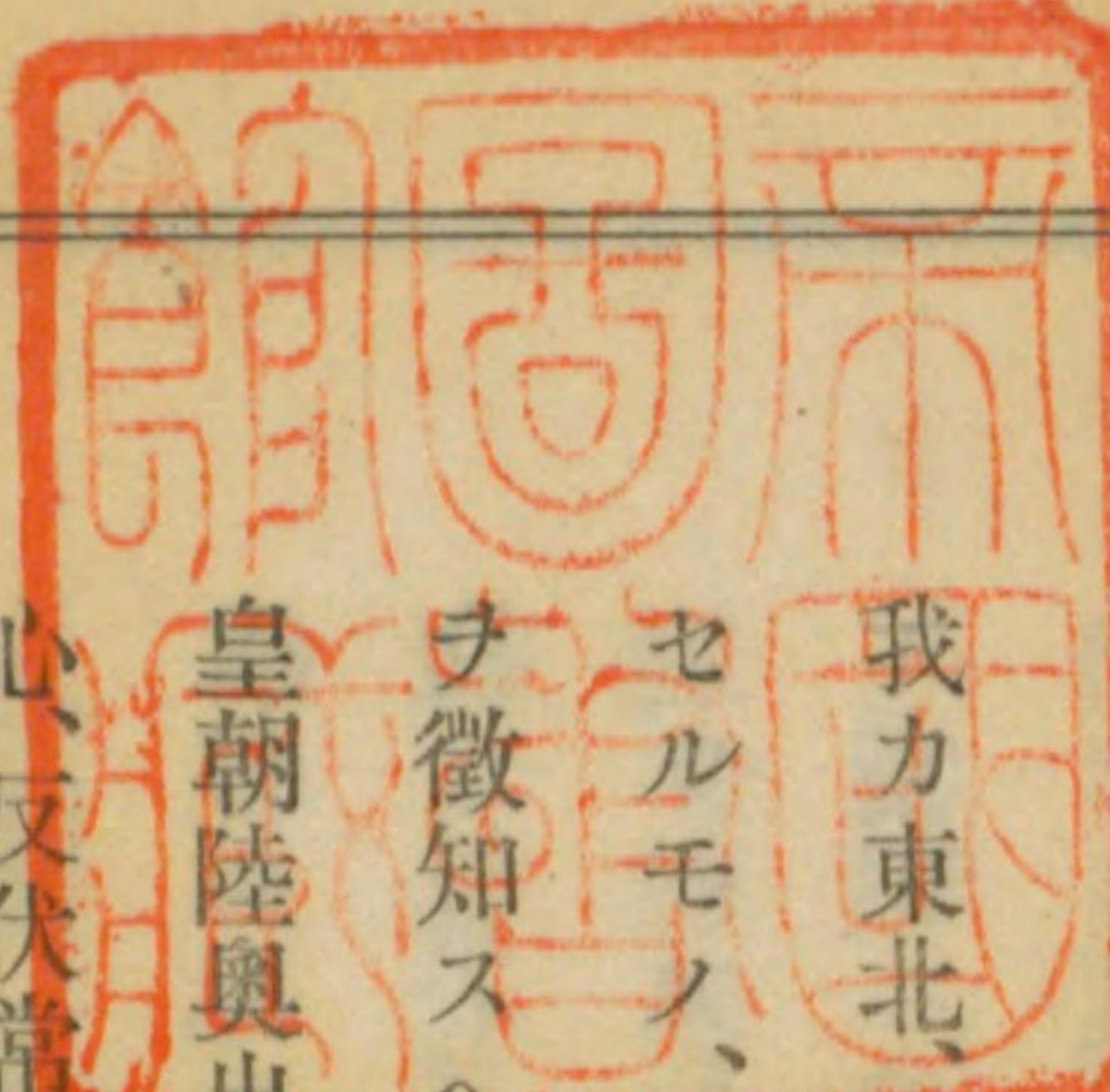
郡史編纂委員共編

總說

我力東北、上古ノ事邈焉茫焉、孰力得テ之ヲ考ヘン、唯其石土両器ノ所在ニ分布
セルモノ、以テ國史ノ所謂蝦夷蝦狄ノ上ニ於テ、曾テ人類ノ栖息蕃衍シタルコト
ヲ徵知スヘシ、然レトモ其年代悠遠、今得テ之ヲ知ル能ハサルナリ。

皇朝陸奥出羽兩國ヲ建置セラレヤ、所謂蝦夷蝦狄ノ東西ニ蟠居セルモノ、豺性狼
心、反伏常ナク、風塵ノ警曾テ絶ヘス、歷聖苦心、牧宰ヲ簡ミ、將帥ヲ擇ミ、撫字討

伐、以テ其馴服ヲ企圖セラレタリ、今之ヲ國史ニ徵スルニ、按察使アリ、鎮狄將軍
アリ、國守アリ郡領アリ、邑長アリ、人民ヲ移シテ以テ氏長ヲ命シ、道路ヲ開キ舟
楫ヲ通シ以テ交通ニ便シ、神社ヲ建テ以テ敬神ノ道ヲ知ラシメ、佛寺ヲ設ケ以テ
宗教ノ念ヲ興サシメ、孝貞ヲ表彰シ、以テ人倫ヲ篤クス、凡ソ民ヲ導キ、俗ヲ化シ



以テ郁文ノ治澤ニ沐浴セシメラル、所以ノモノ、又以テ加フルコトナシ、朝廷ノ東北ニ於ル、其恩澤豈ニ深カラスヤ、豺性狼心アリト謂フト雖モ馴服セサルヲ欲シテ得ヘケンヤ。

藤原氏朝權ヲ壟斷セルヨリ、卿相ノ徒、驕奢淫佚、曾テ遠猷ノ家國ニ及フモノナシ、而テ其東北ニ於ル目スルニ、夷狄ヲ以テシ、殆ト之ヲ國民視セス、其國司タリ、鎮將タルモノ、多クハ遙領遠管、曾テ人民ト相親マス、地方豪族ヲシテ民人ヲ司牧セシメ、其誅求督責セル所ノモノハ、租ノミ、調ノミ、未タ曾テ仁政ノ斯民ニ及フモノアルヲ視ス、安部清原二氏、叛亂相尋キ、東北ノ地再タヒ寧歲ナキヲ致シタルモノ、果シテ誰カ罪ソヤ、是ノ時ニ當リ良司賢將民ト相親ム、往昔ノ事ノ如クナラシム、民ノ歸セサルニ由テ而テ背叛スルコトヲ得ンヤ。

藤原清衡ノ奥羽二州ヲ押領セルヨリ、父子三世相續テ二州ヲ專斷ス、權勢ノ隆ナル、殆ト君主ノ如ク然リ、平氏ノ朝權ヲ弄スルヤ、二州ノ地遺シテ顧慮セス、是ニ於テ藤原秀衡ノ勢威愈ヨ益ス強大ナリ、其平泉毛越諸寺ノ、殆ト東大興福諸寺ト

相拮抗セルモノ、以テ其威福ノ斑ヲ徵スヘカラサランヤ。

源賴朝ノ平氏ヲ倒シテ、而テ霸ヲ鎌倉ニ創ムルヤ、顧ニ天下ノ最モ畏懼スヘキモノ、藤原秀衡ノミ、其死スルニ及テ、三道來攻、其根據ヲ顛覆シ、其子孫ヲ魚肉シ、代ルニ其親信家人ヲ以テシタリ、之ヲ我カ羽ニ徵スルニ、大江氏ノ寒河江ニ於ル、工藤氏ノ谷地ニ於ル、大江氏ノ長井ニ於ル、武藤氏ノ田川ニ於ル、小野寺氏ノ雄勝ニ於ル、淺利氏ノ秋田ニ於ル、是レナリ、源氏ノ絶統セルヤ、北條義時其戚族ヲ以テ、弁毛將軍ヲ擁立シ、己レ其柄ヲ握ル、天下ノ事亦言ニ忍ヒサルモノアリ、是レ豈ニ承久ノ役アリシ所以ニ非ス哉、此役ヤ獨リ大江親廣、王事ヲ勤テ而テ譴責セラル、其死ヲ免ルヲ得タリシモノ、其レ或ハ父廣元ノ蔭ニ縁レルニ非リシ歟、是ヨリ後、北條氏ノ威勢海宇ヲ聳動シテ、天下ノ事只其ノ爲サント欲スル所ノマナリ、而テ男泰時頗ル聰明、治體ニ通曉セリ、貞永ノ式目、以テ其大概ヲ視ルニ足ル、海内靡然北條氏ニ嚮往シタル所以ナリ、高時ノ時ニ至リ、驕傲淫蕩、亦政治ヲ以テ急トナサス、而テ積威ノ約スル所口、海内帖然、誰カ敢テ之ヲ侮ランヤ、安藤

氏亂ヲ煽ニ及テ、北條氏ノ鼎始テ輕シ、所謂一夫難ヲ唱ヘテ、四海鼎沸、九代ノ霸圖憐ムヘシ燦土タリ。

建武中興ノ成ルヤ、公卿宮嬪ト志ヲ一時ニ得テ而テ恩寵ヲ濫受シ、有功武人ヲ凌辱シ、武人ヲシテ憤怨不平、朝政ヲ厭苦シ、武治ヲ謳歌シ、遂ニ足利尊氏ヲシテ雲蒸龍變セシムルヲ致セリ、是レ中興ノ忽チニ成リテ、而テ忽チニ敗レタリシ所以ナリ、慨クニ勝ユヘケンヤ。

南北分立ノ秋ニ當リ、北畠親房、父子、奮テ身ヲ顧ミズ、正統天子ヲ擁衛ス、而テ阿蘇菊地名和楠木新田ノ諸族、我東北結城田村伊達葛西南部大江武藤諸族ト、東西足利ヲ犄角シ、以テ正統三世五十餘年、足利氏ヲシテ大ニ志ヲ得セシメサリシモノ他ナシ、全ク諸氏ノ忠義ニ因ルト云ハサルヘカラス、足利氏東北忠義ノ倔强ヲ憂ルヤ、或ハ餌シテ而テ之ヲ誘キ、或ハ威シテ而テ之ヲ屈シ、或ハ親族諸將ヲ分封シ、以テ勅王諸氏ヲ壓迫セシム、斯波兼頼ノ我カ羽ニ按察使タリシモノ、以テ其計畫ノ如何ヲ視ルヘシ、足利氏ノ志ヲ京師ニ得ルヤ、鎌倉府ヲシテ東北ヲ所

管セシメ、尋テ笹川稻村二府ヲ置キ、以テ專ラ東北ヲ管領セシム、未タ幾許ナラス、鎌倉二府ト内訌シ、其極ヤ二府ト鎌倉ト相共ニ傾覆シテ、而テ京師亦隨テ微弱ナリ、是ヨリノ後、六馬橫逸海内瓦潰、王室將家ト其衰微ヲ極ムルニ至レリ、之ヲ要スルニ十有二代殆ト寧日ナクシテ亡ヒタルモノ、豈ニ所謂天網恢々疎ニシテ漏サ、ルモノ歟。

織田氏ノ起ルヤ、近ヲ攻テ而テ遠ニ交ル、我カ東北諸氏往々其籠絡スル所トナル、而テ信長猜忍刻厲、遂ニ其臣僕ニ倒サル、豐臣秀吉信長ノ將校ヨリ勃起シ、才雄ニシテ略大ナリ、數歲ノ間九國ヲ蕩平シ、關東ヲ夷滅シ、親シク會津ニ遠征シ、奥羽二州ヲ宰割シ、其土田ヲ檢シ、其貢賦ヲ定メ、以テ東北未曾有ノ革政ヲ布ク、是ノ時ニ當リ諸族ノ我カ羽ニ存スルモノ、最上秋田小野寺戸澤仁加保諸氏ニ過キス、而テ最上氏最モ大ナリ。

秀吉既ニ海宇ヲ混一シ、又カヲ海外ニ用タリ、征韓未タ畢ラス、中道ニシテ隕星ス、是ノ時ニ當リ、主幼ニ國疑フ、而テ徳川家康威望隱然、征夷ノ權早ク既ニ掌上

ニ墜ツ、寧口關原戰勝ノ後ヲ俟ンヤ、彼ノ大坂ノ亡滅ノ如キ、孤兒寡婦ト自ラ作
 スノ禍ト謂フヘキナリ。
 德川家康ノ天下ヲ掌握セルヤ、深ク海内分合ノ形勢ヲ洞觀シ、其諸侯ヲ封建スル
 ヤ、親藩譜代外藩諸侯ト、犬牙錯雜、以テ相箝制セシム、當時我カ羽ニ國スルモノ、
 曰ク上杉氏、曰ク最上氏、曰ク佐竹氏是ナリ、最上氏ノ國ヲ亡フヤ、酒井氏ヲ庄内
 ニ、戸澤氏ヲ新庄ニ、鳥井氏ヲ山形ニ、松平氏ヲ上山ニ、酒井氏ヲ左澤ニ、岩城氏
 ヲ龜田ニ、仁加保氏ヲ鹽越ニ、打越氏ヲ矢島ニ分封セリ、仁加保打越ニ氏滅ヒテ、
 生駒氏矢島ニ封セラル、自余ハ幕府ニ直隸シ、代官之ヲ管知セリ、而テ山形上山
 二城殆ト譜代諸侯、轉徙移封ノ地トナル、蓋シ德川氏ノ政治、上ハ皇室ヲ擁戴シ、
 下ハ國民ヲ愛撫シ、文ヲ興シ、武ヲ張り、以テ昇平無爲ノ治ヲ致シタルモノ殆ト
 三百年、之ヲ武門極盛ノ治ト云フ、豈ニ不可ナランヤ、其末葉ニ及テ、外國渡來、
 海宇震驚、而テ尊攘ノ議、討幕ノ論、湧起喧騰、將軍德川慶喜遂ニ大權ヲ奉還シタ
 リ、慶喜ノ兵ヲ舉テ敗退セルヤ、奥羽諸侯、同盟救援、未タ幾ナラスシテ降伏シ、

海内全ク定ル、是ニ於テ陸奥ヲ割テ、五國トナシ、出羽ヲ割テ、二國トナシ、藩ヲ
 定メ、縣ヲ置キ、以テ政治ニ便セリ、尋テ藩ヲ廢シ、縣ヲ置キ、郡ヲ定ム、維新ノ隆
 治實ニ茲ニ基スト云フ。
 西村山郡ハ上古陸奥國最上郡ナリ、之ヲ國史ニ考ルニ元明帝和銅四年、越後國新二出
 羽ヲ建シコトヲ請ヒ、同五年九月、出羽國ヲ建テ、十月一日陸奥國最上置賜二郡ヲ割
 テ、出羽國ニ隸セラレタリ、是レ本郡出羽國ニ隸スルノ始トナス。
 和銅四年辛亥、自越後國言、新建出羽。
 同五年、秋九月、己丑、太政官議奏曰、建國辟疆、武功所貴、其北道蝦狄、遠憑阻險、實縱狂心、屢驚
 邊境、望置一國、奏可之、於是始置出羽國、冬十月丁酉、朔、割陸奥國最上置賜二郡、隸出羽焉。
 (職原私抄)人王四十三代、元明天皇、御時、彼國地廣而困難治、於其國端、如鳥翼之地分出、和
 銅五年九月、曰出羽國。
 按、蝦夷蝦狄ハ、自ラ別種ノ夷ナルヘ
 シ、蝦狄蓋シ肅慎人種ナランカ。
 同七年十月、尾張上野信濃越後等ノ國民、二百戸ヲ割キテ、出羽ノ柵戸ニ配ス、蓋シ今

ノ所謂屯田兵ノ類歟、靈龜元年正月、陸奥出羽ノ蝦夷、入朝シテ貢物ヲ獻ス、元正天皇、靈龜二年九月、出羽國建國、以來數年ヲ經過スト雖モ、吏民少稀ニ狄徒モ、未タ馴從セサルヲ以テ、從二位中納言巨勢朝臣萬呂ノ建言ニヨリテ、置賜最上二郡、及ヒ信濃上野越前越後四ヶ國ノ百姓、各百戸ヲ以テ出羽國ニ隸セラレ、從四位下太朝臣安摩呂ヲ以テ氏ノ長トセララル。

養老四年正月、渡島津輕ノ津司、從七位上諸君鞍尾等、六人ヲ靺鞨國ニ遣ハシテ、其風俗ヲ觀察セシメララル。

按、津輕渡島ノ間ハ、當時早ク交通開ケ、今ノ海峽ノ兩間ニ津司ヲ置キテ、交通ノ便誼ヲ司ラシメラレタルナルヘシ、津司等ハ航海ノ業ニ孰セルヲ以テ、靺鞨國地方觀察ノ任命ヲ蒙リタルナラン。

同年九月、從五位下阿部朝臣駿河ヲ持節鎮狄將軍トナシ、軍監軍曹各二人ヲ副ヘ、即日節刀ヲ授ケ給フ、陸奥ノ蝦夷反亂シテ、按察使上毛朝臣廣人ヲ殺シタルヲ以テナリ。同五年八月、出羽ヲ以テ陸奥ノ按察使ニ隸セララル。同七年九月、出羽國司正六位上多治比真人家主ノ奏請ニ因リ、有功ノ蝦夷五十人、勳

績ニ隨テ賞爵ヲ加ヘ玉フ。

九月己卯、出羽國司正六位上多治比真人家主言、蝦夷等摠五十人、功効已顯、酬賞未霑、仰頭引領、久望天恩、伏惟芳餌之末、必繫深淵之魚、重祿之下、必致忠節之臣、今夷狄愚暗、趨奔命、久不撫慰、恐解散仍具狀請裁、有勅隨彼勳績、並加賞爵。

按、多治比真人家主ハ、出羽國司ノ初任人ナラン、又出羽蝦夷ノ王命ニ服從シテ、奔走セルハ、此時ヲ最初ト視ルヘキカ、去歲陸奥蝦夷ノ叛亂シテ、出羽ノ蝦夷王命ヲ奉シテ、征討ニ從事セララルカ。

聖武天皇、天平五年十二月、出羽柵ヲ秋田村高清水岡ニ遷置シ、雄勝村ニ郡ヲ建テ、民ヲ居ヘラル。

按、出羽柵ハ、現今ノ田川郡ニアリタルナラン、是ニ至リテ、秋田村ニ遷サレタリ、以テ蝦夷追討ノ歩武ヲ進メタリシコトヲ視ルヘシ、但シ國府ハ依然トシテ田川郡ニアリシナリ、又當時雄勝村未タ征服ニ歸セス、只建郡居民ノ計畫ナリタリシコトナルヘシ。

同九年正月、是ヨリ先、陸奥按察使大野朝臣東人等言ス、陸奥國ヨリ出羽柵ニ達スルニ、道路男勝ヲ經サレハ行程遷遠ナリ、請フ男勝村ヲ征シテ、以テ直路ヲ通セン。

續日本紀、九年春正月丙申、先是陸奥按察使大野朝臣東人等言、從陸奥國、達出羽、道經男勝、

行程迂遠、請征男勝村、以通直道。

按、

五年出羽柵ヲ秋田ニ遷置セラレタリ、是ニ於テ陸奥府ヨリ出羽柵ニ通スル路男勝ヲ經由セサレハ、行程迂遠ニナリタリ、是レ東人ノ新道開鑿ノ建議アリタリシ所以ナリ、本文經男勝行程迂遠ニテハ、更ニ通スヘカラス、想ニ經字ノ上ニ不ノ一字アリテ、傳寫ノ際之ヲ脱落シ、後人地利ヲ察セス、千古贖々ヲ致シタルナリ、又按出羽柵ノ田川郡ニアリシキハ、陸奥ヨリノ通路ハ有耶無耶ノ關ヨリ、今ノ山形天童寒河江白岩ヲ經テ、六十里越ヨリ田川ニ出テタルナラン、佐藝白谷ノ驛路タル、月山白岩須波等ノ諸神ノ早ク國史ニ明カナル、以テ其證トナスニ足ラサルカ。

同年三月十一日、是ヨリ前大野東人將ニ男勝村ヲ征セントシ、自ラ教導シテ多賀柵ヨリ、最上郡玉野ニ達スル道路ヲ開通ス、道程一百六十里、或ハ石ヲ剋シ樹ヲ伐リ、或ハ濶ヲ填メ亭ヲ疎ス、但シ賀美郡ヨリ出羽國最上郡ノ玉野ニ至ル、八十里間、形勢險阻ナリト雖モ、大艱難ナシ、又玉野ヨリ賊地比羅保許山ニ至ル、中間八十里ハ、地勢平坦ニシテ危險アルコトナシ、又狄俘ノ言ヲ聞キ、男勝間ノ地形ヲ詳ニシテ而テ、多賀柵ニ旋ル。

同月十一日、將軍東人廻至多賀柵、自導新開通道、總一百六十里、或刻石伐樹或填濶疎亭、從賀美郡至出羽國最上郡玉野、八十里、總是山野形勢險阻、而人馬往還、無大艱難、從玉野至賊

地比羅保許山、八十里、地勢平坦、無有危險、狄俘等曰、從比羅保許山至雄勝村、五十里、其間平唯有兩河、每至水漲、並用船渡。

按、

續日本記コノ一段ヲ、四月一日東人大室驛ニ至ルノ後ニ記シタリ、サレハ同月十一日東人廻至多賀柵云々甚々通スヘカラス、是レ蓋シ筆者ノ錯簡ヲ致シタルナリ、故ニ同月十一日ハ三月十一日ニシテ、四月十一日ニ非ス、又東人ハ以前ニ自ラ出張シテ通路ノ事ヲ指揮シ、賊地ノ狀況ヲモ探問シテ、然ル後ニ多賀柵ニ還リ、二十五日始テ啓行ヲ催シタル事ト知ルヘシ、先輩此事ニ於ル徒ニ字句ノ間ニ拘泥シテ、大勢ノ上ヨリ達觀セス、故ニ錯簡ヲ致シタルヲ覺ラサルノミ。

同年三月二十五日、將軍大野東人多賀柵ヲ發シ、四月一日部内色麻柵ヨリ、出羽國大室驛ニ到ル、出羽國守(國守ノコトトコ)正六位下田邊史難波、部兵五百人、服狄一百四十人ニ將トシテ、以テ待ツ、三日、東人ト共ニ賊地ニ進ム、同四日難波東人ト共ニ道ヲ開キ、玉野ヨリ進テ賊地比羅保許山ニ屯ス、既ニシテ難波ノ議ニ從ヒ攻撃ヲ賊地ニ加ヘスシテ退還シ、其事情ヲ奏聞ス。

二十五日、將軍東人從多賀柵發、四月一日帥使下判官從七位上紀朝臣武良士等、及所委騎兵一百九十六人、鎮兵四百九十九人、當國兵五千人、歸服狄俘二百四十九人、從部内色麻柵發、即日到出羽國大室驛、出羽國守正六位下田邊史難波、將部内兵五百人、歸服狄一百四十人、在此驛相待、以三日與將軍東人共入賊地、且開道而行、但賊地雪深馬駕難得、所以雪消草

生始發遣。

四月四日、軍屯賊地比羅保許山、先是田邊難波狀備、雄勝村俘長等三人來降、拜首云、承聞官軍欲入我村、不勝危懼、故來請降者、東人曰、夫狄俘者甚多、奸謀其言無恒、不可輒信、而重有歸順之語、仍其平章難波議曰、發軍入賊地者、爲教諭俘狄、築城居民、非必窮兵殘害、順服若不許、其請凌厭直進者、俘等懼怨、遁走山野、勞多功少、恐非上策、不如示官軍之威、從此而返、然後難波訓以福順、懷以寬恩、然則城廓易守、人民永安者也、東人以爲然矣。

按、此役ヤ、東人等只北征ノ道路ヲ開通スルノミ、未タ雄勝村ニハ到ラスシテ旋リタルナリ、又比羅保許山古來其所在ヲ知ラス、地利ヲ以テ之ヲ考フルニ、今ノ黑林山ノ邊ナルヘシ、又此役出羽國守難波ノ最上郡大室驛ニ至リシハ、六十里越ヨリ白岩寒河江谷地ヲ經テ至リシコト知ルヘシ、此ノ時國府ヨリ最上川ノ南岸、又ハ北岸ニ今ノ新庄ヲ經テ大室驛ニ至ルノ道路アリシナラハ、玉野ヨリ雄勝ニ至ル中間ニ賊地ハナカルヘキナリ、又雄勝村ノ建郡マテニ功果ノ擧リタルハ、出羽ノ柵兵ノ功ニテ、陸奥方面ヨリ征討シタルモノニ非サルヲ視ルヘシ。

孝謙天皇天平寶字元年四月、勅シテ不孝不恭不友不順ノ者ハ、陸奥國桃生出羽國小勝ニ配シ、以テ風俗ヲ清メ且ツ邊防ヲ捍カラシメラル。

廢帝天平寶字三年九月、勅シテ陸奥國桃生城、出羽國雄勝城ヲ造ラシメラル、尋テ軍士器仗ヲ雄勝桃生ノ二城ニ貯蓄セシメラル。

同四年正月、雄勝城成ル、因テ没官ノ奴婢ヲ配置セラル。

正月丙寅勅曰、先帝數降明詔、造雄勝城、其事難成、前將旣困、然今陸奥國按察使兼鎮守軍正五位下藤原惠美朝臣朝獵等、教導荒夷、馴從皇化、不勞一戰、造成旣畢、辛未沒官奴二百三十人、婢二百七十七人、配雄勝柵、並從良人。

同年某月、出羽國雄勝平鹿二郡、及ヒ玉野避翼平戈橫河助河等ノ驛次ヲ始ム。

始出羽國雄勝平賀二郡、玉野避翼平戈橫河助河陸奥嶺臺等之驛遞。(奥羽春秋)

同七年七月、從五位上藤原朝臣田麻呂、陸奥出羽按察使ニ任ス。

光仁天皇寶龜二年正月朔日、陸奥出羽ノ蝦夷、各其風儀ニ依リテ拜賀ス。

同六年十月、出羽國蝦賊ノ餘燼未タ平殄セス、因テ鎮兵九百九十六人ヲ請ヒ、且ツ國府ヲ遷サンコトヲ請フ、勅シテ相摸武藏上野下野四國之兵士ヲ發遣セラル。

同七年二月、陸奥國奏ス、四月上旬ヲ期シ、軍士二萬人ヲ發遣シ、當ニ山海二道ノ賊ヲ討スヘシト、因テ出羽國ニ勅シテ、軍士四千人ヲ發シ、雄勝ヨリ其西邊ヲ討タシメラル、五月出羽國志波村賊叛逆ス、官軍利アラス、下總下野常陸等ノ騎兵ヲ發シテ之ヲ

伐タシメラル。

按、

此ノ役出羽ノ官軍西面ヨリ陸奥ノ志波村ノ賊ヲ討伐シテ、敗績シタル事ナ
ルヘシ國史ノ編者地理ト事情ニ通セス斯ノ如キ記述ヲナシタルナラン。

同年十一月、陸奥ノ軍三千人ヲ發シ、膽澤ノ賊ヲ伐シム、出羽國俘囚三百五十八ヲ太宰府ノ管内、及ヒ讚岐國ニ配置シ、其七十八人ヲ諸司、及ヒ參議以上ニ班賜シテ奴トナサシメラル。

同八年五月、相摸武藏下總下野越後諸國ニ勅シテ、甲二百領ヲ出羽國ノ鎮戍ニ送ラシメラル、十二月、陸奥鎮守將紀朝臣廣純奏ス、志波村ノ賊蟻結シテ毒ヲ肆マ、ニセリ、出羽國軍コレト相戰ヒ敗退セリト、是ニ於テ近江介、從五位上佐伯宿禰久良麻呂ヲ鎮守權副將軍トナシ、出羽國ヲ鎮セシメラル。

按、

本條ニ至リテ、志波村ハ出羽ナラスシテ、陸奥ナルコトヲ視ルヘシ、國史ノ奥羽地方ヲ記録スルモノ、往々誤謬ヲ免レス、文ニ據リテ事情ヲ害スヘカラス。

同九年六月、陸奥出羽ノ國司以下征戰ニ功勞アリシ者、二千二百六十七人ニ爵位ヲ賜フ。

同十年九月、是ヨリ前、渤海及ヒ鎮利、三百五十九人、來航シテ出羽ニ在リ、勅シテ之ニ供給シ、其舟船ヲ修造セシメ、又歸藩ノ日ハ、留滯セシムルコト勿ラシメラル、又陸奥出羽ニ勅シ、常陸ノ調繩、相摸ノ庸綿、陸奥ノ稅布ヲ、渤海鎮利等ノ祿ニ充テシメ、嚴寒海路難嶮ノ日ハ、留滯ノコトヲ恣聽セシメラル。

同十一年三月、陸奥國上治郡大領、外從五位下伊治公皆麻呂反シテ、按察使參議從四位下紀朝臣廣純ヲ伊治城ニ殺ス、陸奥大ニ亂ル、中納言藤原朝臣繼繩ヲ征東大使トナシ、從五位上安部朝臣家麻呂ヲ出羽ノ鎮狄將軍トナス、八月出羽國鎮狄將軍安部朝臣家麻呂等俘囚ノ言ニ從ヒ、秋田由利ノ舊柵ヲ保存シ、以テ俘情ヲ安ンシ、且ツ國府ヲ田川ニ存置シ、河邊遷移ヲ中止セラレンコトヲ請フ、コレヲ允サル。

九月己卯、出羽國鎮狄將軍安部朝臣家麻呂等言、狄志良須、俘囚宇奈古等歎曰、已等據憑官威、久居城下、今此秋田城、遂永所棄歟、爲番仍舊還保乎者、下報曰、夫秋田城者、前代將相相僉議所建也、御敵保民、久經歲叙、一旦舉而棄之、甚非善計也、宜遣多少軍士、爲之鎮守、勿令軻彼歸服之情、仍差使國司一人、以爲專當、又由理柵者、賊之要害、承秋田之道、亦遣兵相助防禦、但以寶龜之初、國司言秋田難保、河邊易治者、當時之議、依治河邊、然今積以歲月、尙未移徙、以此

言之、百姓重遷明矣、存此情思、問狄俘並百姓等、具言彼是利害。

按、寶龜六年出羽國府ヲ遷サシテ、河邊ナリシコト本條ニ於テ之ヲ視ル、又遷移ノ行ハレサリシハ、人民ノ反對ニ出タル

ナリ。コト明

同年出羽國大室賊ノ要害タルヲ以テ、將軍及國司ニ勅シテ非常ヲ防禦セシメラル。

十二月、庚子、勅曰、如聞出羽國大室塞等亦是賊之要害也、每伺間隙、頻來寇掠、宜仰將軍及國司、視量地勢、防禦非常。

按、天平九年四月、出羽國守田邊史難波大室驛ニ屯駐シ、大野東人ニ玉野驛ニ會見セシコト前條ニ明カナリ、是ニ至リ大室塞賊ノ要害トナルモノハ、當時比羅保許山ノ賊ヲ討

平セスシテ退還シタルニ因リ再ヒ賊ニ占據セラレタリシナルカ、此間ノ首尾甚タ明確ヲ得難シ。

桓武天皇延歷四年、某月、釋空海湯殿山權現ヲ創ム。

延曆四年、釋空海開湯殿山。(奥羽春秋)

同五年九月、渤海國ノ大使、李元泰等、出羽ニ漂着ス、國府之ヲ京師ニ奏聞ス。

同十五年正月、從五位下越後守坂上大宿禰ヲ以テ、陸奥出羽ノ按察使陸奥守トナス、

十月鎮守府將軍ヲ兼シメラル。

同二十一年、毎年越後國米一萬六百斛、佐渡國鹽一百二十斛ヲ、出羽國雄勝城ニ運送シテ、鎮兵ノ糧トナサシメラル。

同二十三年、正月、坂上大宿禰田村麻呂ヲ征夷大將軍ニ任ス、十一月、出羽國秋田城ヲ停廢センコトヲ奏ス、勅シテ之ヲ允シ、建テ郡トナサシメラル。

十一月、癸巳出羽國言、秋田城建置以來、土地磽确、不宜孤居、水陽無隣、相救、伏望永從停廢、云者、宜停城爲郡。

平城天皇、大同三年五月、畿内觀察使從四位上藤原緒嗣ヲ、兼陸奥出羽按察使トナス。

嵯峨天皇、弘仁元年八月、從四位上右大辨藤原朝臣藤嗣ヲ、陸奥出羽ノ按察使トナス。

同三年三月、大政官府兼仗員ヲ加減セラル、陸奥出羽ノ加減左ノ如シ。

按察使四人、元三人、今加二人

鎮守府將軍三人、減一人、定二人

同年十一月、朝廷、參議行大藏卿陸奥出羽按察使勳四等文室朝綿麻呂ノ奏請ヲ允シ、

西海諸道ノ例ニ據リ、陸奥出羽ノ史生、及弩師ノ年期ヲ、五ケ年ト定ム。

同四年五月、從三位文室綿麻呂征夷大將軍二任ス。

同六年正月、從五位上左馬頭小野朝臣峯守ヲ陸奥守トナス、峯守ノ將ニ發セントスルヤ、釋空海詩ヲ賦シテ之ヲ送レリ、其詩以テ當時京畿ノ東北地方ヲ視ルノ狀情ヲ知ルヘシ、其詩左ノ如シ、

贈野陸州歌并序

戎狄難馴、邊笳易感、自古有、今何無、公抱大厦之材、出鎮豺狼之境、堂中久闕定省之養、魏闕遠阻龍顏之謁、雖云天理合歡、然人情豈無感歎、貧道與君遠相知、山河雲水、何能阻、白雲之人、天邊之吏、何日無念、聊抽拙歌、以充邊露之解頤。

日本麗城三百州、就中陸奥最難柔、天皇赫怒幾按劍、相將幄中爭馳謀、往帝伐今上憂時、時牧守不能剗、自古將軍悉啾々、毛人羽人接境界、猛虎豺狼處々鳩、老鷄目、猪鹿裘、髻中插著骨毒箭、手上每執刀與矛、不田不衣逐麋鹿、靡晦靡明山谷遊、羅刹流非人傳、時々來往人村里、殺食千萬人與牛、走馬弄刀如電擊、彎弓飛箭誰敢囚、苦哉邊人每被毒、歲々年々常喫愁、我皇爲世出能鑿、亦咨焉及局、千人萬人舉不應、唯君一箇帝心抽、山河氣、五百賢、允武允文得自天、九流三略肚裏吞、鵬翼一搏睨此境、毛人面縛側城邊、凶兵蘊庫待冶鑄、智劍滿胷幾許千、不戰不征自無敵、或男或女保天年、昔聞媯帝干舞術、今見野公略無匹、京邑梅花先春開、京城楊柳茂春

日、邊城遲暖無春藥、邊壘早冬無茂實、天雖高聽必卑、况乎鶴響九阜出、莫愁久住風塵裏、聖主必封萬戶侯。

同年三月、朝廷、中納言兼右近衛大將行陸奥出羽按察使勳三等巨勢朝臣野呂ノ奏請ヲ允シ、出羽國內ノ良馬、軍用ニ堪フルモノハ、肆ニ國境外ニ輸出スルコトヲ禁斷ス、但驛次使用ノ馱馬ハ、之ヲ禁外トナス。

三月辛卯、太政官府禁斷出馬事、右中納言兼右近衛大將從三位行陸奥出羽按察使勳三等巨勢朝臣野呂奏狀、你軍國之用、莫先於馬、而權貴之使、豪富之民、互往來、搜求無斷、遂則託煩吏、民犯強夷、兼復兵馬難得、仍去延曆六年下勅、勅府特科條、而年久世移、押習不遵、望請新下嚴制、更增禁斷者、被右大臣宣你奉勅宣、強壯之馬、堪充軍用者、勿出國境、若違此制者、罪依先府物則沒官、但馱馬不在禁限、其出羽國宜准此。

同十年四月、大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣ニ宣詔シ、公私利錢ノ制ヲ、路頭ニ條示シ、改メサルモノアレハ、法制ヲ加ヘシム。

四月己卯、被大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣詔、有制無斷、無懲有犯、朝章之設、豈其然哉、宜重下知嚴加勾當、並條示路頭令衆庶知、若猶不改、置以法制。

同十三年正月、朝廷大納言正三位兼行、式部卿藤原朝臣緒嗣ノ奏請ヲ允シ、諸國驛次、馬、十匹以上ヲ有セル驛家ハ、戸別ニ稻二百束ヲ、未滿ノ驛家ハ戸別二百束ヲ給シ、又馱子ノ土田ヲ乞スルモノアレハ、百姓ノ要地ヲ除キ、好田一處ヲ授ケシメラル。

十三年春正月、丁酉、太政官府、應驛戸、給借賦、並四分田授一所事、右檢大納言正三位兼行式部卿藤原朝臣緒嗣奏狀、你昔任陸奥出羽按察使日、道經東山、略問百姓之苦、天下重役莫過驛戸、夏月飲河、不顧產業、冬日履霜、常事遞送、雖寬免其庸徭、勤苦倍於平民、伏望諸國驛子、准書生例、每戸量給借賦二百束、兼擇家近側好田、混授一處、縱令雖有雜田、換充寬村、然則零落驛丁有便、會集上下、公使無煩稽滯、臣之管見、不可敢不奏、謹錄事狀、伏聽天裁、者右大官宣奉勅、宜依奏狀、者仍須有驛馬十匹以上、驛家々戸々別給二百束、不滿十匹者、戸別百束、其田者除百姓要地之外、隨驛子願、授一處。

淳和帝、天長元年八月、正二位行中納言、兼右近衛大將春宮大夫、陸奥出羽按察使良峯朝臣安世ノ奏請ニヨリ、諸國守當仁者ハ、數國ノ政務ヲ兼滯スルコトヲ允サル。

秋八月壬辰、太政官府府任國、一擇國司事、右檢正三位行中納言右近衛大將春宮大夫陸奥出羽按察良峯朝臣安世奏狀、你國守者古之刺史也、當仁之人、不可兩得、伏望令一良守、兼帶數國大小之政、從其所請、一兩僚屬亦依請任之、又祿不厚、則人不勸、人不勸、則治不立、伏望其

公麻者、攝國之中、擇其殷阜、以二等分給者、宜試於一國、明知治否、然後令兼之。

同七年正月三日、出羽國府大地震アリ被害巨多、驛傳以テ之ヲ奏聞ス。

正月廿八日、自出羽國傳驛言、秋田城、國守正六位上藤原行則、今日辰時、大地震動、響如雷霆、城郭官舍、並四天王寺、丈六佛像、四天王等、皆悉顛倒、城内外家屋、人民爲之所擊殺者十五人、支體折損之類、百餘人、地裂或二十丈、或三十丈、大河涸盡、流細如溝、(中)山岳震動、一時七八度、後害難知云々、總陸奥諸郡動搖、山岳崩裂、埋谿谷。

按、此震災ハ秋田城ニ非ス、田川國府ノ震災ナリ、秋田城ト國府ハ自ラ別ナリト知ルヘシ。

同年三月、詔シテ、出羽震災ヲ救恤セラル、是月陸奥出羽疫癘流行シ、天死スルモノ稍多シ。

三月戊辰、詔曰、云々、如聞出羽國、地震爲災云々、租調開倉廩、賑壓亡之倫、早從葬禮、己巳大宰管内、及陸奥出羽等國、疫癘流行、天死稍多。

同年閏十二月、國守從五位上勳六等小野朝臣宗城等ノ奏請ニヨリ、官員ヲ增加セラル左ノ如シ。

大小目各一員、元員二人、今加二人

史生四員、元員三人、
今加一人

閏十二月(中)國守從五位上勳六等小野朝臣宗城等解任、此國頃年戶口增益、倉庫充實、稽于
遂初、寔爲敦繁、又雄勝秋田邊城、及國府戎卒未息、關門猶閉、配此數處、國司少員、方今雖干戈
不動、邊城靜謐、而豺狼野心、不可不慎、望請唯人數增加官員者、聖人垂教、沿革在適於時、元后
臨民、法令貴於便物、然則雖役職合官、既煥乎舊典、而權宜改易、事歸乎財成、臣等商量所定如
右、右伏聽天裁、謹奏聞。

按、

本條ノ奏聞ハ、本年以前ノ事ニシテ、只
其允可ハ、本年ニ出タルモノナルヘシ。

仁明天皇、承和二年十二月、陸奥出羽ノ夷俘、制禁ヲ犯シ、境域ヲ濫出シ、京師ニ出入
スルヲ以テ、兩國ノ按察使、國司鎮守府將軍等ヲ譴責セラル。

十二月甲戌、夷俘出境、禁制已久、而頃年任意、入京有徒、仍下官府、譴責陸奥出羽按察使并國
司鎮守府等。

同四年六月、出羽國守小野朝臣宗成奏請シ、濟苦院ヲ最上郡ニ建立シ、又同所國分ニ
寺ニ佛像ヲ奉造シ、並ニ雜經四千餘卷ヲ筆寫シテ之ヲ納ル。

六月丁酉、依從五位下勳六等小野朝臣宗成請、勅聽出羽國最上郡建立濟苦院一處、又宗成

所同國分二寺奉造佛菩薩像、並寫得雜經四千餘卷。

按、

最上郡濟苦院ハ、今山形市柏山寺蓋シ其遺蹟ナルヘシ、同地ハ殆ト陸奥府ト出羽府ト
ノ中間ニ位置シタリ、且ツ出羽府國分寺二寺ハ、去ル天長七年正月ノ震災ニ顛倒シタ
レハ、姑ク此ノ二寺ヲ濟苦院ノ中ニ合併シテ、佛像經論等ヲ造立書寫シタルナルヘ
シ、後世濟苦院ノ名消滅シテ、國分寺ノ名ノミ傳リタル歟、又本文所同ハ同所ノ誤カ。

同五年五月、出羽國從五位上勳五等、大物忌神ニ、正五位下ヲ授ケ給フ。

鳥海山

飽海由利二郡ニ跨る、土民日本第四の高山也といふ、拾七丁五十八間五尺壹步余有とそ、
景行天皇の御宇、大物忌神社當國へ來現、其後欽明天皇廿五年、此山ニ御鎮坐、其後平城天
皇の御宇、吹浦ニ移坐と縁記に有、跡ニ藥師の佛像、并十二神將有、堂の長サ三間、長床四間、
幅二間、飽海郡を此山の表口とく、古への吹浦、蕨岡兩別當にて、由利郡を裏口とし、矢島瀧
澤等に、衆徒有、藥師修覆田、高二十二石二斗壹升八合、蕨岡村ニ有、彼地黑印高百四十石一
斗六升三合の内也、吹浦村寺家の舊記ニ曰、鳥海山有三道者、吹浦杉澤由利也云々、今ニ杉
澤の別當坊にて、山上藥師堂の鑰を所持す、亦也。(風土記)

同六年八月、出羽國霖雨雷電、十餘日ニ亘ル、田川郡海濱多ク石器ヲ露出ス、國司拾收
シテ之ヲ送獻ス、朝廷以テ禍亂ノ兆トナシ、不虞ニ警戒セシメラル。

十月乙丑出羽國言去八月廿九日管田川郡司解備此郡西濱達府之程五十餘里本自無石而從月三日霖雨無止雷電鬪聲經十餘日乃見晴天時海畔自然隕石其數不少或似鏃或似鋒或白或黑或青或赤九厥狀體銳皆向西莖則向東詢于故老所未見國司商量此濱沙地而徑寸之石自古無有仍上言者其所進上兵象之石數十枚収之外記局勅曰陸奧出羽并太宰府等若有機變隨宜行之且以上言充制權變令禦不虞又轉禍為福是宜修法奏幣。

按、

本文此郡西濱達府之程五十里云々ヲ以テ出羽國府ノ所在ヲ由利トナスノ說アリ然
由利川郡司ノ居所ノ何レノ地タルコトヲ知ル能ハサルハ單ニ五十里云々ノミニテ
由利說ヲ主張シ難シ又云フ石鏃石劔等ノ發見ハ東北地方到ル所ニコレアリ所謂或
ハ黑或ハ赤或ハ青或ハ白ナリ而テ田川沿岸ノ地最モ多ク有リ是ノ時暴雨旬日沿岸
沙地ヲ洗滌スルニヨリテ埋没ノモノ自ラ露出シタルナリ降下シタルニハ非ス當時
ノ人未タ之ヲ知ラス以テ天降ノモノトス時ハ石器使用ノ年代ノ如キハ其悠遠知ル
ヘキノミ想ニ石器ノ如キハ當時地方蟠居ルノ蝦狄以前ノ使用器ニシテ蝦
狄ノ如キハ穀ヲ炊キテ食ヒ鏃ヲ以テ耕シ且戰フノ人種タルコトヲ知ルヘシ。

同七年正月、從五位上藤原宮房出羽守ニ任ス、七月出羽國飽海郡正五位下勳五等大物忌神ニ從四位下ヲ授ケ、神封二戸ヲ宛行ハル、去歲、八月遣唐使船南海ノ賊ト戰ヒ、之ニ勝ツ、朝廷以テ神助トナス、故ニコト命アリ、其宣命左ノ如シ。

天皇我詔旨爾坐大物忌大神爾申賜久頃皇朝爾緣有物怪天下詢爾大神爲崇賜信加以遣唐使第二船人等廻來申久去年八月爾南賊境爾漂落氏相戰時彼衆我寡氏力甚不敵奈儻而克

敵留似有神助止申今依此事氏臆量爾去年出羽國言上留太神乃於雲裏氏十日間作戰芭後爾兵石零止申之世利月日與彼南海戰間正是符契利大神乃威稜令遠被留太事乎且奉驚異且奉歡喜故以從四位爵乎奉授兩戶之封奉宛乎申賜久申。

同八年二月、年穀登ラサルニヨリ、出羽國百姓二万六百六十四人、一年ノ庸ヲ免セラ

ル。
同九年七月大納言正二位、兼行右近衛大將、民部卿陸奧出羽按察使、藤原朝臣良房上表シテ、外秩ヲ停メラレンコトヲ請フ、之ヲ許サス、上表左ノ如シ。

臣稟性愚蒙聲華寂莫陛下陳席不棄放劔無遺遂先時髦頻登清顯未堪一職兼帶四官臣感先花之早零悼前咲之後號恐高明之瞰鬼戒寵祿之過量伏青蒲而上陳仰丹闕而懇訴天未從願震灼戰兢龜組之花則非飾身之地蟬佩之映誠是集心之機譬猶以虎豹之文被犬羊之質自知不可誰曰其宜(中)伏願停兼外秩守拙內官然則拔韜略於朝彥上沸騰於與人無任惘歎之至謹奉表以聞。

同十年十二月、出羽國河邊郡ノ百姓、外從五位下勳八等奈良已智豐繼等五人ニ、姓ヲ大瀧宿禰ト賜フ、其先ハ百濟人ナリ。

同十一年六月、出羽國、最上郡人、外從八位下勳七等伴部道成男、外少初位勳九等、經益白丁吉繼秀益繼守、同姓勳九等福導等七人ニ、姓ヲ吉備侯ト賜フ。

同十三年正月、從五位下阿部朝臣安立、出羽守ニ任ス、九月、藤原朝臣富士麻呂、陸奧出羽按察使兼相摸守ニ任ス、其將ニ出羽ニ赴任セントスルヤ、天皇之ヲ清涼殿ニ召シ、恩詔鄭重被衣並絲帛ヲ賜フ、嘉祥三年二月卒ス、年三十七人、皆之ヲ悲惜ス。

文德天皇、嘉祥三年五月、出羽國ノ奏請ニヨリ、史生一員ヲ省キ、陰陽師一員ヲ置ク、其俗占驗ヲ尊フニヨルナリ、九月、出羽國地大ニ震フ、山谷所ヲ易ヘ、厭死セル者衆多ナリ、之ヲ嘉祥ノ震災ト云フ。

九月庚申、出羽國上言、地大震烈、山谷易処、厭死者衆。

仁壽元年、二月、正從五位下坂上大宿禰常岑、出羽守ニ任ス。

齊衡元年、二月、去歲陸奧登ラス、百姓困窮、所在強盜多シ、國府奏シ、援兵二千人ヲ請フ、勅シテ一千人ヲ發セシム、五月穀一萬石ヲ賜ヘ、俘夷ヲ賑給セシメラル。

同二年六月、藤原朝臣弘道出羽守ニ任ス、十月出羽國ノ百姓困窮者、一万九千餘人ノ

庸役ヲ免ス。

貞觀二年正月、從五位下橘朝臣信蔭、出羽守ニ任ス。

同五年四月、陸奧國ノ例ニ准シ、出羽國司ニ交替料ノ人夫ト馬匹トヲ給セララル。

同六年正月、從五位下行武藏介安倍朝臣比高ヲ出羽權介ニ任ス、明年正月守ニ昇進ス。

同七年四月八日、出羽國觀音寺ヲ定額寺トナス。

同八年十一月、正三位行中納言陸奧出羽按察使原朝臣融ニ勅シテ、鷹三聯、鶴三聯ヲ

飼養セシメラル。

同十一年、五月二十六日、陸奧地大ニ震ス、被害甚シ、九月詔シテ、被害民ヲ救恤セシメラル、詔書左ノ如シ。

義農異代、未隔於憂勞、堯舜殊時、猶均於愛育、豈唯地震周日、姬文於是責躬、旱流般年、湯帝以之罪己、朕以寡昧、欽若鴻圖、修德以奉靈心、莅政而從民望、思使率土之內、同保福於遂生、編戶之間、共銷災於非命、而惠化罔孚、至誠不感、上玄降譴、厚載虧方、如聞陸奧國境地、地震尤甚、或海水暴溢、而爲患、或城宇頻壓、而致殃、百姓何辜、羅斯禍毒、憮然媿悞、責深在予、今遣使者、就布恩煦、使與國司、不論民夷、勤自臨撫、既死者盡加收殮、其存者詳崇賑恤、其被害太甚者、勿輸租

調、鰥寡孤獨窮不能自立者在所斟量厚宜與濟務盡矜恤之旨俾若朕親覲焉。

同年五月廿六日、陸奥國大地震、人民伏不能起、山崩地裂、江河岸壞、水漲忽然如蒼海、山林樹木爲之深埋地底。(奥羽春秋)

同年十二月、出羽國ニ掌二員ヲ置ク、同月陸奥國正五位上勳九等刈田嶺ノ神ニ、從四位下ヲ授ケラル。

按、

陸奥大震、其方面ヲ詳ニセス、刈田嶺神昇進ノ事ヲ以テ考ルニ、其中心點ハ此ノ方面ニ在リシカ、然ラハ出羽最上置賜地方モ被害アリタルナラン、今記録ノ徵スヘキナシ姑ク附考トナス。

同十二年七月、新羅人貢綿ヲ掠取セルモノ、潤清、果才、甘參、長馬、大長、眞平、長清、大存、倍陳、連哀、等十人ヲ陸奥ニ配流ス、潤清、長馬、眞平、馬大、等造瓦ノ技ニ長ス、因テ陸奥國修理府ニ預ク、造瓦者ヲ撰擇シ、從テ傳習セシメラル。

按、

多賀府趾國分寺趾、其他古趾ヨリ發掘セル瓦片ニ各種アルハ、此等造瓦師ヨリ變化シタルカ。

同年八月、出羽國白磐神、須波神ニ從五位下ヲ授ケラル、

白磐神

重記ニ祭神詳ならぬ、三代實錄ニ出羽の國白磐神授從五位下と有、白磐館の主護神也。

乱補當光翁曰、白岩の西北三里程有、白岩の郷の内にて、葉山といへば高山也、山伏入峯の古跡にて、羽山峰入の山伏とて、一流を立ツ、三代實錄ニ、貞觀十二年八月廿八日、授出羽國白谷神須波神從五位下と有、白谷神とい、葉山の事、須波神とい、朝日嶽の事也、古へハ大地にて社領三千石と有、乱世の時領内不殘慈恩寺へ奪ひとられ、と云傳へ、今ハ土民葉山の薬師と覺來る、別當も薬師佛也と云あり、守札等ニハ葉山大權現ト書也、羽黒山にて觀音堂と覺へて、伊氏波神社にて式内の神をば、觀音といふ、一山までも參詣の者も皆觀音と稱して、有難く覺ゆ、神道の日々に衰ひ、奉仕の族も、恣に神社を佛閣とする事、歎敷事也。

朝日嶽

乱補當光翁曰、八ッ沼の西、六七里を隔ツ、高山に、て、置賜村山田川越後の四郡にま、か、登山する人稀なり、三代實錄に須波神ニ神位を授け給ふと有、此山の事也、嶽の絶頂ニ登りて見る、社迎もなく、下長井ハ參詣を、旅人有と見へ、注連掛とて、杯有、湯殿山の行人の、掛る注連と、同じ、宗古曰、八ッ沼の西に、布山といふ有、朝日嶽へ通る山道也、土民曰、旭嶽權現の社僧、三千坊舎の跡也と云傳へ、須波神へ神位を授けられ、頃の跡あるへ

其内に神職の者も有らばなるへし、今の荆棘生茂り、道を隠し、布山の少く西よ、山伏峠、位濟澤と云処、坏有、古へ山伏峰入りて、修行の地故、此名有ならん、土民此溪澗に入て、金銅の五銖銚を拾ひ得たり、土民是を奇也とて、一應寺に納む、今尙有、村老の諺、養老年中、盗賊來て、三千坊を破却し、其寶器佛像共ニ溪澗に捨り、と云傳たり、然を共何故に破却せしと云事を知らざると云へり、仁王を轉倒せらる處也、逆其地を今に仁王あるとしといふ、仁王の像流來りて、伏熊村及び平鹽村よて水中に取上り、りまを、今の平鹽寺の神舞殿に立置く。

同十三年二月、出羽國田川郡ノ人、大荒木臣玉刀自、其ノ夫ノ死去セルヨリ、守節移ラサルヲ嘉シ、叙位二階、并ニ戸租ヲ免除シ、門廬ニ表セシメラル、是レヲ我カ羽善行表彰者ノ蒿矢トナス。

二月庚寅、節婦出羽國田川郡人、大荒木臣玉刀自、夫死之後、廬於墓前、歸念佛理、守節不移、叙位二階、免戸内租、表於門廬。

同年四月八日、出羽國、飽海郡大物忌神社ノ山上、噴火ス、筮シテ禱ニ賽セス、又冢墓骸骨神田ヲ汚スノ致ス所トナス、國守之ヲ奏ス、勅シテ宿禰ヲ報賽シ、骸骨ヲ棄去セシメラル。

五月辛酉、先是、出羽國司言、從三位勳五等大物忌神社、在飽海郡山上、巖石壁立、人跡稀到、夏冬戴雪、秃無草木、去四月八日、山上有火、燒土石、又有聲如雷、自山所出之河、泥水溢、其色青黑、臭氣充滿、人不堪聞、死魚多浮、擁塞不流、有兩大蛇、長十許丈、相流入於海口、小蛇隨者不知其數、緣流損者多、或染濁水臭氣、猶不生、聞于古老、未嘗有如此之異、但弘仁年中見火、其後不幾有事、兵仗、決之著龜、並云彼國名神、因所禱未賽、又冢墓骸骨、汚其山水田、是發怒燒山、致此災異、若不鎮謝、可有兵役、是日下知國宰、賽宿禰、去舊骸汚焉。(按弘仁ノ噴火史ニ記セテ蓋シ關文ナリ)

同年閏八月、勅シテ始テ漏刻ヲ置カシメラル、是出羽國時辰計ノ始メナリ。
同十五年四月、出羽國飽海郡ノ節婦伴部、小掠賣位二階ヲ叙シ、門閭ニ旌表セララル。
同十七年十一月、渡島ノ夷狄舟師八十艘ヲ以テ、秋田飽海兩郡ヲ侵略ス、百姓二十一一人ノ力爲メニ捕獲セル、牧宰ニ勅シテ討平セシメラル。

同十八年八月、出羽國月山神ニ從三位勳六等ヲ授ケ玉フ。
月山權現 一ニ黎牛山といふ、
宗古曰、古傳曰、人王廿代、允恭天皇ノ長子、木梨輕王子、支那國ニ入、一人ノ長者有、彌陀藥師ノ二尊を安置シ、輕王子惟ふ、此二尊ハ實ハ人間世希有ノ眞靈佛也、仍て我日本邦万世永久ノ至寶とあまへとて、密に二尊を盜ミ、明日主父大に二尊ノ不在事を驚キ、天よ仰き

地は伏して是を求む共得ず、獨り輕の王を疑ふ、數々是を責求む、輕王答はに不知事を宣ひて、長者の家を去り、萬波千里を凌ぎ、我朝は歸り安置すへき地を求む共、諸岳を經く求めり共、心に應せず、羽州に至りて、初て月山の峰を見る、九霄に出て、下は三郡に跨る、北の鳥海山に隣り、南の朝日嶽は對す、羽黒山は是り麓あり、湯殿山は是り谿あり、實は神仙所遊の靈地なり、且固より神明有、則伊弉諾尊也、或は月讀尊と號し、月山大權現といふ、則其處にた佛を以其本地となして、嶺の靈囀は納む、或人曰、吉備大臣、又銀鏡を鑄て納む、藥師佛の東隣の夕山に納むといふ、按するに是則葉山權現の本地り、由不ト訓するの夕の字也、葉の字音暉音相似あり故、錯て夕山と云り。

按、月山神社、本地佛阿彌陀佛ハ、今本縣南置賜郡南原村ニ在リ、鍍金ノ銅像ニシテ、實ニ千歳ノ舊物ナリ、古縁記ニ能除太子ノ作トナス、葉山本地ノ藥師佛ハ、今其所在ヲ詳ニセ

陽成天皇、元慶元年、十一月、從五位下出羽守藤原朝臣興世、正五位下ニ叙セラル、今茲出羽登ラス。

同二年正月、外從五位下行大外忠宗朝臣、是行出羽介ニ任ス、二月散位從五位下藤原朝臣統行、出羽權介ニ任ス、四月十五日、津輕ノ夷ト出羽俘囚ト、相共ニ叛亂シテ、秋田城并ニ郡舍民家ヲ燒棄ス、鎮兵及ヒ諸郡ノ徵兵ト、之ヲ防守ス、十七日、出羽守藤原

興世飛驒之ヲ奏ス、勅シテ速ニ援兵ヲ陸奥ニ請シメ、又陸奥ニ勅シテ出羽ノ乱ヲ援ハシメ給フ、勅符左ノ如シ。

得奏狀、既知夷虜悖逆、攻燒城邑、犬羊狂心、暴惡爲性、不加追討、何有徵人、事須量發精兵、扼其喉咽、但時在農要、人事耕種、若多動衆、恐妨民務、夫上兵伐謀、良將不戰、巧設方略、以安邊民、亦有別勅符、下陸奥國、若當國之兵力不足、制者早告、陸奥令其赴救、凡蠻貊之心、候時而動、雖云醜類之可責、抑亦國宰之不良、宜施慰撫之作、以遏風塵之乱。

又勅符、陸奥國司曰、得出羽國、今月十七日奏狀、你逆賊悖乱、攻燒城邑者、兩國接地、非常難知、若無豫戒、何備不虞、宜加警肅、以鎮國內、亦若出羽國來請援兵、隨精勇、應時赴救、兵貴神速、罪深逼留、待其告急、莫失事機。

同年四月、俘囚ノ秋田城ヲ焚掠セルヤ、國司藤原興世、權椽正六位上小野朝臣春泉、文室真人有房等ヲシテ出戰セシム、衆寡敵セス、舉城燒燼、器仗皆燒ク、且ツ去歲登ラス、百姓飢弊シ、甲士勇敢ナシ、奏シテ隣國ノ援兵ヲ得ンコトヲ請フ、勅シテ陸奥ノ援兵二千ヲ發差センコトヲ報シ、重テ陸奥ニ勅シテ、精兵二千ヲ發シ、星火ニ馳救センコトヲ命セラル、其勅符左ノ如シ。

重得奏狀、具知賊勢轉盛、疽食浸淫、非常之事、變能難量、能加保遏、莫令滋蔓、去月二十九日、勅符下、彼國訖計之應到、亦國日勅符下、陸奧國、令其赴救、今重勅陸奧國、發兵二千、宜首尾合戰、及早禽獲、務盡上策、定我下土。

又下勅符於陸奧國曰、重得出羽國奏狀、你賊勢轉盛、衆寡不敵、非有救兵、難可獨制者、事既非常、或恐生變、宜發精勇二千、星火馳救、禽敵有期、失機遺悔、兵家所謂疾雷不及掩耳也、若致遲留、處以重科、其所發之士、各備路糧、依須若國司掾目各一人押領其事。

同年四月十九日、國司藤原興世兵六百人ヲ遣ハシテ、能代營ヲ守ラシム、兵燒山ニ至ル、賊兵千餘逸シテ官軍ノ後ニ出ツ、官軍殺略セラルモノ五百餘人、脫歸者僅ニ五十人、初メ俘囚ノ叛セルヤ、興世援兵ヲ陸奧ニ請フ、使者五反敢テ到ラス、是ニ於テ驛奏シテ、上野下野ノ各兵二千人ヲ發シ、亦重テ陸奧ノ惰慢ヲ責ラレンコトヲ請フ、朝廷之ヲ許ス、其勅符並陸奧上野下野ニ賜フ勅符左ノ如シ。

重得奏狀、具知凶類滋蔓、殺略良民、發兵以來、望有成效、而今官軍致敗、賊徒作氣、用兵之道豈若此乎、今敕上野下野等國、各發兵一千、亦重勅陸奧國、責以緩救、宜合三國兵、一時擒威、凡軍陣之法、必有註諸卒、大小皆在目前、察其所錄、爲圖成敗、今所上奏狀、極爲省略、胡城雲隔、魏闕天遙、路遠事疑、非可指問、必須事無巨細、委曲記錄、令可知見、老弱在所行、耕種廢務、早休染鏹

之勞、當崇橐弓之化。

勅符陸奧曰、得出羽國、今月十九日奏狀、你狡寇未平、戎士多沒、請援兵彼國、已及五度、而多經旬日、未有來救、孤城扼守、事變難測者、今如來奏、甚似惰慢、假有當府之不虞、何忘隣境之厄急、宜早差發兵二千人、應機奔救、齊心同力、撲掃妖氛、若重稽引、國有嚴刑、速施破竹之勢、勿貽反水之悔。

勅符上野下野兩國曰、得出羽國奏、已知凶類氣盛、殺略良民、鼠輩發狂、狼戾無已、不加利及、何懲逆心、宜國各發二千兵、星夜赴救、表裡合勢、腹背攻擊、凡隣境之義、實須相援、況於國賊、何不共討、若致遲留、論之如律、亦其所發之士、各備路糧、使遣國司目已上一人、史生若品官一人、押領其事、以此一舉之兵、早成万全之計。

同年同月十九日、最上郡擬大領、伴貞道、俘魁王作、宇奈麻呂五百六十人ヲ將テ、出テ賊勢ヲ偵候ス、路ニシテ賊三百餘人ニ遇ヒ、十九人ヲ射傷ス、官軍ノ被傷七人、貞道流矢ニ中テ死ス、明日賊勢增加敵スヘカラス、暮ニ及テ退營ス、二十一日賊兵來リテ挑戰ス、官軍出テ戰フ、賊兵死スル者五十二人、瘡クモノ二十人、官軍死傷二十一人、弓三十一、靱二十五、襖十七領、及ヒ米穀糶稻ヲ奪取シ、賊ノ房舍十二ヲ燒キ、七人ヲ生擒ス、

而テ官軍疲極シ、射矢亦盡ク、因テ退テ營ニ還ル。

同年六月七日、權介藤原朝臣統行、權椽小野春泉、文室有房、陸奥國ノ援軍押領大椽藤原梶尾等、總軍五千餘人、進テ秋田舊城ニ在リ、王作宇奈麻呂ヲ遣シ、賊ヲ候セシム、宇奈麻呂高二登リ候望ス、俄爾賊ニ遇フ、劔ヲ拔テ一人ヲ斬リ、遂ニ賊手ニ没ス、會々俘囚三人來リ言フ、請フ秋田河以北ヲ己カ地ト爲ント、更ニ五人アリ、甲冑ヲ着ケ草中ニ潜伏ス、輕兵百餘人追擊シテ、二人ヲ射殺ス、鞍馬弓矢靴等ノ物ヲ奪フ、而テ賊兵猥盛侵凌シテ息マス、既ニシテ賊不意ニ統行等ヲ攻圍ス、官軍敗潰ス、有房殊死戰シテ、左脚ヲ瘡ク、統行ノ男某、權督師神服直雄、並ニ戰死ス、甲冑三百領、米糒七百碩、一干條、馬五百匹、盡ク賊ノ爲メニ取ラル、自餘ノ軍器兵仗一モ存スルモノナシ、國守藤原興世、飛驒之ヲ奏ス、後ヲ戰死者ニ散位、從五位ヲ贈ラル、時ニ大納言正二位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使源朝臣、多京師ニアリ、出羽ノ潰亂セルヲ聞キ、上表シテ按察使ヲ解任セラレンヲ請フ、許サレス、其上表左ノ如シ。

臣聞器違其分榮非可榮、任越其才、量還失其量、謝中臣以無人望、過受國恩、祿秩優崇、寵命隆赫、

往年降詔、以臣本官兼督陸奥出羽諸軍事、惟彼兩地異類群居、暗昧是非、簡略禮義、頃者梟聲轉大、狼心益狂、殺我人民、燒我城邑、臣實須脚踐沙漠之地、身臨胡虜之庭、致其要領之誅、肆其爪牙之銳、而臣族非將類、門謝兵家、聚米爲山、更迷指畫之趣、簞醪投水、誰表迎飲之誠、遂使犬羊流離、不安巢穴、干戈搖動、時爲風塵、是臣之慚、々莫甚焉、是臣之罪、々莫大焉、伏願、陛下遠慮之心、罷微臣遙領之職、選龍虎以代之、推武猛以求之、則鳴鼓收沸野之聲、自當不日、嘶馬乾出塞之汗、亦得指期、無任悚悞、忝竊之至、奉表陳讓、以聞。

同年同月八日、朝廷從五位下小野朝臣春風ヲ陸奥鎮守將軍ニ任シ、兵ヲ率テ出羽國ニ向ハシメ、前將軍從五位安倍朝臣比高ヲシテ、留リ府政ヲ行ハシメラル、出羽國守藤原興世、賊鋒強盛、而テ官軍怯懦、逃散ヲ事トシ、且ツ陸奥ノ援軍將、押領藤原梶尾長等竊ニ山道ヲ求メテ、悉ク逃亡セルノ狀ヲ奏ス、即日出羽陸奥兩國ニ勅シテ、凱歸ノ効ヲ獻セシメラル、勅符左ノ如シ。

重有來奏、具得事趣、依先日奏、遣陸奥鎮守將軍、小野朝臣春風、權介坂上大宿禰好蔭等、各領精兵五百人、日夜赴彼、既畢、事具前符、亦依今日奏、更下陸奥國、追還逃亡兵士二千人、國宜知之、率其虎旅、勸彼烏合、當奉王師之威、早獻凱歸之効。

勅符陸奥國曰、得、出羽國奏、你逆虜縱逸、獷暴日甚、彼國軍士二千人、願望避敵、亡歸本國者、斷

勢制勝自有方、而今各重身軀、無意掠戰、糧資醜類、力屈強威、豈回王者之師、自貽敗軍之耻、宜更選定國司主典、已上精強了事者、令領彼亡歸二千兵、早入出羽、若彼逃亡人等、未盡歸集者、更簡吏兵、加足前數、夫將軍安死、誅之無救、故曰、有前一尺、無却一寸、宜知此意、噲夫此兵士、令其自知、若重亡歸者、以甲法從事。

其ノ後、東海東山兩道ノ諸國ニ勅シ、勇敢輕銳ノ者ヲ簡擇シ、出羽國ノ奏請ヲ待テ、機ニ應シテ奔赴セシメラル、伊勢三河ハ各二十人、遠江八十人、駿河ハ三十人、甲斐相摸各二十人、武藏下總ハ各二十人、常陸ハ五十人、美濃信濃各三十人、又相摸國ニ令シ、綿一千屯ヲ出羽國ニ輸送シ、製襖用ニ充テシメラル。

同年六月二十八日、是ヨリ前、上野ノ援軍既ニ秋田ニ到ル、下野ノ援軍方ニ境上ニ在リ、是ノ日正五位下守右中辨兼權守藤原朝臣保則奏シテ曰ク、臣國ニ到リ前事ヲ察問シ、後事ヲ籌策シ、權椽文室眞人有房、左衛門權少尉權椽清原今望、上野押領使權大椽南淵秋卿等ヲ遣シ、秋田河ノ南ニ屯シ、河北ノ賊ヲ防拒セシム、又秋田城下ノ賊地ハ、上津野(鹿角)火内(鱒内)榻淵野代河北腋本方口大河堤姉方燒岡九十二村ナリ、又一方ハ添

川霜別助川ノ三ヶ村ナリ、因テ此ノ三ヶ村ノ俘囚、並ニ良民三百餘人ヲシテ賊ヲ添川ニ防禦セシム、次ニ賊將ニ雄勝ヲ攻メ、後將ニ府ヲ侵サントス、因テ左馬大允藤原滋實、左近衛將曹兼權大目茨田直觀額等ヲ遣ハシ、雄勝平鹿山本三郡ノ穀ヲ移動セスシテ、三郡内及ヒ添河霜別加川三ヶ村ノ俘囚ニ給シ、以テ其心ヲ慰諭シ、相勵勉セシム、是ニ於テ俘囚深江加止王作正月麻呂等、三ヶ村俘囚二百餘人ヲ誘率シ、夜襲シテ賊八十人ヲ倒シ、其糧食宅舍ヲ燒却ス、恩賚ニ感シテナリ、或ハ曰ク、津輕ノ夷賊、同混ノ二種アリ、同種ハ強クシテ、混種ハ弱シト、其弱キ者ハ上野國ノ軍ヲ以テ之ヲ討滅スルヲ得ン、其強キ者ノ如キハ大兵アリト雖モ、輒ク之ヲ制シ難シ、今上野下野陸奥三國ノ軍兵、總テ四千人、而テ陸奥ノ郡ハ早ク既ニ亡ケ歸ル、上野ノ軍現在スルモノ六百人、下野ノ軍ハ既ニ境上ニ到ル、然モ未タ其強弱ヲ知ラス、而シテ津輕ノ夷賊其黨多種、其幾千人アルコトヲ知ラス、若シコノ兵ヲ以テ、逆賊ニ迎ハ、其鋒當リ難シ、請フ常陸武藏兩國ノ軍二千人ヲ合セテ、以テ非常ニ戒備セントス。

同年七月、出羽國ノ奏狀、京師ニ到ル、勅シテ小野朝臣春風、坂上宿禰好蔭等ノ著到ヲ

待テ、共征セシム、又諸國ニ令シ、現ニ勇強ヲ簡擇スルヲ以テ、危急ニ際シ馳傳上奏セ
ンコト令セラル、又藤原興世ノ男滋實會々父ヲ省シテ國府ニ在リ、勅シテ從軍セシメ
ラル、又正三位勳五等大物忌神ニ正三位勳五等月山神ニ各封二戸(本ト合テ四戸)出戰毎ニ國
司ヲシテ戰捷ヲ祈禱セシメラル、國府ニ下サル勅符左ノ如シ。

去月廿八日、奏狀今日到來、賊中消息委曲具至、指其事實、足可見知、夫以夷狄攻夷狄者、中國
之利也、今覽來奏、給雄勝郡俘囚、以官米穀、多破賊徒、豈此一舉討之上者也、亦來奏以爲津輕
夷虜、天性兇獷、若速凶類、實爲難制、塞下流言、南北異口、或云既同、或云未同、請發常陸武藏等
國兵、備其非常、出於不意、今如奏狀、同否未審、若果不同者、所率見兵、可得摧破、加之小野朝臣
春風、坂上大宿禰好蔭等、各領精兵、行當到着、宜待共征、振其威武、但豫勅諸國、今簡勇士、若有
急馳傳上奏、隨即差發、赴救非晚、務運奇策、繫其狂心。

按、勅符ニ同否未タ審ナラス、若シ果シテ不同ナレハ率ユル所ノ見兵摧破スルコトヲ得
ヘシトアリ、是ハ奏狀ノ同不同ノ事ヲ氷釋セサルニ出テタル歟、奏狀ノ同不同ハ所謂
同夷種ト混夷種ノ謂ナリ、古文古簡往々解シ難キ
モノアリ、狀情ニ據リテ解釋ヲ加ヘサル能ハス。

同年八月、出羽國司俘囚ヲ募リ、醜夷ヲ破レルコトヲ奏シ、又小野春風坂上好蔭等、陸
奥ヨリ上津野村ニ入レルコトヲ奏ス、勅シテ國司ヲ褒シ、且ツ春風等ト共ニ夷巢ヲ窮

極シ、連脫スルモノ勿ラシメラル、勅符左ノ如シ。

重省來奏、曲折具之、事用奇正、兵家所貴、今募俘虜、多殲醜類、雖是夷人慕義之至切、抑亦國宰
撫馭得方、臨機之略、實當如此、其能仁法天等、忠誠頻看聞而嘉之、克遂功績、不亦美乎、且春風
好蔭等、取陸奥路、入上津野村、乞兩國兵、夫政首尾、今如來奏、已得要略、兵術雖多、制勝爲先、左
之右之、隨宜禽賊、窮其巢窟、勿令連脫、凡厥勳賞、可有後勅、彌加精勵、莫使解緩。

同年同月、朝廷右中辨兼權守藤原朝臣保則ノ奏請ニヨリ、正三位勳五等大物忌神ヲ勳
三等ニ進メ、正二位勳六等月山神ヲ勳四等ニ、從五位下勳九等小物忌神ヲ同七等ニ進
メ、以神感ヲ祈ラシメラル。

奏言、此三神、自上古時、方有征戰、標奇驗、去五月、賊徒襲來、挑戰官軍、當此之時、雲霧晦合、對坐
不相見、營中擾亂、官軍敗績、求之著龜、神氣歸賊、我祈無感、增其爵級、必有靈應、國宰齋戒、祈請
懇懃、望請加進位階、將答神望。

同年同月、朝廷絲帛一百三十匹ヲ送り、俘囚ニ班賜シ、又越中越後ノ米、各一千斛ヲ送
リ、以テ軍糧ニ充テシメラル。

同年八月二十三日、出羽國守賊勢衰退セルヲ以テ、小野春風等ノ進軍ヲ停メ、又渡島津

輕ノ俘囚ノ來屬セルモノヲ饗會センコトヲ請フ、允サス、勅シテ速ニ平寇ノ策ヲ施サシメラル、勅符左ノ如シ。

得八月二十三日奏狀、具知消息、初所以遣春風等發精兵者、爲赴彼國之急、而今來奏、以爲賊氣已衰、官軍思舊、重之迎軍、運糧爲煩、亦細、因茲論之、春風等之前却在彼國之強弱、再量勢、計不得遙度、若當國之力、足以制賊者、移告而返之、不可必近引、且津輕渡島俘囚等、所請之事、以夷擊夷、古之上計、但野心難馴、動靜易變、偶生佗意、復恐難制、宜量事勢、隨便進止、至于饗會、秋俘、非事之意者也、若彌盡賊徒、勞賜不晚、今舉狀燒亡、無處會聚、但拔有功、加其賞賜、足以勸勵戎士、何必大饗、更致騷動乎、且其殺獲生擒、頗知破賊、彌以勉勵、速成大功、州書頻奏、驛使屢務、施平寇之策、莫以進引歲月。

同年同月二十九日、賊徒三百餘、秋田城下ニ到リ、降ヲ請フ、同日權介坂上好蔭兵二千ヲ率ヒ、流霞道(詳未)秋田營ニ至ル。

同年九月二十五日、鎮守將小野春風兵四百七十人ヲ率ヒ、秋田營地ニ至ル、去月俘囚等ノ降ヲ請フヤ、國守其野心量リ難キヲ以テ敢テ許サス、而テ春風ノ至ルヤ、自ラ賊地ニ入り、降書ヲ收ム、是ニ於テ國守ト將軍ト、意志相反對ス、因テ奏シテ勅裁ヲ請フ、

勅シテ降攻兩途共ニ其宜ニ隨ハシム、勅符左ノ如シ。

得今日日奏狀、具知賊虜乞請之由、夫兵凶戰危、先哲炳戎、事不獲已、乃用之可、今逆虜悔過、請欲歸順、其於容許、有何下躓、但古之降者、去其甲兵、面縛待命、裁得制其死生、然可謂降伏歸降之法、若同舊制、早速容受、飛驒奏聞、隨將裁決、若懷兩端、言與事異、奮兵威、一舉誅滅、凡狂賊反亂、爲損甚多、殺略良民、燒亡城邑、然則義徒俘囚之言、不可不反覆、觀能耀兵、隨機可施、莫信其虛詭、貽晒於後。

同年十二月十日、俘囚等二百人來降シ、嚮ニ掠奪セル所ノ甲冑二十領ヲ返進ス、且ツ曰ク他ハ、搜求シテ追進セント、權椽清原令望、左馬權大允藤原滋實、權大目茨田貞額等議シテ謂ラク、降人多クシテ返甲鮮ナシ、野心測リ難シ、追進ヲ待テ計納セント、鎮守將軍小野春風、賊地ニ入シヨリ、具ニ逆類悔過ノ心ヲ知ル、今ヤ霜雪ヲ犯シ、降伏ヲ哀請ス、若シ懷疑シテ納レスハ、成ヲ樂ム所以ニ非スト、權守藤原保則謂ラク、二人ノ謂フ所、皆其道理アリト、因テ俘囚ノ請ヲ納ル、會マ渡島ノ夷首、百二人其種類三千人ト、秋田城ニ詣ル、又津輕俘囚、賊ト連結セサルモノ百餘人アリ、是ニ於テ權介藤原統行、權椽文室有房、及ヒ令望滋實貞額等ヲ遣ハシ、之ヲ勞饗ス。

同三年正月、出羽國俘囚、外正六位下深江三間ニ外從五位ヲ、外正八位下大伴辟法作正丸ニ、並ニ外從五位下ヲ授ケ、以テ軍功ヲ賞セラレ。

同年同月、朝廷勅シテ、虜ヲ討伐セシメラル。

同年三月、出羽權守藤原保則、討虜ノ不利ヲ奏言ス、左ノ如シ

臣保則等謹須依去正月十三日勅符旨早討虜而行事相違不能進征何者臣等所賜諸國之兵千八百餘人上野下野兩國各八百人陸奥國追還散卒二百人是也以此輩且擊破奧賊之士卒且討平近城之虜次須重請諸國之兵陽伐奧賊而相待陸奥鎮守將軍小野朝臣春風權介坂上大宿禰好蔭等之間未有所定於是徒進愁狀十餘牒陳怨叛之由詞旨親切甚有理致即施法禁慰其冤枉爰古老言曰用兵之道尤在練士固塞其後出征入休動靜去留莫不據此又當國形勢地迫北陸秋天多雪當此之時營壘轉恃不知選練士卒修造城柵相待春風等之來臣等用古老之言選諸國當土之軍爲上兵者一千人分配官人令其勞賜但當土之卒緣無甲冑不能輒進交雜諸國之軍令增兵衆之勢其中國兵擔夫役立柵之事還向本國此事由趣上奏先畢凡當土有兵士鎮兵千六百五十人而承前國司元置千人今計諸國見留之兵未及當土例兵之數臣等定城下之後殊廻方略此待隣兵作爲城柵軍士得休國內無慮其後賊三百許人詣秋田城乞降雖然不受其降臣等因有所議春風等且擁於鎮守府待後告可應機之

狀馳權椽小野春泉告春風等春泉未達鎮守府之間去年九月十五日好蔭來自流霞路二十五日春風來自上津野是時道路泥深風寒肅烈經過嶮岨士卒疲勞春風言曰待詔之日伏奉聖略先教諭賊類必令降伏若不革逆心進兵討滅何奉宣勅旨教諭賊徒歸伏相隨到來至城無疑不可更討臣等初謂以所賜之兵與春風等表裏合勢剋日討平而春風之足歷虜庭令降逆黨降伏之後更進官軍虜欺已殊冒死而戰其鋒難制蝎尾施毒亦賊地陪狹潛通多路以此小軍難可輒赴故隨春風言暫停征戰厥後賊類亦來請降返進官物臣等依彼來降漸計利害征戰之弊非只一途案去延歷年中已下當道陣圖以一万三千六百人一軍分作三軍輜重三百人擔夫二千人而今上野下野兩國之軍千餘人因茲言之多違舊例中國之軍七月到着陸奥之兵九月入來會合參差整頓有妨或臨陣難別或聽鼓易迷皆是忘戰日久習之令然也國內黎民苦于苛政三分之一逃入奧地所遣之民承數年之弊無自存之方况軍興以來運轉軍糧去今兩年少時不息無用之卒騷動部內待救之處還致巨害管最上郡道路嶮絕大河流急中國之軍路也必經此迎送之煩不可勝計今重請大兵將討降虜國弊民窮難可克堪若慰撫部內之窮卒驗出奧地之逃民留國中甲冑選當土之例兵則降虜雖叛不足畏由是降賊之徒頻以上奏但臣等以爲賊寇無聞年代稍久因此變亂不窮誅戮恐綏禦如失邊難不絕更發大軍撲滅無遺國家之長策天下之上計也臣等不敢專決持疑於懷進退之間謹行天策

同年同月詔シ、上野下野兩國在軍ノ甲冑器仗ヲ留テ、出羽國ニ付セシメ、且ツ兩國並

二陸奥ノ援軍ヲ放却セシメラル。

同年六月、出羽守藤原保則、將ニ上野下野兩國留置ノ甲冑器仗ヲ當國ノ例兵ニ配置シ、以テ俘囚ノ變ニ警戒セントシ、天使ヲ下シテ其事ヲ檢察セラレンコトヲ奏ス、左ノ如シ。

謹奉三月五日勅符旨、諸國士解陣放却、並留中國甲冑、及置當國例兵、陸奥鎮守將軍從五位下小野朝臣春風、上野國權大椽從七位上南淵朝臣秋郷、權史生初位下上村主佐美、檢非違使從六位下多治真人雄麻呂、下野國前權少椽從七位上雀部朝臣茂世、權醫師大初位下下毛野朝臣御安等、各押領國兵、來從軍旅、今還向訖、留納當國例兵一千六百五十七人、大毅一人、小毅三人、主張三人、校尉二十人、旅師四十人、火長六十人、列士八十人、鎮兵六百五十人、秋田城司正六位上行左衛門少尉兼權椽清原朝臣令望、右近衛將曹從七位下兼行權大目茨田連貞額、正六位上行權大目春海連奧雄、校尉七人、旅師十六人、火長二十四人、列士三百三人、鎮兵四百五十人、加兵士三百五十人、雄勝城司從五位下行權椽文室真人有房、正七位上行權椽藤原朝臣有式、正六位上行權大目他戶首千與、本從六位下行少目豐岡宿禰繼雄、校尉六人、旅師八人、火長十六人、列士三百二十人、鎮兵二百人、加兵士二百五十人、出羽國々司從五位下行權介藤原朝臣統行、正六位上行權椽小野朝臣春泉、大毅一人、小毅三人、主張三人、校將七人、旅師十六人、火長二人、列士三百五十七人、兵士四百人、臣保則等行事相違、兵威

未振適降恩詔、暫征討逆類、再生平民沒業、但臣等以爲夷狄之性、強弱難測、朝爲輕寇、夕甘重戮、縱請降之後、如有小變、臣等恐偏慮存國、還陷罪戾、望更賜天使、檢察其事、謹以申聞。

同四年二月、出羽權守藤原保則、勸取ノ甲冑六十六領、前督師秦忌寸能仁進スル所ノ甲冑一百十領、及ヒ賊從返進スル所ノ甲冑二十二領、總計一百九十八領ヲ秋田城ニ納ル、又俘囚死亡者ノ位記一百六枚ヲ沒收セルコトヲ奏ス。

同年同月、出羽國山北雄勝平鹿山本四郡、遠ク國府ヲ離レ、近ク賊地ニ接ス、而テ數夷ノ種ト、良民ト相雜居ス、且頃年登ラス、若シ優恤ヲ加ルナクハ民夷和シ難シ、因テ調庸二年ヲ復シ、以テ弊民ヲ休センコトヲ請フ、勅シテ一年ヲ復シ、又不動穀六千二百九石七斗ヲ、各郡ノ狄俘八百三人ニ給セシメラル。

同年三月、軍士白丁神服連貞氏等十一人、國司ノ推選ニヨリ、特ニ出身ニ預ル。

同五年正月、雄勝平鹿山本三郡、百姓ノ調庸一年ヲ復サシメラル。

同年三月、是ヨリ前キ、國府鎮兵六百五十人、人毎ニ、日糧一升六合、秋田雄勝二城兵士一千人、人毎ニ日糧八合ヲ給シ、分結六番以テ國府ニ直セシム、是ニ於テ兵士千人ニ

長上ノ糧ヲ給シ、三ケ年ヲ期トシ、以テ一府二城ノ非常ニ備ヘシメンコトヲ請フ、勅シテ二ケ年ヲ許サル。

同年四月、左近衛少將藤原朝臣有實、去ル元慶二年夷虜ニ燒盜セラル、所ノ穀穎、以下ヲ注進ス、其目左ノ如シ。

元慶二年夷虜所燒盜穀穎三十二万五百一束、六把八分六毫、糶七百五十斛、革短甲三百三十七領、冑五百三十二、鐵鉢一百五十七枚、革鉢五十枚、小角八枚、鼓六十、而大刀五十五柄、弓七十一張、鐵鈎五十五柄、弩二十九具、手弩一百具、鎮一十三柄、鉞八柄、楯五十二枚、槍一百八十一竿、鎌鎗七十三竿、鯨尾槍一百八竿、官舍一百六十一宇、城櫓二十八宇、城棚櫓二十七基、塙棚六十一基。

同年五月、陸奥蝦夷譯語外從八位下物部斯波連永野ニ、外從五位下ヲ授ケラル。

按、當時陸奥蝦夷語通譯ヲ置カレタレハ、出羽蝦夷語ノ通譯ヲモ置カレタラン今傳ハラヌ。

同年八月、出羽國司元慶二年、夷虜叛亂、國內騷擾ノ際、奏請ヲ經スシテ、俘囚並ニ渡島ノ狄等ニ大饗シ、不動穀三千貳百三十七斛五斗ヲ消費セルノ罪ヲ請フ、勅シテ之ヲ免サル。

同年十一月、前出羽ノ弩師、從八位上秦忌寸能仁從五位下ニ叙セララル、元慶二年ノ國亂、能仁私穀ヲ以テ軍糧ヲ助ルヲ褒セララルナリ。

光孝天皇、元慶八年六月二十六日、秋田城雷雨晦冥、石鏃三十二ヲ雨ラス、七月二日飽海郡ノ海濱石ヲ雨ラス、形チ鏃ノ如シ、其鋒皆南ニ向フ、陰陽察占テ兵賊疾疫ノ徵トナス、尋テ命シテ警固セシメララル。

仁和元年、正月、從五位下行式部大丞坂上大宿禰茂樹出羽守ニ任ス。

同二年二月、飽海郡諸神社邊石鏃ヲ雨ラス、命シテ兵賊ヲ警セシメララル、十一月勅シテ、最上郡ヲ分チテ一トナス、今ノ村山最上ノ二郡ナリ。

同三年五月、出羽守從五位下、坂上大宿禰茂樹上言シテ、出羽國府最上郡大山郷保寶士野ニ移建センコトヲ請フ、去ル嘉祥三年ノ震災、大破壊ヲ被ルヲ以テナリ、庭議其嶮遠不便ナルヲ以テ之ヲ許サス、近側高敞ノ地ヲ擇テ、之ヲ移建セシム、茂樹上言並ニ勅符左ノ如シ。

國府在出羽郡井口地、即是去延曆年中陸奥守從五位上小野朝臣岑守、據大將軍從三位坂

上大宿禰田村麻呂論奏所建也去嘉祥三年地大震動形勢變改既成雲泥加之海水漲移回府六里所大川崩壞去隍一町餘兩端受害無力塞堙沒之期在於旦暮望請遷建最上郡大山鄉保寶士野據其嶮固避彼危殆

避水遷府之議雖得其宜去中出外之固因其便何者最上郡地在國南邊有山而隔自河而通夏水浮舟終有運漕之利寒風結水曾無向路之期况復秋田雄勝城相去已遙烽候不接又舉納秋饗國司上下必有分限入部率衆若赴沼水而後泝水面還有徵發之煩更倍於尋常運送之費將加於黎庶晏然無事之時縱能兼濟警急不虞之日何得周旋以此論之南遷之事難可聽許須擇舊府近側高敞之地閉月遷造不妨農務用其舊材勿勞新採官帳之數不得增減勅宜依官職早令行之

光當翁曰是の出羽郡の府より南に當ル大山郷の方角を指さゆ詞なり山形の地の出羽府を南に當り地利方角國史に符合す有山而隔といふ大石田清川古口邊の道筋に犁牛山月山共葉山等の山續て南北より大山連り出羽の府と山形とを隔て又最上川の大川有て大山郷に通路する事自河通と云に符合す春より秋に至ては運送の便有て冬月深雪の頃の往來絶ゆる事實録に符合す是を以乱をいふ最上といふ山形の古名として往古の山形を最上郡大山郷最上と稱せしと仁和年中分國有て後ニ改稱して山縣と改め又形の字に書替へにや山形の近隣十里程の間を平地都々大山郷と稱せしと見へたり中略

平野を保寶士野と號せしなふん上古の最上山形村山古名計陸地よて六田楯岡大石田邊迄七八里り間の湖水の如くなる故最上村山谷後谷地避翼和の日佐藝今の寒白谷今の白岩と往來よて六十里越えて田川郡に出ると見へたり此時分の相谷古口邊の山合切古くて最上川に大瀧有て水多々へ湖水の如く也より自然と山合の瀧切れて谷と成湖水の如きの庄内へ流を落て皆干瀉となり今の平野といなりまよや其時分の船の通路もなかりまといへり

按、大山郷保寶士野所在未タ詳ナラス但最上郡國ノ南邊ニ在リテ通船ニ利アル曠野ナラハ今ノ山形市以西ノ地ナルヘシ想フニ國府震災ノ際國分寺ノ如キモ顛倒シタルハ先ツ之ヲ移轉シ後ニ國府ヲ移サンコトヲ奏請シタルナルヘシコレ國分寺ノ現ニ山形ニ移リタル所以カ

同年六月、出羽守坂上茂樹、國印剝落セルヲ以テ、改鑄ヲ賜ハンコトヲ請フ。醍醐天皇、延喜九年五月三日、出羽國按察使、正三位藤原有實薨ス。

延長五年十一月、延喜式成ル、撰修者四人曰ク、左大臣藤原忠平、大納言藤原清實、大中臣安則權介平久長コレナリ、書中出羽國ニ關スルモノ左ノ如シ、以テ當時文化ノ一斑ヲ徴スヘシ。

神祇第三、

大物忌神社一座、月山神社一座、已上出羽國

神名帳下、

出羽國九社大二座 小七座

飽海郡三座大二座 小一座大物忌神社名神 大

小物忌神社名神 大 月山神社名神 大

田川郡三座小並

遠賀神社、申豆佐賣神社、伊氏波神社、

平鹿郡二座小並

鹽湯彥神社、波宇志別神社、

山本郡一座、

副川神社、

第十八式部省、

凡飛驒陸奥出羽及太宰府所管諸國人皆不得補帳內職分位分盜人亦陸奥人不聽補雜色

凡陸奥出羽太宰管内諸國蔭子孫位子雖不向省聽預出身

第廿一治部省、

凡陸奥出羽鎮守府史生廉仗博士醫師陰陽醫師以當國物給之。

第廿二民部省上、

東山道出羽國上管、延喜六年正月卅日分。

最上、村山、置賜、雄勝、平鹿、秋田、山本、飽海、河邊、田川、出羽、右為遠國。

陸奥國、出羽國、佐渡國、隱岐國、壹岐島、對馬島、右四國二島為邊要。

凡諸國健兒皆免徭役、畿內用桑田地子餘以國營健兒田充之、出羽國出舉給之。

凡出羽國放生田一町割乘田永充之。

第廿二民部省下、

凡計帳者陸奥出羽兩國太宰府九月卅日以前申造餘國如定。

凡義倉及官田地子等帳並附正稅帳使。

年料別貢雜物。

出羽國零羊角十具。

交易雜物。

出羽國熊皮廿張 鹿革、鹿皮、獨犴皮數隨時。

第廿四主計上、

凡左右京五畿內調一丁輸錢隨時增減。

凡諸國輸庸輸二分調之一。

出羽國行程上四十七日、下二十四日、海路、五十二日、調庸、輸狹布米穀。

第廿五、主計下。

凡勘大帳者、皆據去年帳、勘其書入。

第廿六、主稅上。

凡勘稅帳者、先據去年帳、勘會今年帳。

凡勘租帳者、皆據當年帳、即通計國內十分、以得七分、以上為定、若有不堪佃者、聽除十分之一。

出羽國正稅廿萬束、公廨卅四萬束、月山大物忌神祭料二千束、文珠會料二千束、四天王修僧

供養井法服料二千六百八十束、神宮寺料一千束、五大尊常燈節供料五千三百束、健兒糧

料五萬八千四百十二束、修理官舍料十兒糧料五百萬束、池溝料三萬束、救急料八萬束、國學

生食料二千束。

祿物價法。

出羽國、絹百五十束、綿十三束、絲十五束、調布五十束、庸布三十束、鐵十四束。

驛馬貢法。

信濃出羽二國、上馬五百束、中馬四百束、下馬三百束。

驛馬死損。

出羽等五十國、七分許損二分。

諸國運漕雜物功賃。

出羽國百三十一束。

凡一駄荷率、絹七十疋、繩五十疋、絲三百絢、綿三百屯、調布卅端、庸布卅段、商布五十段、

銅一百斤、鐵卅挺、鐵七十四。

第廿八、兵部省。

凡書生、不經式部省省試、身才勘籍、便補之、陸奧出羽等十七國、郡司書生等並聽帶杖。

諸國健兒。

出羽國一百人。

凡鎮兵。

出羽國六百五十人。

諸國驛傳馬。

出羽國驛馬。

最上、十五匹。

村山野後、各十四、佐藝、四匹、船十艘、遊佐、蚶方、由理、各十二匹、(按野後ハ谷地ノ誤カ)

白谷、七匹。

飽海秋田、各十四。

傳馬。

最上、五疋。

野後、三匹、船五隻。

由理、六匹。

避翼、一匹、船六隻。

白谷、三匹、船五隻。

第三十三大膳下。

諸國貢進菓子。

出羽國。

甘葛煎、二斗、甘葛煎アタル直藏人所。

第三十七、曲藥寮。

諸國進年雜藥。

出羽國、二種。

甘草、五斤、羚羊角、四十具。

第五十雜式。

凡陸奥出羽兩國之司并鎮守府官人已下給遷替料夫馬但延任之輩不在此限。

朱雀天皇、天慶二年四月、出羽夷賊蜂起ス。

按、夷賊蜂起ノ事情史闕テ傳ハラス、其詳細今未タ之ヲ考フヘカラス。

同三年、平將門誅ニ伏ス。

村上天皇、天曆四年、從五位下源順、和名類聚ヲ編ス、其出羽ニ關スルモノ、延喜式ト並セテ、當時ヲ考フヘシ。

出羽國、以天波、國府、在平鹿郡。

行程、上四十七日、下二十四日。

管十一郡、田二万六千九百九町二段五十步。

正、二十四万四千二十束、公、四十万束。

本額、九十二万七千七百七十二束雜額、二十八万三千三百九十二束。

最上、毛加美、村山、牟良、夜末、置賜、於伊太、雄勝、乎加知、有城謂之答合、平鹿、比良加、

山本、也末、毛止、飽海、阿久、河邊、加波、乃信、田川、多加波、出羽國府、秋田、阿伊太、有城企

治。

最上郡。

郡可、山方、最上、芳賀、八木、山邊、梁田、大倉、村山、長岡、大山、福岡、
村上郡(上者山之誤也)

大山、長岡、村山、大倉、梁田、德有。

置賜郡

置賜、廣瀨、屋代、赤井、宮城、長井、餘戶。

雄勝郡

雄勝、大津、餘戶。

平鹿郡

山川、大井、邑知、山本、塔用、御船、鎰戶、餘戶。

河邊郡

川合、中山、邑知、田郡、大泉、稻城、芹泉、餘戶。

田川郡

田川、甘禰、新家、那津、大泉。

出羽郡

大窪、河邊、井上、太田、餘戶。

秋田郡

添川、率浦、方上、成相、高泉。

按、

本書國府ヲ平鹿トナス誤ナリ拾芥抄又國府ヲ出羽郡トナス古書ト雖モ必ス信スヘカラス。

同七年九月、正二位大納言藤原顯忠、陸奥出羽按察使二任ス。

圓融天皇、天延三年、大納言藤原兼家、陸奥出羽按察使二任ス。

天元元年、大納言藤原爲光、陸奥出羽按察使二任ス。

一條天皇、長德二年、大納言藤原公季、陸奥出羽按察使二任ス。

同四年、十一月十三日、從四位下陸奥守藤原實方卒ス、實方曾テ阿古屋松ヲ探リ、出羽

ニ至ル、其蹟今千歲山ニ在リ。

長保四年、正二位大納言藤原道綱、陸奥出羽按察使二任ス。

三條天皇、長和二年十二月、正二位大納言藤原齊信、陸奥出羽按察使二任ス。

後一條天皇、万壽三年二月、從二位大納言藤原行成、陸奥出羽按察使二任ス。

同五年、二月、正三位權中納言藤原賴宗、陸奥出羽按察使二任ス。

後朱雀天皇、長曆二年、權中納言藤原長家、陸奥出羽按察使二任ス。

長久三年正月、權中納言藤原隆家、陸奥出羽按察使ニ任ス。

按、

藤原顯忠ヨリ、藤原隆家ニ至ル、兩國ノ按察使ニ任セラレモノ、皆其職ヲ遙領セルノミ、在國以テ人民ヲ撫字セルモノニ非ス、以テ奥羽人民ノ朝廷ヲ忘却セルニ至ルノ情ヲ

視ルヘシ。

後冷泉天皇、永承六年六月、是ヨリ前、陸奥國奥六郡ノ酋長、外從五位下安大夫安倍賴良、國司ノ令ニ背キ、貢賦ヲ輸サス、陸奥守藤原登任、出羽國秋田城介平繁茂ト之ヲ討ツクス、國ヲ棄テ上洛シ、之ヲ朝廷ニ訴フ、朝廷從四位下伊豫守源賴義ヲ以テ、鎮守府將軍兼陸奥守ニ任シ、之ヲ征セシム。

永承六年辛卯六月、從五位下陸奥守藤原登任、乘任國上洛奏言、陸奥國奥六郡之酋長、外從五位下安大夫安倍賴良、依背國司令條、雖加制止、賴良憑強勢、不可、依牒出羽國秋田城之介平繁茂、雖攻其逆徒、却爲賊敗、令出奔旨也、因茲從四位下伊豫守源賴義、補任鎮守府將軍兼陸奥守、進發陸奥國。

同七年三月、鎮守府將軍源賴義陸奥出羽ニ大赦ス、安倍賴良、乃チ賴義ニ悔謝シ、名ヲ賴時ト改ム。

天喜二年七月、陸奥守源賴義、任限畢リ、將ニ西上セントス、安倍賴時ノ男、厨川貞任、事ヲ以テ權頭藤原說貞等ヲ襲殺セントス、賴義因テ貞任ヲ罪セント欲ス、賴時復タ兵ヲ舉テ叛ス。

同年九月、十二日、安倍賴時誅ニ伏ス、而テ二子厨川貞任、鳥海宗任等、河崎城ニ據リテ敢テ降ラス。

同年十一月、源賴義兵ヲ帥テ厨川貞任、鳥海宗任等ヲ討ス、官軍糧乏シク、遂ニ大ニ敗潰ス、賴義以テ出羽守兼長(姓不詳)兵糧ヲ給セサルノ事トナス、是ニ於テ兼長ノ官ヲ停メ、左兵衛尉源齊賴ヲ出羽守ニ任シ、賴義ヲ援ケシメラル。

天喜五年二月、陸奥守源賴義、任限滿期ス、從四位下大和守高階經重、鎮守府將軍兼陸奥守ニ任シ、陸奥ニ進發ス、經重勢威微弱、貞任等ヲ征スルコト能ハス。

康平五年二月、從四位源賴義ヲ、陸奥國司ニ再任ス。

同年九月、出羽ノ豪族、清原武則兵一万人ヲ帥テ、陸奥國司源賴義ニ合シ、共ニ衣川ノ塞ヲ攻破ス、安倍貞任等退テ、厨川ノ塞ニ入ル、同月十七日、厨川陷リ、貞任誅ニ伏ス、

年三十四弟宗任降ル、永承六年ヨリ、茲ニ至ル、十有二年、安倍氏遂ニ滅亡ス、世之ヲ前九年ノ役ト云フ。

按、源賴義前任滿期後高階經重、陸奥守ニ任シタレ、其勢力微弱ニシテ、安部氏ヲ討征スル能ハス、袖手シテ、其所爲ニ任シタルカ、然ル未タ朝廷ノ經重ヲ督責セラレタル事ヲ聞カス、以テ皇威ノ弛廢セル、相門政事ノ緩怠ナリシヲ視ルヘシ、所謂九年ハ、蓋シ賴義ノ戰事間ヲ謂フナリ。

同六年二月、源賴義ヲ正四位下伊豫守ニ、源義家ヲ從五位下出羽守ニ、清原武則ヲ從五位下鎮守府將軍ニ任シ、以テ去歲ノ戰功ヲ賞セラル、時ニ鳥海宗任、賴義ノ館ニ在リ、諸公卿東國ノ蝦夷ヲ見ント欲シ、相競フテ群參ス、一卿アリ梅花一枝ヲ出シ、其名ヲ試問ス、宗任倭歌ヲ詠シ之ニ答フ、諸卿其優美ヲ驚賞シ、赤面シテ退クト云フ。

白川天皇、永保二年二月三日、前鎮守府將軍源賴義卒ス。

同三年五月、陸奥押領使、清原眞衡ノ男海道太郎成衡、常陸大椽致幹ノ女ヲ娶ル、出羽國住人吉彦秀武、往テ之ヲ賀ス、眞衡客ト碁シ、秀武ニ禮セス、秀武其禮ナキヲ怒リ、去テ出羽ニ歸リ、其妻ノ兄巨權太郎清衡、及清原武衡、其弟家衡等ト相謀リ、眞衡ヲ攻ム、奥羽復タ亂ル、同年八月、源義家鎮守府將軍兼陸奥守ニ任シ、陸奥ニ入ル、因テ眞

衡及ヒ秀武清衡武衡家衡等ニ諭シテ和睦セシム、時ニ家衡出羽ニ在リ、(冊)應セス、義家出羽ニ赴キ、將ニ家衡ヲ攻ントス、家衡邀擊シテ之ヲ破ル、是ニ於テ、武衡遂ニ家衡ニ黨シ、出羽ヲ略取ス、清衡獨リ義家ニ屬ス。

同年十二月、大納言藤原實衡、陸奥出羽按察使ニ任ス。

堀河天皇、寛治三年六月、源義家清原武衡家衡ヲ出羽國、仙北郡金澤城ニ攻ム。

同四年五月七日、陸奥押領使清原眞衡、海道太郎成衡、僞テ武衡家衡ト和睦セントシ、金澤城ニ入り事露レテ殺サル。

同五年十一月十四日、源義家金澤城ヲ攻破シ、清原武衡弟家衡ヲ殺ス、是ニ於テ巨理清衡、陸奥國ノ目代ニ補任シ、鎮守府ノ館舎ニ移居ス、因テ御館權太郎ト稱ス、永保三年ヨリ茲ニ至ル、凡ソ十年、世之ヲ後三年ノ戰役ト稱ス。

永長元年、權大納言藤原俊宗、陸奥出羽按察使ニ任ス。

嘉承元年八月十八日、陸奥守源義家卒ス、年六十八。

鳥羽天皇天仁元年、陸奥出羽押領使、藤原基衡ニ勅シテ、村山郡寒河江庄、慈恩寺彌勒

堂並ニ釋迦彌陀兩堂ヲ造立セシメラル。

天仁元年戊子依鳥羽院宣勅修營之並有釋迦彌陀兩堂造立與高基衡朝臣奉行。

常行堂成阿彌陀三尊鳥羽院御本尊以院宣下給今安置本尊者中尊一寶冠彌陀 湛慶作。

釋迦堂一切經堂釋迦三尊十羅刹女等也一切經五千餘卷依院宣下給今安置小釋迦 惠心僧都作。

仁平三年九月藤原賴長出羽國大會禰屋代遊佐三庄ノ年貢ヲ增加シ之ヲ押領使基衡ニ徵收ス。

宇槐記仁平三年九月十四日ノ條。

去々年厩舍人長勝延貞爲使下向奥州先年可增與高倉庄年貢之由禰閣被仰基衡金五

千疋馬基衡不肯增之久安四年禰閣以五ヶ庄讓余同五年以雜色國元爲使仰基衡曰可進

高鞍金五十兩布千段馬三疋本數金十兩布二百段細布十段馬二疋本良金五十兩布二百段馬四疋本數金十兩馬二疋預所分金五兩

馬一屋代布二百段漆二斗馬三疋本數布百段漆一斗馬二疋遊佐金十兩鷺羽十尻馬十一疋本數金五兩鷺羽三尻馬一疋基

衡不聽國元其性柔弱不能責之空以上洛重遣延貞責之去年基衡申曰不得增所仰之數可

增進高鞍金十兩細布十段布三百段御馬三疋大會禰布二百段水豹皮五枚御馬二疋遊佐金

十兩鷺羽五尻御馬一疋屋代布百五十段漆一斗五升御馬三疋本良金二十兩布五十段御

馬三疋者仰曰三ヶ所本真遊佐屋代所申非無其理依請至于高鞍大會禰兩庄者田多地廣所增不

幾猶減本數可進高鞍馬三疋金廿五兩布伍百段大會禰馬二疋布三百段也今日任此數延

貞持來三ヶ年々貢年來貢本數然而返却不受今年相合三ヶ年歟受之增年貢事成隆朝臣

預高鞍俊通預本領所勸進也故成助諫曰匈奴無道不必受君命是以禰閣時度々雖有其議不能果

遂昔孝文皇帝時南越尉佗自立帝爲貴佗兄弟以德懷之佗遂稱臣略中君欲果其事基衡遂不

聽之君將失威於東土願君熟察焉成隆朝臣俊通陳曰基衡以本數進年貢之時君不受之基

衡必增之縱不及定仰之數何無所增又基衡必阿媚與竈遂不增之算願君勿和親矣成佐曰

少不增之二子求少利不願君辱君若從其言必有後悔焉余從成隆俊通之諫果如其言十七

日自奥州庄々持來砂金一百六十五兩奉院申可被宛御惱問御祈之由。

按遊佐今ノ遊佐郡ニシテ屋代今山形縣東置賜郡大會禰ハ同縣東村山郡ナリ。

同年某月詳未村山郡寒河江庄慈恩寺ヲ再興修造セシメ刑部卿平忠盛ニ命シ之ヲ

奉行セシメラル。

仁平年中依鳥羽法皇院宣再興並諸堂造立有之本願々西上人奉行刑部卿忠盛。

妙樂院彌陀堂 忠盛自建立。

自身守本尊阿彌陀三尊安置之今無之。

二條天皇安元二年從二位大納言公道陸奥出羽按察使二任ス。

後白川天皇、保元元年、熊野社ヲ寒河江庄、慈恩寺山中ニ創立ス。
同二年三月五日、慈恩寺彌勒堂炎燒ス、本尊池中ニ在リ燒失セス、後四年ニシテ再營成ル。

翌年、保元二丁丑三月五日、本堂炎燒、本尊自堂中蓮池飛入不燒云々、炎燒後經四年、永曆元年庚辰造營畢。

安徳天皇、養和元年八月、藤原秀衡從五位上鎮守府將軍ニ任ス。

同二年、中納言平賴盛、陸奥出羽按察使ニ任ス。

後鳥羽天皇、文治元年三月、平氏滅亡ス、

同年十一月、諸國ニ守護、庄園ニ地頭ヲ置ク。

同二年三月十二日、源賴朝六十六國總追捕使ニ任ス、是ヨリ兵馬ノ大權全ク武門ニ歸シ、政體一變封建ノ形ヲ成スヲ致セリ。

編年西村山郡史卷之一終

編年西村山郡史卷之二

郡史編纂委員共編

文治三年十月二十九日、鎮守府將軍兼陸奥守從五位上藤原秀衡卒ス、男泰衡等ニ遺命シ、國事ヲ源義經ニ委セシム、同四年二月二十六日、朝廷宣旨ヲ東海東山兩道、并ニ陸奥出羽ノ國司ニ下シ、源義經ヲ追討セシメラル、同五年、源賴朝奏シテ藤原泰衡ヲ討センコトヲ請フ、四月三十日、泰衡勅命ヲ奉シ、源義經ヲ衣川ノ館ニ襲殺ス、五月二十二日、泰衡ノ使者鎌倉ニ到リ、義經ヲ誅セルコトヲ報ス、六月十三日、泰衡ノ使者新田冠者高平、義經ノ首級ヲ携ヘ、鎌倉ニ到ル、賴朝和田義盛梶原景時ニ命シ、之ヲ檢セシム、是ヨリ前賴朝將ニ陸奥ヲ征セントシテ宣旨ヲ奏請ス、既ニシテ徵兵既ニ鎌倉ニ集ル、七月十七日、賴朝陸奥追討ノ部署ヲ定メ、千葉常胤以下東海道ヨリ、北陸道ノ諸軍ハ越後ヨリ出羽ニ入ル、比企能員之ニ將タリ、賴朝親ラ中路ヨリス、畠山重忠先陣タリ、同月十九日、賴朝鎌倉ヲ發ス、八月七日、賴朝陸奥國伊達郡ニ到ル、

同月十三日、賴朝多賀國府ニ到ル、會マ比企能員等出羽ノ戰捷ヲ報告ス、同月二十
二日、賴朝平泉ニ入ル、泰衡既ニ其第二火シテ遁ル、九月三日、河田次郎泰衡ヲ比内
郡熱柵ニ殺ス、明日能員等出羽ヨリ來會ス、同月八日、賴朝陸奥出羽ノ戰捷ヲ京師ニ
奏ス、同月二十日、賴朝諸將ノ勳功ヲ論奏シ、其家人ニ奧羽二州ノ地ヲ分與ス、大江氏
ノ本郡ノ地頭職タル、蓋シ是ノ時ニ在リシカ、然ルニ吾妻鏡及ヒ大江系圖、其事ヲ記載
セス、今之ヲ臆斷スル能ハサルナリ、然ルニ工藤行光ノ寒河江北方谷地方面ニ地頭タリ
シハ、圓覺寺文書ト、其地今猶ホ工藤小路ノ稱アルニ徵シテ之ヲ考フヘシ、舊史ニ稱ス、
文治五年十一月、廣元寒河江庄ヲ賜ハリ、之ヲ舅多田飛彈守仁綱(攝津矢田郡吉川郷ノ人)ニ讓レリ、
仁綱因テ入部シテ本楯ニ居館シ、後ニ吉川村ニ移徙スト、仁綱文曆元年六月十日ヲ以
テ没シ、同村安仲坊ニ葬ルト云フ、而テ未タ之ヲ正史ニ徵スル能ハサルナリ、奧羽ノ
平定セルヤ、賴朝將ニ二州ノ間田ヲ檢セントス、諸地頭之ヲ愁訴ス、十月二十四日、大
江廣元ニ命シ、出羽ノ留守ニ令シ、之ヲ停止セシム。

吾妻鏡。

當國檢注之間、可被倒所々地頭間田之事、尤驚聞食、於出羽陸奥者、依爲夷之地、度々新制も除訖、偏守古風、更無新儀、然者件間田等、何被停廢哉、有來公田之外、間田者如年來もて不
可有相違之旨於鎌倉殿依仰執達如件。

十月二十四日、

前因幡守。

出羽留守所。

同年十二月十八日、朝廷賴朝ノ請ニ因リ、奧羽ヲ管領セシメラル。

建久元年、正月八日、是ヨリ前藤原泰衡ノ遺將大河兼任兵ヲ出羽ニ舉ク、是ノ日千葉
常胤ヲ海道ノ大將トナシ、勿來關ヨリ、比企能員ヲ山道ノ大將トナシ、白河關ヨリ、進
軍セシメ、結城朝光以下陸奥ノ諸地頭ニ令シテ進發セシム、同月十三日、賴朝上總介
足利義兼ヲ追討使トナス、二月十二日、義兼等兼任ヲ栗原郡一迫ニ擊破ス、兼任遁レ
後チ土人ニ殺サル。

同六年、八月二十八日、鎌倉府陸奥出羽以下東國ノ地頭ニ令シテ、庄園内ニ於テ強窃
二盜、并博奕不善ノ徒ヲ隱容スルヲ禁シ、犯スモノハ其職ヲ褫ヒ、之ヲ逮捕者ニ給
セシム。

正治元年、正月十三日、征夷大將軍源賴朝薨ス、男賴家遺式ヲ續キ、諸國ノ守護ヲ奉行ス。同年八月十日、鎌倉府、陸奥出羽ノ留守所ニ令シ、郡郷地頭ノ所務ハ、(所務ハ所
得ノ下)藤原秀衡泰衡ノ舊規ヲ守リ、又境界ハ秀衡ノ舊蹤ニ遵ヒ、榜示ヲ設立セシム。

建仁三年、將軍源賴家疾アリ、關西二十八ヶ國ノ地頭職ヲ弟千幡ニ、關東二十八ヶ國地頭職ヲ男一幡ニ讓ル、九月二日、北條時政賴家ノ男一幡ヲ弑シ、其外祖父比企能員ヲ族殺ス、同七日賴家俄ニ落飭シ、軍職ヲ弟千幡ニ讓ル、尋テ伊豆ノ修禪寺ニ幽セラ、ル、明年七月遂ニ弑セラル。

建曆元年、五月二十日、大江親廣將軍源實朝ニ代リ、鶴岡八幡宮ニ奉幣ス、現今寒河江町、長岡山東ニ八幡神社アリ、傳フ建久中大江親廣勸請スル所トナス、其或ハ然ラン、然ル文書記録ト存在セス、其詳考ル能ハサルナリ。

建保二年、七月二十七日、將軍源實朝、母政子ト鎌倉大慈寺ニ供養ス、大江親廣葛西清重等ト後騎タリ。

同三年四月十八日、將軍源實朝京都守護ノ家人等不法多キヲ聞キ、書ヲ與ヘテ忠否ヲ

賞罰セントシ、大江親廣ヲシテ之ヲ奉行セシム。

同四年閏六月一日、朝廷正四位下中原廣元ノ請ヲ允シ、大江ト改姓セシメラル。

同六年六月二十七日、將軍源實朝任大將拜賀式ヲ鶴岡八幡社ニ執行ス、大江親廣大泉氏平ト之ニ扈從ス、十二月二十日、右大臣源實朝吉事ヲ初メテ執行ス、親廣等布衣ヲ着ケ之ニ列坐ス。

承元元年、正月二十七日、源實朝任大臣ノ拜賀式ヲ鶴岡八幡社ニ執行シ、別當公曉ニ殺害セラル、時ニ大江親廣弟長井時廣ト前驅タリ、二月二十九日、親廣入道京都守護トシテ上洛ス、親廣蓋シ實朝ノ喪ニ遭ヒ剃髮シタルカ、七月十九日、藤原賴經、鎌倉ニ到ル、左大臣道家ノ子ナリ。

同三年二月十六日、鎌倉府大江親廣、并ニ伊賀光季ニ命シ、七條院三條御所ノ放火犯人ヲ糺彈セシム、五月十四日、後鳥羽上皇將ニ北條義時ヲ討セントシ玉ヒ、親廣并ニ伊賀光季ヲ召シ玉フ、親廣召ニ應シ、光季應セス、變ヲ鎌倉ニ報ス、五月二十一日、北條泰時鎌倉ヲ發シテ西上ス、大江廣元葛西清重等留守タリ、六月六日、親廣ノ子少輔

判官代佐房等、官軍ヲ尾張ニ破ル、同月十四日、親廣等北條時房ト勢多ニ戦ヒ敗潰ス、親廣關寺邊ヨリ遁ル、明日泰時等京師ニ入ル、七月十三日、後鳥羽上皇隱岐ニ遷御シ玉フ、舊史ニ記ス親廣ノ敗ルヤ、子息佐房高元以下ト寒河江ニ遁歸シ、吉川村中岫ニ潜居シ、安仲坊ト稱スト、然レ吾妻鏡ヲ按スルニ、佐房實ニ東軍ニ將タリ、舊史ノ説未ダ信スヘカラサルナリ、其吉川潜居ノ説ノ如キ、蓋シ或ハ傳來スル所アルカ、南北朝ノ時ニ到リ、大江氏寒河江ヲ據有シ、以テ南朝ニ勤王シタル所以ノモノハ、豈親廣ノ遺志ヲ繼承シタルモノニ非ル歟。

元仁元年、十二月十九日、將軍賴經、北條泰時ノ第二入御ス、大江佐房之ヲ供奉ス。

嘉永元年五月二十二日、是ヨリ前、海内疫行ハル、又炎旱旬ニ涉ル、鎌倉府因テ千二百僧供養會ヲ鶴岡八幡社ニ執行シ、大江佐房等ニ之ヲ奉行セシム、六月十日、前陸奥守正四位下大江廣元卒ス、年七十八、廣元ハ寒河江大江氏ノ祖ナリ、十二月二十日、將軍賴經新第二移徙ス、佐房先行ニ供奉ス、是歲羽黑權現慈恩寺山寛喜二年、將軍賴經故賴家ノ女ト婚ス、大江佐房之ニ供奉ス、是歲羽黑權現慈恩寺山

中ニ影向ス。

貞永元年、八月十日、鎌倉府御成敗式目五十ヶ條ヲ論定ス、近世ニ到ル迄殆ト地方教育ノ讀本トナリ、每家之ヲ收藏スト云フ。

嘉禎元年、二月十五日、僧徒八口ヲシテ、涅槃經論議ヲ鎌倉御所南面ニ執行セシム、大江佐房等布施ノ役タリ、六月二十九日、將軍賴經明王院ヲ供養ス、佐房長井泰秀等ト之ニ供奉ス。

仁治二年、八月二十五日、將軍賴經北斗堂ヲ供養ス、大江佐房之ニ供奉ス、舊志ニ記ス親廣今茲十二月十五日、寒河江庄吉川村ニ卒去ス、其墓ハ阿彌陀堂畔ニ在リト、又稱ス、親廣兼テ城地ヲ長岡山ニ相シテ之ニ經營シ、現ニ空壕ノ遺趾ヲ存スト、又稱ス、現今内楯ノ遺墟ハ親廣ノ經營ニナルト、其信僞未タ必スル能ハサルナリ。

寛元々年七月十七日、鎌倉府將軍家出御ノ供奉員詰番ヲ豫定シ、上中下三旬ニ分ツ、大江佐房下旬ニ班列ス。

同二年四月二十八日、藤原賴經軍職ヲ男賴嗣ニ讓ル。

寶治二年、正月三日、將軍藤原賴嗣始メテ北條時頼ノ邸ニ入御ス、大江佐房之ニ供奉ス。

建長四年、將軍賴嗣將ニ職ヲ辭セントシ、後嵯峨上皇ノ皇子ヲ以テ鎌倉ノ主トナサン
一ヲ奏請ス、四月一日、三品宗尊親王ニ征夷將軍ヲ宣下セラレ、是ノ日鎌倉ニ入御シ
玉フ。

正嘉元年、二月二日、將軍宗尊親王鶴岡八幡宮ニ社參シ玉フ、大江佐房長井時秀等ト
之ニ供奉ス、十月一日、將軍宗尊親王大慈寺ニ供養セラル、佐房御布施取ヲ役ス。

同二年、正月一日、鎌倉府院飯、大江佐房大泉長氏等ト東坐ニ伺候ス。

正元々年、二月十日、鎌倉府陸奥ノ地頭ニ令シ、飢饉ノ際遠近ノ飢民、山野ニ薯蕷野老
ヲ採リ、江海魚鱗海藻ヲ取ルヲ禁遏スルヲ得サラシム。

文永元年、四月十日、鎌倉府諸國守護人ニ命シ、御家人等農時百姓ヲ使役シ、或ハ臨時
ノ雜課ヲ賦スルヲ禁止ス。(式目新編追加)

農時不可使百姓事。

夏三箇月間、私不可仕之、但領主等作田畠蠶養事、爲先例之役法者、今更不可有相違
不可出百姓臨時所濟事。

有限所當之外、臨時徵下事、永可停止之。

以前兩條存此旨、可令相觸其國御家人等之狀、依仰執達如件。

文永元年四月十日、

武藏守判。

諸國守護人。

相摸守判。

同三年七月四日、將軍宗尊親王上洛シ、同月二十四日、惟康親王征夷大將軍ニ任セラ
ル。

弘安四年、閏七月朔日、颶風アリ、蒙古ノ賊船六萬餘艘、悉ク筑海ニ漂没ス。

正應二年、九月十四日、北條貞時將軍惟康親王ヲ京師ニ奉還シ、十月九日、三品久明親
王ヲ迎ヘテ將軍トナス。

永仁三年、閏二月二十五日、鎌倉府寒河江庄内工藤左衛門入道知行分、吉田、堀口、三曹
司、兩所、窪目、ノ五箇郷ヲ、大陽寺ノ替地トシテ圓覺寺佛日庵ニ寄進ス。

同四年九月二十七日、慈恩寺災ニ罹ル、保元二年ノ罹災ヨリ、是ニ至リ百四十年ナリ。
嘉元三年十二月某日、僧城仙慈恩寺本堂ニ銅佛器二具ヲ造納ス、其器現在ス。
德治元年、九月二十日、慈恩寺再建成ル、其費大凡千七百餘貫ト云フ。

同三年、將軍久明親王上洛セラル、同月十日、守邦親王將軍ニ任セララル。
元享元年、陸奥ノ人、安藤又太郎、鎌倉府ニ叛ク、承久以來武士ノ鎌倉府ニ反抗スルモノ之ヲ始トナス。

同四年九月、後醍醐天皇鎌倉府ヲ討滅センコトヲ謀リ玉フ。
元弘二年三月七日、北條高時後醍醐天皇ヲ隱岐ニ遷御シ奉ル、六月二十五日、鎌倉府前宰相光顯ヲ出羽ニ流ス。

同三年四月、後醍醐天皇結城宗廣入道々忠ニ勅シテ、出羽陸奥兩國ノ軍ヲ催シ、北條高時ヲ討伐セシメ玉フ。

被

論旨

前相摸守平高時法師、不顧國家軌範、猥背君臣之禮式、歟、掠領於諸國、令勞苦万民、僭乱之至、何事如之乎、已爲朝敵、不遁天罪、爲却彼徒、所被舉義兵也、早催出羽陸奥兩國軍勢、可應征伐、勳功之賞、宜依請者、天氣如之悉之。

元弘三年四月十七日、

左中將判。

結城上野入道館。

是ヨリ前、大江佐房ノ卒スルヤ、男佐泰、上田氏ヲ襲ク、而テ佐房ノ弟、修理亮高元、寒河江庄ヲ領ス、高元没シ弟伯耆守廣時嗣ク、廣時没シ、男政廣襲ク、政廣没シ男元顯襲ク、元顯没シ男元政ヲ襲ク、元弘ノ事實ニ元政ノ時トナス、初メ承久ノ役、高祖親廣京師ニ在リ、首トシテ官軍ニ應ス、其敗ル、ヤ、北條氏ノ爲メニ譴セララル、是ニ於テ元政奮テ官軍ニ應ス、而シテ紀錄斷絶、其詳得テ記スヘカラス、八月十五日、葉室光顯出羽守ニ任シ、從三位ニ叙ス、同月二十二日、新田義貞結城宗廣等鎌倉府ヲ討滅ス。

建武元年、八月十日、大納言正二位堀河具親、陸奥出羽按察使ニ兼任ス、同月朝廷雜訴決斷所員ヲ増シ、八番トナス、出羽陸奥第三番タリ、而シテ洞院公賢、堀河具親、中御門冬定、九條實治、右中將宗兼、壬生匡遠、冷泉章興、藤原宗成、長井高廣、佐々木如覺、

高師直、齋藤基夏、諏訪圓忠等番員タリ、十月九日、前權大納言葉室長隆、按察使ニ任
ス、同月諸國莊園郷保地頭職ニ令シ、所管ノ田數ヲ注進シ、正稅以下雜物二十分ノ一
ヲ進納シ、且ツ毎十町ニ仕丁一人ヲ進貢シ、一ヶ月ヲ期トシテ、勤仕セシメラル、十一
月護良親王鎌倉ニ流サレ玉フ。

同二年五月二十一日、出羽國司葉室光顯、凶徒ニ害セララル、(異本十)十一月二日、足利尊氏
鎌倉ニ叛シ、檄ヲ四方ニ傳フ、同月八日北寒河江庄、吉田堀口、三曹司、兩所窪目、地頭
職ヲ圓覺寺ニ給セラル、同月鎮守府將軍北畠顯家ニ詔シ、陸奥出羽ノ兵ヲ發シテ、足
利尊氏ヲ鎌倉ニ討伐セシメ玉フ、十二月某日、葉室光世出羽國司ニ任ス、光世ハ光顯
ノ男ナリ。

延元々々年、正月十日、足利尊氏京師ヲ犯ス、後醍醐天皇延曆寺ニ遷幸シ玉フ、同月十四
日、北畠顯家出羽陸奥ノ軍ヲ帥テ、東坂下ニ到着ス、官軍大ニ振フ、同月二十六日、顯
家等大舉シテ京師ヲ復ス、足利尊氏西國ニ走ル、二月四日、天皇京師ニ還幸ス、同月七
日、顯家義良親王ヲ奉シテ鎮ニ還ル、時ニ大江氏ノ族、長井氏及ヒ安保光泰等尊氏ニ應

シ、出羽分裂ス、五月二十五日、足利尊氏東犯ス、新田義貞楠正成等ト邀戰シ、正成戰
死シ、義貞等敗還ス、天皇再ヒ延曆寺ニ遷幸ス、八月十五日、尊氏光嚴帝ノ弟豐仁親王
ヲ擁立シ、建武ノ號ヲ用ユ、十月十日、天皇尊氏ノ請ヲ納レ、京師ニ還幸ス、尊氏天皇
ヲ花山院ニ幽ス、新田義貞皇太子恒良親王ヲ奉シ、北國ニ走ル、十二月二十一日、天皇
河内國東條ニ潛幸シ、尋テ大和國吉野ニ潛幸シ玉ヒ、顯家ニ勅シテ東海東山ノ兵ヲ帥
テ、尊氏ヲ討伐セシメ玉フ、時ニ顯家將ニ西上セントシ下野ニ軍ス。

相催東山東海兩道諸國卒官軍發向京都可令追討尊氏直義等黨類有勳功之輩各可有抽
賞若有凶徒與因之族者嚴密可令加治罰者依

天氣言上如件。

延元々々十二月廿五日、

左中將持定狀。

進上、鎮守府中納言殿。

延元二年、三月二日、僧盛俊寒河江庄、上野村田在家ヲ賣却ス、古証文慈恩寺塔中寶林
坊ニ現存ス、寒河江地方ノ南朝正朔ヲ奉シタルモノ以テ、大江元政ノ足利氏ニ屬セサ
ルヲ傍証スヘシ、七月十日、足利直義去々年十一月八日ノ官府、并關東安堵狀ニ據リ、

北寒河江庄五ヶ郷吉田堀口三曹ノ地頭職ヲ鎌倉圓覺寺ニ知行セシム。

同三年正月七日、北畠顯家出羽陸奥ノ官軍ヲ帥テ鎌倉二次ス、三月二十二日、朝廷東北ノ官軍西上シテ、南都天王寺等ニ戰鬪スルコトヲ、阿曾大宮司ニ報シ、促カシテ上洛セシメラル、大宮司ハ遙ニ出羽陸奥ノ官軍ト相應シテ、力ヲ足利尊氏追討ニ致セルモノナリ、五月二十二日、鎮守府大將軍北畠顯家、高師直ト和泉國境ニ戰ヒ之ニ死ス、奥羽ノ將士多ク之ニ殉ス、閏七月二日、新田義貞越前國藤島ニ戰没ス、同月二十五日、朝廷結城宗廣ノ建議ニ因リ、北畠顯信ヲ鎮守府大將軍ニ任シ、父親房ト共ニ義良親王ヲ奉シ、陸奥ニ赴キ、回復ヲ謀ラシメラル、八月十一日、北朝足利尊氏ヲ征夷大將軍ニ任ス、九月十一日、北畠顯信等颯ニ天龍洋ニ逢ヒ、船艦四散ス、顯信義良親王結城宗廣等伊勢ニ漂着ス、北畠親房常陸國東條浦ニ漂着ス、其餘各地ニ漂着スルモノ、多クハ賊兵ニ倒サレタリ。
十一月十一日、是ヨリ前、葛西清貞、北畠親房ノ常陸小田城ニ在ルヲ聞クヤ、來リテ奥羽ヲ蕩平セラレンコトヲ請フ、親房告クルニ、國司顯信ヲシテ、奥羽ヲ討平セシメ、親シ

ク坂東ヲ鎮服センコトヲ以テス、同月二十一日、結城宗廣病テ伊勢ニ卒ス、年七十、遺言スルニ討賊興復ノ事ヲ以テス。
同四年八月十六日、後醍醐天皇吉野ノ行宮ニ崩御シ給フ、十月三日、後村上天皇吉野ノ行宮ニ即位シ給フ。

興國元年、五月十六日、北畠親房出羽陸奥ノ官軍、利ヲ得タルコトヲ聞キ、將ニ親シク東下セントス、未タ機ヲ得ス、因テ族人ヲシテ代リテ窃ニ東下セシム。

奥方并羽州邊事次第ニ得利之躰候歟、方々依有申旨、雖有下向之志、此方事、又以難關之仍身同事之人々令下向候、爲路次も難義之上不及披露中々惘然、以て候可候也、即可被送宇都峰方候、又海陸無相違之様、被仰黒木城中也、猶々一向を乞ふ候て候者、可宜爲一身存知、密々申候、委細追可申候也、恐々。

五月十六日、

花押、(親房卿)

結城大藏大輔殿

同年七月三日、鎮守府將軍北畠顯信、既ニ牡鹿郡葛西清貞カ居城ニ入り、將ニ賊將石塔秀廣ヲ多賀國府ニ討セントシ、檄シテ傍近ノ官軍ヲ招集ス。

同二年十二月一日、是ヨリ前、中院具信出羽國藤島城ニ入り、書ヲ結城親朝ニ與へ、明春ヲ待テ當國ノ凶徒ヲ對治セントスルコトヲ報ス。

同三年十二月二十三日、足利尊氏ノ母上杉氏没ス、將士多ク喪ニ走ル。

同四年二月五日、越後守護代、長尾景忠ノ屬、藤原公房出羽ノ官軍越後ヲ襲撃センコトヲ懼レ、岩船蒲原諸郡ノ將士ニ、上杉氏ノ喪ニ赴吊スルコトヲ停メ、專ラ之ニ警固セシム。

其後何條御事候哉、去月十九日、左衛門尉上野へ上洛候狀をも可進候處、無差事候間、不進候由申越候、去年十二月二十三日、京都大方殿御隱事、爲御訪被參申候、就其ハ此邊ハ爲羽州警固、相構不可有御參候由申置候爲御心得申候、恐々謹言。

二月五日、

藤原公房。

謹上、和田四郎兵衛尉殿。

同年八月十九日、結城親朝、叛テ足利尊氏ニ降ル、其族白河爲興、出羽國藤島城ニ據リ、敢テ降ラス、十一月十一日、常陸國關城以下陷ル、守永親王陸奥ニ、北畠親房春日顯時ト吉野ニ走ル、十二月十四日、中院具信白河爲興等未タ關城陷落ヲ知ラス、遙ニ關城

ニ聲援セントシ、越後大川城ヲ攻撃シ、其將大川持長ヲ破走ス。

去十四日、羽前藤島凶徒等、寄來當國候處、同日酉刻被打落大川彦次郎持長楯候間、須土宇山當平申所へ持長引退了、因茲當庄人々相共可罷向候、即時先岩船まで可有御出候、明日ハ御敵山内へ打入候由聞候、念々可有合力候、以此趣、藏王堂令申了、恐々謹言。

十二月十六日、

藤原公房奉。

謹上、和田四郎兵衛殿。

興國五年、七月十三日、是ヨリ前キ、田川郡藤島城攻陷セララル、中院具信、白河爲興、小國政光等、飽海郡河内城ニ退守シ、以テ回復ヲ謀ル、而テ諸將足利氏ニ降附スルモノ亦多シ、從三位右兵衛督葉室光世節ニ死ス。

花押未詳。

自是歎被仰之處、專使尤御本意候。

抑當國事依爲合戰難儀、大略属凶徒、雖然御方之志異于他者歟、就中白河出羽權守一方並大將

小國兵庫頭四頭一未異變、但凶賊對治事、相待時節者也、歸淳素之條、定不可有程歟。

先年一所御合戰之間、無御等閑候、定被同心申歟者、宰相中將家中院具信御氣色所也、仍執達如件。

七月十三日、

(宛名切)

治部少輔盛胤奉。

未入見參之處ニ、態御使悦入候、抑當國合戰國競而御方心替仕候之間、用飼(要害)破候て、御敵國中乱入間、面々城雖引籠候、猶以甲人(降人)にて罷出候、國人大略令上洛候、雖加様候爲興計河内城ニ引籠候、猶後日打出候事、不可有子細候、將又東國様委細ニ承候者、此方合力之御音信ト目出度悦入候、無指事候とも、便宜之時申承候ハ、本意候、恐々謹言。

七月十三日、

白河出羽權守爲興花押。

修理大夫殿。

同六年正月某日、葉室光久、出羽國司秋田城介ニ補ス、光久故ノ光顯ノ二子ナリ、八月二十九日、足利尊氏天龍寺ヲ創建シテ、之ヲ供養ス、谷地地頭中條備前守、同田河郡除目地頭、安保肥前守等之ニ扈從ス、以テ中條備前守ノ足利氏ニ應シタルヲ知ルヘシ。

正平二年八月、田村郡宇津峯城陷ル、北畠顯信守永親王ヲ奉シテ、出羽ニ走ル、親王ハ世ノ所謂宇津峯宮ナリ。

猿羽村、最上郡。

長者原ハ、元祿十年別レテ別村となりしヲ、近年支郷とある、此村ニ往古富貴なるもの住

ゝる跡、大なる屋敷の跡あり、又長者屋敷ともいへり、是ハ北畠中納言顯家の落たまひし時、一時住たまひし所あり、近年迄石碑ありとあり云々。

按、顯家出羽ニ落ルノ事、曾テコレアルヲ見ス、蓋シ顯信ヲ誤傳シテ、顯家トナシタルナリ、是歳顯信守永親王ヲ奉シ、出羽國立谷澤ニ入り、以テ出羽ノ官軍ヲ振起ス。

正平三年二月、北畠顯信立谷澤城ニ在リ、賊兵來リ攻ム、顯信討テ松田太郎等ヲ倒ス、太郎ハ結城顯朝ノ屬ナリ。

其上於羽立谷澤城者、松田太郎殞命以來、至于今、數ケ度軍忠之上者云々。

同四年九月九日、足利尊氏、四子、基氏ヲシテ、關東ヲ管領セシム、當時奥羽ヲ合シテ、關東十州ト云フ。

同六年二月十一日、北畠顯信出羽ニ在リ、相馬親胤ニ諭シテ、官軍ニ應セシム、親胤應セス、三月顯信守永親王ヲ奉シテ、兵ヲ田川郡ニ舉ク、官軍大ニ振フ、陸奥ノ探題吉良貞家等、多賀國府ヲ發シ、出羽ニ入ル、十月二十七日、貞家等戰ヒテ利ヲ失ヒ、退ヒテ出羽ノ國府寺ニ據ル、國府寺現今山形市柏山寺是ナリ。

着到。

摩和邊小太郎政本、代彥五郎國監。

右去月二十七日、馳參羽州國府寺御陣、至于阿谷御陣、致宿直警固候畢、仍着到如件。

觀應二年十一月、日。

承了（花押）。

阿谷ハ現今東村山郡山寺村、大字荒谷ニシテ、二口越ヨリ宮城縣名取郡ニ達スル舊驛次ナリ、十一月顯信等類ニ貞家ヲ擊破シ、進テ名取郡ニ入ル、男守親伊達田村諸族ト來援ス、二十二日、大ニ廣瀨川ニ戰フ、貞家退テ伊具城ニ入ル、是歲足利尊氏弟直義ト隙アリ、直義遂ニ官軍ニ降ル、是ニ於テ東北ノ官軍、大ニ振フ。

同七年二月二十六日、足利尊氏弟直義ヲ鳩殺ス、閏二月、北畠顯信、吉良貞家ヲ擊破シ、多賀國府ニ據ル、賊兵來集、貞家ヲ援ク、三月十五日、國府陷ル、顯信刈田郡三澤城ニ遁ル、二十四日、顯信宇津峯城ニ入り、國司守親ト合ス、賊兵來リ攻メ、互ニ勝敗アリ、七月四日、足利尊氏村山郡小田島庄、東根孫五郎跡ヲ鎌倉寶戒寺造營料所ニ寄進ス、小田島庄ハ寒河江庄ノ隣庄ナリ。

寄進、圓頓寶戒寺。

上總國、武射郡、内小松村、上藤中務右衛門跡並、出羽國小田島庄内東根孫五郎跡事。

右爲當寺造營料所、永代所寄進之狀如件。

觀應三年七月四日、

正二位源朝臣花押。

圓頓寶戒寺雜掌申、出羽國小田島庄内、東根孫五郎跡事、早任寄附狀之旨、沙汰付下地於雜掌可被執達之狀、如件。

觀應三年七月廿七日、

花押（尊氏）

長井備前太郎殿。

同年九月三日、是ヨリ前キ、足利氏北寒河江庄、吉田堀口三曹司兩所窪目等ヲ圓覺寺ニ寄進ス、時ニ大江元政官軍ニ屬ス、因テ抑留シテ之ヲ與ヘス、足利氏重テ長井某ニ命シ、之ヲ雜掌乘急ニ交付セシム。

圓覺寺雜掌乘急申、出羽國寒河江庄内、吉田堀口三曹司窪目等事、寺家帶代々公檢知行處、少輔掃部助押領云々、太不可然、早止被輩妨不日可沙汰付當寺雜掌狀、如件。

觀應三年九月三日、

花押、義詮。

長井備前太郎殿。

同年十二月十七日、足利尊氏、村山郡小田島庄ヲ以テ結城顯朝ニ換給ス。

花押、尊氏。

下結城彈正少弼顯朝。

可令早領知陸奥國田村庄闕所並出羽國小田島庄事。

右爲陸奥國小野保安達東根等替所宛行也、者早守先例可致沙汰狀、如件。

文和元年十二月十七日。

同月廿日、足利尊氏、千葉介某（某ハ宮城郡ノ國分氏カ）ニ命シ、小田島庄内、東根孫五郎跡ヲ、圓頓寶戒寺ノ雜掌ニ交付シ、証狀ヲ收領セシム。

圓頓寶戒寺雜掌申出羽國小田島庄内、東根孫五郎跡事、任寄附之旨沙汰付下地於雜掌、可被執進之狀、如件。

文和元年十二月廿日。

花押、尊氏。

千葉介殿。

同八年五月四日、宇津峯城陷ル、北畠顯信再ヒ出羽ニ遁ル。

同九年四月十七日、准三宮北畠親房加名生ニ薨ス、五月六日、田川郡大泉左京太夫師

氏卒ス、師氏ハ大江元政ト共ニ官軍ニ屬セルモノナリ、十一月七日、寒河江庄上野村

ニ於テ、新酒ヲ釀造スルヲ禁ス。

於上野百姓等秋酒節酒事下部等雖成契望不可勤、仍爲後日之狀、如件。

正平九年十一月七日。

花押、（未詳或ハ大）

以上ノ古證文、未タ其花押ヲ詳ニスル能ハスト雖モ、其正平ノ年號ヲ記セルヲ以テ、寒河江地方ノ依然トシテ、南朝ニ勤王シタルヲ證スヘキナリ、是レ宇津峯陷沒後ニ於テ、北畠顯信等ノ再ヒ出羽ニ遁レタリシ所以ニハ非リシカ。

同十一年四月八日、慈恩寺炎燒ス、（北朝延文元年）六月二十四日、小田島庄、前備前守平長義、巨

鐘ヲ鑄テ之ヲ佛日山普光精舎ニ寄進ス、長義又南朝ニ勤王セルモノ、然凡其世系事歴ト皆未タ之ヲ詳ニスルヲ能ハス、憾ムヘキナリ、鐘銘左ノ如シ。

羽州中央、小田島庄東根境致、白津之郷、山號佛日、寺號普光、鑄鐘洪月、林鐘特當借、爐炎熱通治風涼、一樓鯨首、萬斛銅湯、大解脫器、吸空牡腸、圓滿覺口、吐寺外方、天曉報告、地久天長、日暮扣發、檀信吉祥。

正平十一年丙申六月二十四日。

住持比丘閑雲叟希孚。

大檀那前備前守從五位上平朝臣長義

願主比丘紹欽

大工左衛門大夫景弘

八月六日、足利尊氏、其族斯波修理太夫兼頼ヲ出羽按察使トナシ、山形城ニ入り、以テ出羽ノ官軍ヲ攻撃セシム、兼頼ハ左京太夫家兼ノ第二子ナリ、兄直持陸奥ノ探題トナリ、兼頼ト共ニ奥羽官軍ヲ攻撃ス、兼頼ノ山形ニ入ルヤ、寒河江庄ノ諸豪皆南朝ヲ奉シテ兼頼ニ從ハス、大谷村天滿天神社々人、白田安繁ノ如キ其一ナリ。

其後足利將軍ノ家族源兼頼當國ニ主たる時國民並安繁リ徒令ノ不應兼頼怒テ其祭田ヲ沒收セ云々(風土記)

山形殿ハ、大崎京都より御下ノ二代目左衛門大夫陸奥守殿ノ二番目ノ御曹司修理大夫兼頼ト申候、延文元年ニ大崎より出羽へ御越候テ、守護ニ成給ひ候。(餘日記録)

同年四月八日、慈恩寺災アリ、本堂釋迦堂僅ニ免ル、十一月北畠顯信、兵ヲ田川郡藤島城ニ起ス、賊兵來リ攻ム、城陷ル、顯信遁レ奔ル、此役守良親王、或ハ國難ニ殉シ給ヒタルカ、爾後復タ親王ノ消息ヲ徵スルヲ能ハス、藤島城址ノ南方ニ、六所神社アリ、社

畔ニ古墳アリ、傳テ花山天皇ノ遺墳トナス、天皇ノ當地ニ崩御シ給ハサリシヲ、辨論ニ要ナシ、或ハ親王ノ遺墳ヲ誤傳シタルニハ非リシカ、又遊佐郷大楯村帝立寺、是レ亦親王ノ遺墳タルモ知ルヘカラス。

一遊佐郷平津村古平都ト書帝立寺由來。

都興山帝立寺、往古無本寺末寺三四ヶ寺有近年寺用、此寺ノ麓、平都村大楯村ト云二村有、平津

ニハ彈正やゝきと云屋敷跡有、彈正ハ則太子の家長なまし由、大楯ハ帝立太子殿屋の跡ト云傳、此村の田の中ニ、方一丈計の草むら有、此所太子の墓所といへど、里民みゝりに入
ハ必、有と云、帝立寺、中興大空禪師考る事有テ、田民を催、此草むらに入、草を薙き、
ちを穿ちて礎を尋ね、果て地ニ敷石板四五枚を得、夫ハ墳墓ト覺敷處を、やゝ
むるに、五輪の石塔の頭を得、れとも、殘形を不得、是ハ里民深く崇信、其殘を尋求む
る、或ハ其邊の溝流の中、火を得、泥ちの中、空風を得、終に五輪全備す、然とも幾
百歳を経るとも不知、文字滅没、歳月を知る事不能、禪師悲歎の余り、法華經を書寫し、
墳墓の所へ埋、其上へ此五輪を立、今柵よて是をこひ且又帝立寺の惣門の傍、鎮守
のう、法後に碑石を立、事實を書殘さざり、此寺に古來ハ高五寸計の位牌二位有、帝立太
子、彈正戒名有、此邊に御輿休村有、是も太子の休足、給ふ所と云。

是歲、出羽國司葉室光久薨去ス、是ヨリ按察使斯波兼頼、大ニ其威勢ヲ發展スルヲ得タリ。

同十二年三月二日、僧盛俊寒河江庄、上野村内、河原先達跡田在家ヲ賣却ス、同二十四日、足利基氏上総宮内ニ命シ、北寒河江庄五ヶ郷ヲ圓覺寺雜掌ニ交付セシム。

〇〇〇上野村之内、河原先達跡田在家事。

令所當錢肆貫文者。

右之田在家、并先達居在家王子御初物所として、彼在家ニつく申處の分、一分も不殘作人孫七殿打渡候也、於年貢者任所之例、所被沙汰、此外臨時公役万、公事御出來候とも、作人のとつらひあるへり、す候、仍宛文之狀、如件。

延文二年三月二日、

盛俊 花押。

圓覺寺雜掌申、出羽國北寒河江庄内、五ヶ郷吉田堀口三曹司兩所窪目等地頭職事爲嚴重寺領上者、早退濫妨人、沙汰付下地於寺家雜掌可被執進請取之狀、如件。

延文二年三月廿四日、

花押。

上総宮内大輔殿。

同年十二月廿日、孫七入道妙賢ナルモノ、寒河江庄上田村内ノ土田ヲ、慈恩寺塔中淨空

房ニ沽却ス。

上野村内五郎太郎入道名わけふの事。

合。

右件の田在家ハ、戊戌年より丁未まで、拾ヶ年を淨空御房かたへ、まきせに伍貫文うけとり候て、うちわさす處實なり、たゞやくそくの年月を、くり候て、かへ給ひ候ん時、ほんせに伍貫文のようこうをへかへしまいとて、かへしまいとて、かへ給ひ候へく候、仍爲後日狀、如件。
うちわたす主上野住人。

孫七入道妙賢花押。

佐藤五郎國經全。

延文二年丁酉十二月廿日。

五郎入道名わけふん田在家つほつけの事。
又のハ、六百束かり、又三郎作二百五十束かり、いやしき田、八百束かり、性教作、四百束かり、中のつほ、七百束かり、教親作、五百束かり、すきのまわり、二百束かり、とまゐすひ、七十束かり。
已上かりかす、三千五百束かり、代御年貢。

已上漆貫二百九十四文定。

御正作稻、百五十七束定。

立木、四十六束定。

御工事人ハ、五分二れまゝたるへく候。

いやしきにハ道妙あとをのこす所あくまいるへく候、仍爲後日つほつけの注文狀、如件。

延文二年酉十二月廿日、

孫七入道妙賢花押。

以上古證文ヲ以テ、當時ノ事情ヲ推考スルニ、蓋シ南北朝ノ際、寒河江地方ハ南朝ノ正朔ヲ奉シテ專ラ南朝ニ勤王シタリ、按察使斯波兼頼入國ニ及テ、其ノ威力ニ壓迫セラレ、慈恩寺僧徒ノ如キモ、遂ニ北朝ニ降附シタリシ事ヲ推知スヘシ。

同十三年四月晦日、足利尊氏薨ス、男義詮嗣ク、八月三十日、北畠顯信奥羽兩國ヲ靜謐セント欲シ、出羽國一宮兩所大菩薩ニ祈願ス。

奉寄進出羽國一宮兩所大菩薩、由利郡小石郷乙友村（今ノ小友村也）事。

右爲天下興復、別而陸奥出羽兩國靜謐所奉寄進之狀如件。

正平十三年八月三十日。

從一位行前内大臣源朝臣。

同十四年某月、大江元政節ニ殉ス、元政ハ元顯ノ子ナリ、男時茂嗣ク、按スルニ元政蓋シ斯波兼頼ト戦ヒ、遂ニ戦死シタルモノ歟、然レ記録ノ徵證ニ資スヘキモノナシ、想ニ元政敗死ノ際、大江氏ノ文書記録ト舉テ滅亡シタリシヤ、知ルヘキナリ。

元顯長男、從五位下因幡守元政、南朝ニ仕ヘ正平十四年、羽宮方ニテ戦死ス。

○元政、少輔彦太郎、時茂、上総守

母村上修理七郎頼治女童名千福丸、羽州宮方ニテ討死也。

同二十三年七月、新田義宗脇屋義治等、兵ヲ舉ク、陸奥出羽ノ官軍所在之ニ應ス、大江時茂ノ子溝延茂信、亦兵ヲ舉テ克タス、寒河江庄添川ニ自殺ス、從者六十餘人皆之ニ死ス、按スルニ茂信ノ死未タ其歲月ヲ詳ニセス、姑ク之ヲ假定スト云フ、茂信ノ子家廣、孫元家、元家ノ子滿教、其子滿廣、孫宗廣、相續テ溝延氏ト稱ス、茂信ノ弟元時左澤氏ト稱ス、氏政滿廣時高頼廣政勝滿政氏政々周二傳ヘテ亡滅ス、茂信ニ弟時氏宗家ヲ領ス。

同十六年十月二日、足利義詮田川郡大泉庄ヲ上杉憲顯ニ給與ス、蓋シ當時村山郡ノ南

軍ハ、斯波氏ニ田川郡ノ南軍ハ上杉氏ニ壓迫セラレ、以テ其倔強ノ狀情ヲ想見スヘキナリ、而シテ此間北畠顯信、猶奧羽ノ間ニ轉鬪シテ其忠節ヲ改メス、其大節實ニ之ヲ仰望スヘキナリ。

同二十二年四月二十六日、關東管領足利基氏卒ス、男氏滿嗣ク、十二月七日、足利義詮薨ス、男義滿嗣ク。

同二十四年七月二十五日、慈恩寺權律師幸俊、寒河江庄八畝村田地五段ヲ阿闍梨善賀ニ給ス。

(前一行切レル)

合五段者、^{八畝村}在之、七月十四日、

右以人為彼職任相傳之旨阿闍梨善賀所補任也、但有限於寺役者、守先例、無懈怠可令勤仕者也、寺家宜勿承知違失仍補任之狀、如件。

應安貳年己酉七月廿五日、

權律師幸俊花押。

文中二年三月、大江茂時卒ス、四男時氏尋テ北朝ニ降ル、時氏寒河江ニ居城シ、寒河江氏ト稱ス。

天授三年十二月二十四日、足利義滿官符宣ニ據リ、執事細川頼之ニ命シ、出羽按察使斯波兼頼ニ命シ、圓覺寺領北寒河江庄吉田堀口三曹司兩所窪目五ヶ郷ノ諸役ヲ免除セシム。

圓覺寺領、出羽國北寒河江庄、吉田堀口三曹司兩所窪目等五ヶ郷諸役免除事、可被下官符宣也、可被存知之狀、依仰執達如件。

永和三年十二月廿四日、

武藏守花押。

斯波修理大夫殿。

以上文書ニ據リテ、考フルニ、北寒河江方面ハ、是ノ時既ニ兼頼ノ知下ニ屬シタルヲ知ルヘシ。

同五年六月八日、出羽按察使斯波兼頼卒ス、年六十三、男直家嗣ク、兼頼曾テ光明寺ヲ創建シ、其像ヲ安置ス、現今山形市七日町光明寺是ナリ。

同六年十月、伊達宗遠置賜郡長井庄ヲ略取ス、寒河江氏ノ同族、長井廣房遂ニ長井ヲ失フ、鎌倉管領足利氏滿、近傍諸將ニ命シ、廣房ヲ援ケ宗遠ヲ伐シム、及ハス、伊達世次考、當時ノ文書ヲ譯記ス、左ノ如シ。

攻長井掃部頭入道々廣取其地出羽國置民郡長井庄而入之于時鎌倉管領持氏朝臣(氏滿カ)奉京都將軍命令近國諸將曰道廣本領羽州長井庄以下所々嚮已以京都命遵行退伊達惡黨了雖然聞彼輩重可違乱早可合力於道廣令其全知行之云々は見與小澤伊賀守某書々七月廿五日無年號今家臣安田氏傳之

同年十一月某日從一位右大臣北畠顯信薨ス、年八十四歲、元中元年三月五日、寒河江上野村孫七入道ノ田租三貫文ヲ免除ス。

上野村孫七入道在本年貢内御免狀之事。
合參貫文者。

右御免狀者、自本無土本依此間之不作而重々訴訟申問、御住持遇西堂御時御免狀如件。
至德元年甲子三月五日、
庄主都管全用花押。

同二年大江義信、溝延村八幡社ヲ再建シ、稻八百束ヲ寄進シ、別當神宮寺ヲ建立ス。

親廣卿之裔、大江義信、溝延ノ館主タリシ時、元中二年社殿再建、當村ノ鎮守タルニ依リ、年々稻八百束宛寄進セラレ、別當神宮寺ヲ建ラル。

同五年十月一日、慈恩寺權僧都幸巖、賣券ニ據リ、寒河江庄八畝村五段ノ地ヲ、小松房

丸ニ所務シ、寺役ヲ勤仕セシム。

(前一行切レル)

合五段 八畝村在之

右以人為彼職任賣券之旨、小松房丸所補任也、但有限於寺役者、守先例、無懈怠可令勤仕者也、寺家宜承知勿違失、仍補任狀如件。

嘉慶貳年戊辰十月一日、

權僧都幸巖花押。

同年某月、大江時氏錢二十五貫ヲ、溝延八幡社ニ寄進ス。

元中五年、寒河江城主、大江時氏、錢廿五貫文ヲ寄進ス。

同六年十月二十九日、權僧都幸巖、相傳ニ據リ、末代丸ヲ慈恩寺、供僧職ニ補任ス。

補任、慈恩寺供僧職坊々地事。

合一字東院在之。

右以人為彼職任相傳之旨、末代丸所補任也、但有限於寺役者、守先例、無懈怠可令勤仕、寺家宜承知勿違失、仍補任狀如件。

康應元年己巳十月廿九日、

權僧都幸巖花押。

同七年四月十八日、足利滿貞、陸奥出羽ノ管領ニ任シ、安積郡笹川ニ鎮ス、因テ笹川御所ト稱ス、十月二十三日、佐藤松代丸、鬼越ノ坊地一字ヲ賣却ス。

依有要用賣渡坊地一字事。

合直錢廿壹貫文鬼越在之

右此坊地限直錢賣渡實也、何親類兄弟出來候致沙汰候共、任此狀之旨全不可有違乱妨候者也、仍爲後日賣券之狀如件。

賣主北寒河江檜皮住人、佐藤松代丸、花押。

明德元年庚午十月廿三日。

同九年正月十一日、是ヨリ前鎌倉管領足利氏滿、陸奥出羽ヲ管領ス、是ニ於テ白河朝常ヲ鎌倉ニ招致ス。

陸奥出羽兩國事、可致沙汰之由、所被仰下也、早速可馳參之狀如件。

明德三年正月十一日、

花押。

白河參河七郎殿。

同年閏十月五日、後龜山天皇神器ヲ後小松天皇ニ傳へ給フ、延元々年後醍醐天皇南遷

ヨリ、九ノ五十七年ニシテ歸一ス、十二月十七日、慈恩寺衆徒等彌勒尊ノ輿ヲ箕輪郷ニ振置ス、蓋シ同郷所領ノ輿奪ヲ爭ヒタルナリ、以テ當時衆徒ノ威焰ヲ察スヘシ、然レ其事狀ノ如キ、今得テ之ヲ詳ニスルコト能ハス。

明德三年十二月十七日、有靈異鎮輿振箕輪郷安坐、同四年應永二年正月五日歸坐、此時箕輪郷屬寺産。

應永二年、正月五日、慈恩寺彌勒尊輿ヲ箕輪郷ヨリ奉還ス。

同三年八月九日、留守家繼、中條某ノ戰功ヲ賞シ、北寒河江庄上田鍋ヲ給ス、今茲六月田村庄司蜂起ス、某蓋シ此ノ役ニ出戰シタルカ。

上田鍋之事、依當陣之忠節、被宛給中條備前守、可有此旨心得之狀如件。

應永三年八月九日、

藤原家繼、花押。

中條備前守殿。

奥州田村庄司蜂起、氏滿進發、六月朔日白川下着合戰、田村敗亡、十九日自白川飯坐南方紀傳、同年十二月二十七日、慈恩寺阿闍梨任舜、同幸尊、沽券ニ任セ、新熊野供僧膳田八、鍬村五段ノ地ヲ、大隅律師永舜ニ補任セシム。

補任

新熊野七月十日供僧膳田事。

合五段八畝村内中者。田面在之。

右以人為彼職、任沽券旨奉補任大隅律師永舜處也、但於寺役者、守先例無懈怠、可有御勤仕候者也、寺家宜承知勿違失、仍補任狀如件。

應永三年丙子極月廿七日、

阿闍梨任舜花押。

阿闍梨幸尊全。

同五年十月十七日、慈恩寺塔中、櫻本坊、超宥、其坊地ヲ賣却ス。

右坊之地ハ、ゑいたい汝かきりて、ちきせん五貫ようり見たすところ實也、但いりなるまゝ合五貫。

右坊之地ハ、ゑいたい汝かきりて、ちきせん五貫ようり見たすところ實也、但いりなるまゝ合五貫。んるいきやうていもんと弟子なり、出來さた汝すりまつり候とも、この狀汝さきとして御さた候のんニ、全いきいらんあるへりらむ候、仍爲後日うりたんの狀如件。

應永五年戊子十月十七日、

慈恩寺中院、櫻本坊超宥花押。

同年十一月四日、鎌倉並ニ陸奥出羽ノ管領、足利氏滿卒ス、男滿兼嗣ク。

同六年三月、幕府足利滿貞、足利滿直ニ命シ、奥羽ヲ鎮撫セシム、滿貞笹川ニ居リ、滿直稻村ニ居ル。

按足利殿の時、奥羽の成敗は、斯波兩家大崎最上の世職として、沙汰せる所なれハ、別ニ管領を置くへき謂れなきに似たりといへとも、明德中鹿苑院殿の定めにて、奥羽の二國とも關東八州とひとくく、鎌倉公方家にて管領あるへき由命せられしりは、應永六年上杉禪助のはかひひとて、當時の公方滿兼朝臣の弟、滿直滿貞を奥羽の管領ニなきて、稻村篠川の兩所に居らめ、二國の政務をとらめたり、斯波氏もとより、二州の統領たりといへとも、世職とありてハ、器用にあたらざる人もおのつりら其職に居るか、世のならひなれハ、警備とハ、のはさる事なとあるか故に、鎌倉より別にこの兩將を下して、國務をとらしむる定もいてきりあり云々、武家名名抄

同年七月二十八日、鎌倉管領足利滿兼、陸奥出羽ヲ巡行セントシ、白川ニ至リ、遂ニ稻村ニ逗留ス、十一月鎌倉ニ還ル。

同十年二月十日、寒河江庄箕輪郷、渡澤ノ住人、家吉渡澤ノ田地ヲ慈恩寺塔中大園坊

二賣却ス。

依要用有賣渡申田之事。

合直錢參貫文者

右件之渡澤の藤五郎在家の内、澤田三百束、荊た大圓坊へ永代たりきつて賣渡申處實正也、但大やけの役ハ此の田の内よて三百五拾文、無未進御つとめ候て、未代御持あるへく候、此外身の孫子兄弟出來候て、異儀に申候とも、全其所のちとうまんところのいらんさはさけあるましく候、又ハいりあるらんもんせいけなりとも、此狀たさきとして、子細あるはしく候、依爲後日田の狀如件。

うりぬく箕輪郷渡澤住人藤五郎家吉花押。

應永十年未癸二月十日。

同十三年五月、是ヨリ前、北寒河江庄谷地郷兵乱アリ、篠川滿直板橋某ノ戦功ヲ褒ス、而シテ中條備前守某此乱ニ戦没シタルカ、然凡史料備ハラス、其詳得テ記スヘカラス。

應永十二年乙酉三月十五日卒、則號慈眼寺殿鑑翁大居士。(慈眼寺記)

於谷地城致忠節條、尤以神妙也、向後可被抽戰功狀如件。

應永十二年五月十四日、

花押(滿直)。

板橋掃部助殿。

同十三年正月十三日、足利幕府中條某ニ、北寒河江庄小堤小見兩郷ヲ領知セシム。

出羽國北寒河江庄之内、小堤郷小見郷之事、右任先例可被領知之狀如件。

應永十三年正月十三日、

中條又九郎殿。

同十六年七月二十二日、鎌倉管領足利滿兼卒ス。

同十七年正月六日、右京大夫最上直家卒ス、男滿直嗣ク、直家ハ修理大夫兼頼ノ子ナリ。

同十九年四月十日、北寒河江庄、小堤小見兩郷地頭中條長國、駿河守ニ補任セラル、而テ長國ノ事蹟、其詳傳ハラス。

當今。

應永十九年四月十日宣旨。

藤原長國。

宣任 駿河守

藏人勘解由平知輔奉。

同二十三年八月三日、最上滿直卒ス、男滿家嗣ク。

同二十五年十二月十三日、阿闍梨幸増、慈恩寺供僧職三昧田ヲ買得ス。

補任。

慈恩寺供僧職三昧田事。

合七段八鐵村樋口者在之。

右以人為彼職任賣狀之旨阿闍梨幸増補任處也、但有限於寺役者、守先例無懈怠可令勤仕者也、寺家宜勿承知違失、仍補任狀如件。

阿闍梨、幸鍍花押。

南坐行事、律師、幸用花押。

應永廿五年戊戌十二月十三日。

同二十六年十二月十七日、幕府先繼ニ據リ、北寒河江庄五ヶ郷ヲ、圓覺寺ニ知行セシム。

△。

(前)出羽國北寒河江庄吉田堀口三曹兩所略等地頭職、并門前○地事任○永仁嘉曆建長二年官府同

五年八月廿三日○○等寺家知行不可有相違之狀如件。

應永廿六年十二月十七日。

花押 足利持氏

圓覺寺。

同三十年三月十八日、將軍足利義持、職ヲ男義重ニ讓ル、十月二十三日出羽探題最上滿家卒ス、滿家ハ大江氏ノ女婿ナリ。

同三十二年二月二十七日、將軍足利義重薨ス、前將軍義持復タ政事ヲ宰ス。

同三十四年二月七日、天童城將斯波賴直卒ス、賴直ハ右京大夫道家ノ二子、兼賴ノ孫

ニシテ天童氏ノ祖ナリ。

兼賴、——直家、——滿直 (最上系圖)

正長元年正月十八日、前將軍足利義持薨ス、弟青蓮院義圓ヲ迎テ嗣トス、之ヲ義教トナス、是歲天下飢饉ナリ。

永享二年六月、是ヨリ前、鎌倉管領足利持氏、將軍足利義教ト隙アリ、陸奥ノ管領足利滿貞、持氏ニ黨セス、持氏將ニ滿貞ヲ攻撃セントス、義教奥羽諸將ニ令シ滿貞ヲ援ケシム。

同六年十一月二十一日、律師善應加賀法印筆寫スル所ノ弘法大師影像ヲ慈恩寺ニ寄進ス。

右此御影者。

大師奈良之興福寺御住之時、御自筆被遊、金剛峯寺被收候、又奉寫東寺之御影被成候、於羽州藥師寺之賢舉律師爲末代龜鑑、此本申出被寫候、勅使柳原之大納言殿筆者加賀法印奉寄進出羽慈恩常住。

永享六年甲寅十一月廿一日、

律師應善。

同九年九月十三日、慈恩寺大圓坊永尊、箕輪郷渡澤藤五郎在家内三百苜ノ田地ヲ賣却ス。

依有要用賣渡申田事。

合直錢三貫文者。

右件之田ハ藤五郎在家之内三百苜ニ、永代未來ニ三貫文賣渡申處實也、但於此田藤五郎之孫子之親類兄弟出來候て、菟角の儀申候共、此狀を先とて、御沙汰候ハニ、全其所之地頭政所のいらんさまたけあるまゝ候、仍爲後日田之賣狀如件。
賣主慈恩寺西院之住人大圓坊永尊花押。

永享九年巳年九月十三日。

同十一年二月十日、是ヨリ前、鎌倉管領足利持氏、京師ニ反キ、兵敗レテ自殺ス、十二月二十三日、大柳廣滿阿闍梨慶升八畝村三昧田五百束苜ノ地ヲ賣却ス。

依有要用賣渡申三昧田事。

合五百束苜 八畝さ〇そニ在之 者

右件之三昧田の事、永代直錢五貫文ヨ賣渡申處實也、但若於彼處親類兄弟兔角異儀候共、此狀之趣以御沙汰候ハニ、全不可有子細候、爲後日仍如件。

阿闍梨慶升花押。

大柳安藝守廣滿花押。

永享十一年己未十二月廿三日。

嘉吉元年二月十日、出羽探題最上左京大夫頼宗卒ス、男滿氏嗣ク、六月二十四日將軍足利義教赤松滿祐ニ弒セラル、男義勝嗣ク。

同二年十一月廿七日、慈恩寺中院少納言阿闍梨善能、八畝村内石間打ノ田四百苜ヲ賣却ス。

依有要用賣渡田之事。

合四百束苧、八畝村内、石間打在之者。

右件の田ハ石間打四百束かり、永代を十四貫文ニ賣渡處實也、但此内より毎年四百文の役をミやうらひき、申へく候、若此後いりある親類兄弟出來沙汰を申候て、此狀之上ニいきあるまゝ候、仍爲後日狀如件。

賣主慈恩寺中院住少納言阿闍梨善能花押。

嘉吉二年壬戌十一月廿七日。

同三年七月二十一日、將軍足利義勝薨ス、弟義政嗣ク、文安二年十月二十日、慈恩寺塔

中證誠坊某、熊野供僧膳田ヲ賣却ス。

依有要用うりわたし申田之事。

合五段〇〇在之七月十四日、熊野僧膳田者。

右件の田者永代廿五貫文よりわたし申處實也、但若親類兄弟出來菟角の異儀申候とも、彼狀先として御沙汰候のんニ、全いらんあるはく候、仍爲後日狀如件。
うり主 慈恩寺住、證誠房花押。

文安二年乙丑十月廿日。

同年十二月二十日、慈恩寺々司、究教院某、其所領ヲ注記ス、頗ル以テ當日ヲ考ルニ足ル。

寺司所領之日記、知行之處。

八畝二十五貫文之所、寔如是也。

次ニひや田、是ハ日佛供役田也、是ハ武家替之時より、相違申ニ就之のの郷ニかきり田千苧是年貢四貫文之所也。

次ニ八畝之内彌勒の田屋分、鹿島のりらそひ五百苧、本年貢一貫五百文之所、次ニ米澤ニ上葉山田五百苧、本年貢一貫五百文之所、取役者五百文、熊野之後ニ千苧、本年貢八貫之所也、散田ハ奥山在家。

次ニ十王田二百苧、役者二百文出候。

大沼越前殿、四百苧、本年貢ハ四百文。

小泉殿葉山田、五百苧、五百文、たい酒之役也、九月百五文、たいさけの役也、次りけ餅の田三百苧、餅三十味、廿文、さりて六十五文ツ、各ハ十六けんより年貢取申候。
次大屋けより、預年貢くわちち之分。

百五十文、

大沼在家。

二百文、

さねき在家。

百五十文、

きまらう在家。

百五十文、

刑部左衛門よなさわ。

二百文、

奥山さいけ。

二百文、

きむらさいけ。

二百文、

ふた口さいけ。

二百五十文、

せき口さいけ。

二百五十文、

道方さいけ。

二百文、

にちらんさいけ。

百五十文、

大夫さいけ。

文安二年^丑十二月廿日。

同四年十一月二十八日、北寒河江、小堤小見両郷地頭中條又十郎首服ヲ加ヘテ、長衡

ト稱ス。

元服。

中條又十郎殿。

長衡。

文安二年十一月廿八日。

同六年九月九日、足利永壽王、管領ニ任シ、鎌倉ニ到ル、之ヲ成氏トナス。

同六年九月九日、足利永壽王、管領ニ任シ、鎌倉ニ到ル、之ヲ成氏トナス。

同六年九月九日、足利永壽王、管領ニ任シ、鎌倉ニ到ル、之ヲ成氏トナス。

同六年九月九日、足利永壽王、管領ニ任シ、鎌倉ニ到ル、之ヲ成氏トナス。

同六年九月九日、足利永壽王、管領ニ任シ、鎌倉ニ到ル、之ヲ成氏トナス。

同六年九月九日、足利永壽王、管領ニ任シ、鎌倉ニ到ル、之ヲ成氏トナス。
享德二年六月六日、奥田道慶、箕輪郷白山田等ヲ賣却ス。

依有要用賣渡申田畠之事。

合直錢六貫五百文 者。

右件の田ハ、箕輪郷の内田郎、白山田、田屋敷白山の林共殘所なく六貫五百文ハ永代を限
て賣渡申処實正也、但この官地よわいていりある子孫親類兄弟出來候て、さたをいたし
候ともいらんさままたけ候共、此狀を先とて御沙汰候いんハ異儀あるましく候、仍爲後
日箕輪郷田郎、白山田之賣狀如件。

賣主箕輪田郎住人、奥田道慶花押。

享德二年癸酉六月六日。

是歲伊達持宗、置賜郡長井庄高玉村ニ瑞龍院ヲ創建シ、遠江國海藏寺物外惟應ヲ請テ
開山祖トナス、是レ今ノ寒河江町祐林寺等ノ本山ナリ。

同三年二月二十二日、慈恩寺琳泉坊善海等、正御影供田ノ文書ヲ紛失セルヲ證明ス、
四月十四日、阿闍梨幸調證券ニ據リ、阿闍梨善海ヲ供僧職ニ補任ス。

正御影供田文書之事ふさたは候て失申候、いりある親類兄弟子孫門徒弟分と申候て、此文書を取出したを仕わつらひあし候共、我々兄弟三人先々罷出候て、盗人のしたを申候へく候、仍爲文書無之副狀如件。

大方殿花押。

琳泉坊 善海花押。

大輔房 善證全。

中納言公順海全。

享德三年甲戌二月廿二日。

補任。

慈恩寺供僧職御影供田。

合八百束蒔上 在之者。

右人爲彼職任賣券旨阿闍梨善榮所補任者但有限於寺役者、守先例無懈怠可被勤仕者也、寺家宜承知勿違失仍補任狀如件。

阿闍梨幸調花押。

享德三年甲戌卯月十四日。

同月二十七日、鎌倉管領足利成氏、執事上杉憲忠ヲ殺ス、是ヨリ關東奧羽ト遂ニ大ニ

乱ル。

長祿元年、是ヨリ前、幕府内裏造營ノ段錢ヲ、奧羽二國ニ課シ、斯波教兼ヲシテ之ヲ徵收セシム。

兩國^(奥)へ被成 綸旨候、是又珍重候、同事書寫遣候。

内裏段錢之事、先度被 仰出候、然者太田炊助使節候、定近々先方へ可下着候、速沙汰候可目出候、恐々謹言。

六月十一日、

教兼花押。

八戸河内守殿。

同年十二月、左馬頭足利政知、管領ニ任シ、關東ニ下向ス、將ニ足利成氏ヲ討滅セントスルナリ。

同二年八月十五日、幕府相國寺有良西堂ヲ奥羽ニ遣ハシ、諸將ヲ促カシテ足利成氏ヲ討セシム、因テ有良ヲ安國寺ニ住持セシム。

八月十五日、奥州出羽甲州信州之使、西堂兩人被命也、宗真西堂者、真如寺有良西堂者、安國寺爲使節被賞兩寺入院御判被下也。隆涼軒日錄

寬正元年十月二十一日、幕府出羽探題最上左京大夫義春、天童修理太夫賴勝、大寶寺淳氏等ニ命シ、足利成氏ヲ討セシム、想フニ寒河江氏亦其中ニ在ラン、而テ文書傳ラ

ス。
成氏追討事、不日相催國人等令發向、可被抽戰功委曲貞親(伊勢氏)可申遣候也。

十月廿一日。

左京大夫殿、修理大夫殿、出羽探題伯父歟、天童殿トアリ

成氏對治事、度々雖被仰遣、未奉行之間、重被仰下候、所詮不移時日相催一族被官人等、別而抽戰功者、可被勸賞委曲尙貞親申下候也。

十月廿一日、判

大泉右京亮殿。

同二年某日、幕府關東管領足利政知ニ命シ、陸奥出羽兩國諸將ニ命シ、足利成氏ヲ討セシム。

就關東發向事、可相觸出羽陸奥兩國之軍勢等條。

成氏誅罰、未落居之

右敵及梓楯插不忠、構私曲之條、非疑貽之於進發不參之族者、一段可被經其沙汰候。

一諸軍士多勢無勢之類出陣之事。

依分限各可勵忠節之處、御成敗於難澁之仁體者、可注進交名、但可隨在処遠近子細同前也。

一關東隣國之士卒等、出陣之事、不可准遠國所、爾可遲々一條、且令存野心歟、且引組朝敵輩、太難遁避其科、所詮左右一途ニ可仰付近所之輩焉。

一官軍等、猥稱有遺恨之族、着陣之日、對敵之義、不快之賴事、互閣宿意、成和融之樣、可專忠功由、被仰出。

一諸勢雖遂參陣、不請大將之儀、任雅意之事、甲乙人等共以被停止者也、所詮云手負之淺深、云當病之輕重、可有糺明之沙汰焉。

右任條目之旨、嚴密可觸廻之忠否之次第、每度載起請文之詞、註進於戰功者、可被恩賞之趣、皆可申合軍兵等矣。

寬正二年十月日。

同五年五月、去歲大寶寺淳氏、京師ニ朝シ、此ニ到リ歸國シ馬二疋ヲ獻ス。

應仁二年七月二日、白岩城將、大江時高入道良賢北寒河江熱塩郷瀧之在家ノ田宅ヲ、國分河内ニ交付ス、河内置賜郡菽生郷ニ居館ス、伊達氏ノ屬將ナリ、出羽風土略記ニ、白岩郷宮内村等ハ熱塩郷ト稱シ、一ヲ記ス是ナリ。

出羽國北寒河江あつたは郷之内瀧之在家年貢五貫文並ニ二貫五百文之在家一字渡進之処實正也仍如後日之狀如件。

應仁二年七月二日、

良賢花押。

國分河内守殿。

文明元年正月八日、將軍足利義政、男義尚ヲ嗣トナス。

同三年三月十三日、慈恩寺塔中寶藏院住僧宥日法印示寂ス、宥日ハ置賜郡長井庄五十川郷ノ人ナリ、頗ル法力ヲ有シ、奇行多ク傳フト云フ。

宥日法印

師者、當國米澤庄下長井郷五十川村之産也、應永三丙子年四月二日誕生、母者村上新兵衛下女ナリ、彼女常無夫愁、一子祈天、或時無夢幻、夕日見入腹内、懷妊出生、後新兵衛撫育、童名號松壽丸、同郷於宮驛遍照寺得度、(中略)文明三年三月十三日、示寂。

同五年十二月十九日、足利義尚征夷大將軍ニ任ス、同月二十日、慈恩寺塔中竹内坊八畝村内ノ土田ヲ宮内卿某ニ賣却シ、德政アリト雖凡敢テ異議セサランコトヲ約ス、宮内卿蓋シ慈恩寺ノ役僧ナリ、當時僧徒私カニ官名ヲ濫用シタルナリ、又德政ノ事、寒河

江地方ニ見ユルモノ之ヲ最初トナス。

依有要用賣渡申田之事。

合本錢十貫文者。

右件之田ハ、八畝之内りよつくり三百束蒔、限永代十貫文ニ賣申處實正也、但於寺役者、四八雪之三昧田也、壹月よ五夜つゝ、可被勤仕者也、たとひ新とくせる御法入申候供、無餘儀可有御成敗、又者、えん類兄弟縁者出來、異乱申候共、爲先此狀御沙汰可有候、仍爲後日狀、如件。

賣主竹内坊。

買主宮内卿。

文明五年己十二月廿日。

德政トハ、天災地變等ノ不幸アリシ時、租調ノ未納、朝廷ノ貸稅ナドヲ免シ、民ヲ惠ム仁政ナリシカ、足利義政奢侈ニ耽リ、用度足ラザリシヨリ、財ヲ富豪ニ借り、之ヲ辨償スルコト能ハサリシヨリ、令ヲ下シ、公私ノ負債ヲ辨償スルノコトヲ免除セシメ、之ヲ德政ト云フ、是ヨリ賣買貸借ノ證券信用スルコト能ハザルヲ致シタリ、故ニ本證券ニタトヒ新トクセ井御法入候共云々ト書シテ、德政ノ令出ルモ、此證券ハ無効タラサル旨ヲ記入シタルナリ。

同六年三月十二日、慈恩寺別當幸海、醍醐村藤崎ノ土田ヲ阿闍梨賢心ニ賣却ス。

(二行切レル)

合千束苧、ニ藤崎在之者。

右件ノ田ハ、永代を限候て、直錢廿九貫文ニ賣且たノ申處實正也、但御德政ありくたり永代後ほく、又ハいりやうなる約束たりといふ共、入まきと云御法候とも、此田ニ限てわつらいあるましく候、此上いりある御徒弟分、新類兄弟出來候て、つらいをあく候とも、此狀を先として御沙汰候とん、異儀いらんあるましく候、仍爲後日之田之賣狀、如件。賣主 慈恩寺別當幸海花押。

文明六年甲午三月十三日。

同年二十一日、最上右京大夫義春卒ス、男義秋嗣ク。

同七年五月六日、慈恩寺別當阿闍梨幸海、阿闍梨賢心ヲ慈恩寺供僧職ニ補任ス。

補任

慈恩寺供僧職田地之事。

合千束苧 西々在之 者

右以人爲彼職任賣買之旨、阿闍梨賢心、令補任所實也、但有限於寺役者、守先例、無懈怠、可令

勤仕者也、寺家宜承知勿違失、仍補任狀如件。

阿闍梨幸海花押。

文明七年乙未五月六日。

同十一年十月、伊達成宗、其將桑折播磨守ト來リ、寒河江ヲ襲フ、寒河江知廣左澤攝津溝延備前等之ヲ迎撃ス、降雪ニ會ス、成宗軍ヲ收ム、(松藏寺記録)十一月廿二日、將軍足利義尙判始ノ式ヲ舉ケ、出羽國へノ下文ヲ裁ス。

下 出羽國。

仰三箇條。

神事。

右神之爲神、以人之祭祀、人之爲人、以神亡加被、因慈守式目專如在之禮費限、永代爲不朽之勤行焉農桑事。

右國者、以民爲基、民者以農爲大、各勵之溝堰堤池、勉宜致稻穀紬絹之備矣。乃貢事。

右諸國之濟物、任土之貢賦、早守每年之所當可致、合期之進納焉。以前三箇條所仰如件。

文明十一年十一月廿二日

同十二年三月十五日、伊達成宗ノ將、桑折播磨來リ寒河江ヲ襲フ、我兵八畝村ニ迎撃ス、播磨敗死ス、(松藏寺 記録)

同年十二月二十六日、最上右京大夫義秋卒ス、男滿氏嗣ク、實ハ中野滿基ノ男ナリ。

同十四年十一月二十七日、幕府越後守護上杉房定ノ請ヒヲ允シ、足利成氏ノ罪ヲ宥シ、足利政知ト和セシム。

同某年、北寒河江庄、兩所村ニ前安藝守平家盛ナルモノ居住ス、家盛蓋シ中條氏ノ族ナリ。

文明年中、前安藝守平朝臣家盛者住之、今神庫舊籍有氏名、(兩所大權現緣起)

按、安藝守家盛蓋シ中條氏カ、慈眼寺文書中條氏姓藤原ト見ユ、然ル古來姓氏ノ事誤リ多シ。

長享元年三月五日、寒河江庄白岩郷、洞興寺中欄鑑心禪師示寂ス、洞興寺現存シ、末寺九箇寺ヲ有ス。

羽州洞興寺、牛欄鑑心禪師、奥州藤氏子、初編參名宿、次入關雲隱和尚之室、隱器之、至使分坐

尋還本郷、隱于關山深處、羽劔最上郡主某氏、仰慕師德、於白岩郷、創洞興寺、請爲始祖、漸成法社、長享元年丁未三月五日、說偈曰、生々滅々々、滅々生々々、蹈翻華藏海、浪平月亦清、委順而化。

延德元年十一月二十日、宮内卿阿闍梨、慈恩寺供僧職ニ補任ス。

補任、慈恩寺供僧職坊地事。

合半宇 西院在之 田澤坊 半 者。

右以人爲被職任賣買之旨、宮内卿阿闍梨所補任實也、但於在限寺役者、守先例、無懈怠可令勤仕也、寺家宜勿承知違失、仍補任狀如件。

權律師幸海花押。

延德元年己酉極月廿日。

同月二十七日、美濃松丸慈恩寺供僧職ニ補任ス。

補任。

慈恩寺供僧職坊地之事。

合壹宇 中院在之 者。

右以人爲被職任賣買旨、美濃松丸令補任實也、但有限於寺役者、守先例、無懈怠可被勤仕者也、寺家宜承知勿違失、仍爲後日補任狀如件。

別當所犬房丸。

延徳元年辛巳十二月廿七日。

同二年正月七日、前將軍足利義政薨ス、猶子義植嗣ク、同月二十日、大江眞木廣主父子田郎半在家田畠證狀ヲ調記ス。

田郎之半在家之内にわき候て、田畠少よても候へ於自今以後奥田ニ忍ぶると申候とも、山きく三郎左衛門よりせ申事有ましく候、此上ニ菟角申候ハ、我々親子迄て其沙汰をいたし可申候、自然若此外ニ何事申出候共、此免狀を先とて其時の地頭政所の御前よて、子細あるましく候、依爲後日狀如件。

大江眞子遠江守廣主花押。

同 大輔元主全。

延徳二年壬午正月廿日。

明應三年七月十四日、最上右京大夫滿氏卒ス、男義淳嗣ク、同月二十八日、寒河江城主大江爲廣卒ス、高岳棟公ト法諡ス、男知廣嗣ク、爲廣ノ先キ時氏元時元高三氏アリ、而テ其事履ハ僅ニ系圖ノ存スルアルノミ、其詳今得テ考ルコト能サルナリ。

同五年十一月十七日、八鍬村住人、越前國介八鍬村田端五百束苧ノ地ヲ慈恩寺塔中、法林坊ニ賣却ス。

うり渡申七月十四日田の事。

合本置錢六貫文者。

右件の田之坪ハ、川のたた五百束苧を丙辰のどよりゑいたひを賣渡申處也、もくやよまそぬも出來候てきたを申候とも、此狀をもつてまつたくふさた申ましく候、仍爲後日賣狀如件。

賣主八鍬村住人越前國介花押。

兵庫全。

明應五年丙辰十一月十七日。

同六年九月晦日、古河公方足利成氏卒ス、男政氏嗣ク、同八年五月三日、大江爲廣ノ妻、某氏寺領ヲ澄江院ニ寄進ス、澄江院ハ現今ノ澄江寺ナリ。

ちうかういんきまんくやう。

ひかくよめるた二せん五百かり、たなくやちよ五百り、きのさ二せん三百かり、たりせ二せんかり、又たりち一く二ん五百文につたよとり二けせんゑいのちやたうふん、ねんく十七く二ん、かれごころちうかういんへまいらせ候、かうかくのまそん二たいて、いらん申候の、こんまやうこくやうくちたしかるへく候。

めいたふ八鉢んひつちのとの五月三日。

せんゑいきた。

永正元年正月二十六日、寒河江城主大江知廣卒ス、男孝廣嗣ク、同年六月十二日、最上右京大夫義淳卒ス、男義定嗣ク、是歳慈恩寺兵火ニ罹リ、殿宇悉ク灰燼ス、而テ其兵乱ノ事實、今傳ハラス。

永正元年甲子、郡中兵乱、一山殿堂佛閣皆悉焼亡、獨本堂慈氏尊經災不亡。

同二年六月二十五日、是ヨリ前、大寶寺出羽守、將軍足利義澄ノ偏諱ヲ請ヒ、澄氏ト稱ス、因テ大刀一腰馬二疋驚眼二疋ヲ献ス。

同五年、化ヲ募テ慈恩寺ヲ營建ス、而テ舊觀ニ復スルヲ能ハス。

勸進沙門。

請特蒙十方檀那之奉加、致金堂之造營、重安置彌勒菩薩不動明王降三世尊如往古奉供養之狀。

爰曰、佛日現瑞、光照西天之境、法水湛器、流潤東土、國自爾以來、上自王宮、下至万民、莫不歸依、佛陀建立堂社矣、爰ニ羽州村山郡寒河江庄慈恩寺、忝聖武天皇之御宇、婆羅門僧正請綸命、而草創開基之靈跡也、夫後青山峨々、勸請之諸神、耀威光於法界前、大河深々、臨降之龍泉、潤鴻澤於國家、然ト伽藍於彼峯、安善逝於此場、或建九院之蘭若、祈十善之寶祚、或仰一乘之教法、殉二世之恣地、允是佛法相應之靈地、猶亦万人歸依之勝所也矣、次本尊者、當來導師彌勒薩埵也、恭聞常恒、雖居都肆之内院、施惠於十方世界、臻益於三會之時、曉貴哉、來世之引攝、馮哉、昏衢之指南也、次鎮守者、佛法擁護、白山權現、娑婆示現、金剛變異、守和光同塵約、乘隨緣、利生誓、垂八相結緣之跡、播五濁應度之願、神變奇異、而効驗揭焉也、觀夫老松古杉之風、音鎮、拂不信之雲、古木舊苔之露色、浴澄渴仰之月、利生之方便、大悲應用也矣、厥后經三百余歲、鳥羽院御宇、願西上人蒙勅命、猶爲御願寺、金堂左右、建常行堂、並釋迦堂、奉納一切經七千余卷、自爾以降、每年不退、經會者、此時權與也、且上人送一代之星霜、畢復後白川院御宇、本願弘俊阿闍梨、請綸旨、新再興之、忝三代明君之勅願、一朝無雙之勝地也、自其從來、佛閣並葺、巍々坊舍、交軒蕩々、顯密二教之學徒、比肩聯々、真俗二諦之神祥、任心續々、即是行學不退之砌、

人法繁榮之所也、然而近年依國中乱逆、不圖遘回祿之災、無端成灰燼之變、道俗咽燒熱之烟、上下致斷腸之歎、不可不悲、不可不哀、唯是末世之風儀、濁乱之所以乎、仍以滿山諸衆之僉議、致大堂造立之巨營、老若竭力、運材木、衆徒懷喜、荷土石、面々抽再興之懇志、各々祈造功之成就、然迺令唱小僧於方隅、欲乞奉加於貴賤、嗚呼生無明之長夜、誰人不欣慈尊之出世、稟有爲之幼身、何輩不怡蓮臺之託生、資福喜受樂之家、不惜千金、貧賤困苦之門、毋嫌一錢、悅哉露滴而湛海、塵積而成山、只同心戮力、所致也、添芳志、濟希願、酬此修善、國中諸士、弛弓納袋、宇宙農民、擊鼓忘力、現世伴福榮、於松柏之陰、當來開覺業、於花臺之上、乃至餘香遍一天、法燈耀八紘、奉加之旨趣、大概以如斯。

沙門敬白。

永正五年齊雅成林鐘上旬之候。

慈恩寺緣記云、永正五年戊辰、募化十方、雖營建之未復、美于舊觀云々。

同六年八月十一日、是ヨリ前、越後ノ守護、上杉定實養父房能ト戰ヒ、遂ニ之ヲ殺ス、關東管領土杉顯定ハ房能ノ兄ナリ、兵ヲ舉テ來リ攻ム、定實敗走シ、援ヲ伊達尙宗ニ請フ、尙宗乃チ將ニ出援セントシ、大江孝廣ニ檄シ、共ニ俱ニ赴援セントヲ求ム。

(前略)當國興、荻袋殿九拾人、小松殿百人、高畑殿粟野殿百貳拾人、宮澤殿寒河江殿大立目殿宮村殿鮎貝殿佐野殿長井殿桑山殿丹色根殿大塚殿上郡山殿各百ケ貳百五拾迄之武頭ニ而出張可有之旨、御下知ニ候條、各儀も右之考量ニ而出勢可有之候、仍催促之廻文、如件。

永正六年八月十一日、辰之刻國分平五郎。

胤重。

高玉太郎殿。以下十三名省略

同十一年二月十日、最上義定伊達種宗ト長谷堂ニ戰フ、左澤城主兵部少輔吉川政周、義定ヲ援ケ戰ヒテ之ニ死ス、然ル其戰爭理由ハ未タ之ヲ詳ニセス。

政周、八郎五郎、號吉川兵部少輔。

永正十一年甲戌二月十日、長谷堂ニテ討死、義定御入部遲引之故也、同日館岡長瀨山邊形部以下千餘人討死、彼城ニハ植宗ノ代官、小築川大輔籠ル、其翌年有和與、從伊達義定御臺有御越。

同十四年、大江孝廣、熊野參詣ト稱シテ、上洛ス、往返九ソ一百二十五日、當時東北諸侯ノ京師ニ朝スルモノ、大抵熊野參詣ト稱スト云フ。

同十七年二月二日、最上修理大夫義定卒ス、從弟義守嗣ク、六月二十一日、伊達植宗會津ノ守護葦名盛滋ト軍ヲ合シ、最上義守ヲ攻撃ス。

六月二十一日、爲合力於伊達氏此時伊達與最上斯波氏戰、會津四家合考附錄
夏四月、公自師、兵伐羽劔上山義房、攻入其城、或斬殺、或退散、遂以拔之、緣義房逆心顯形也、九日、公徙馬於山形、廿七日、進陣于天童及高掄、晦日於天童城邊一戰、得首百餘級、云々、伊達世次考

大永元年六月十一日、東小房丸寒河江庄柴橋村五百菀ヲ澄江寺ニ寄進ス、寒河江孝廣之ヲ證ス。

四郎孝廣花押。

こふうのちやとうふんニ、くははしのうちニ五百そくりマ、これをまつ世よわいて進候、御ほたひを御縁んころにとひ候てかんいふよ候。

永正十八年かのとの六月十一日

ひら
わほふ丸

ちうかうへ
きん

同七月十七日、伊達植宗來リ攻メ、八幡原ニ陣ス、寒河江孝廣、諸族ヲ糾合シテ出テ之ニ對ス八月十二日植宗引テ還ル。

永正十八七十、卯刻、伊達植宗葛西相馬岩城會澤宮城國分最上中引卒シテ、從高瀬山八幡原迄張陣、彼山之峠、植宗陣、雖然寒河江一類相談候間、八月十二日陣引也、大江系圖

同年十二月二十五日、足利義晴將軍ニ任ス。

同二年十月九日、大寶寺晴氏出羽守ニ任ス、是歲伊達氏最上氏ト戰フ、勝敗ノ事今之ヲ詳ニセス。

同二年壬申、伊達與最上合戰、四家合考附錄

同四年十月某日、寒河江澄江寺、住持職、淵室象外其寫像ニ題記シ、以テ栖湖育公ノ請ニ應ス。

栖湖育公、越之前劔之産也、姓江氏、幼而長之瑞雲峰入大寧之室、矣、曩祖石屋九華的孫、天再老爲師、落髮進具矣、請益已歷寒暑多歲焉、竊觀夙因而勵厥志、苦學刺股、晨昏罔措、明心宗玄旨、委悉參微、而如兩鏡相照、師證曰、汝吾宗器也、比年省山僧舊交、盟掛而弗戶錫、針芥相投、深願先生壺奧、懇窺洞上極位焉、殊者當間、舉揚紫雲函蓋、元五百則舊因緣公案得徹因焉、是非

正接踵者、因懷之莫許寄哉、果前因後、自然熟而可也、仍爲嗣法、模寫予幻質、以酬法恩者也、一日命而愚昧老拙、需贊不獲、辭自許曰、降伏魔外、罵呵佛祖、龜行老愚、非賓非主、嗔胡鬚赤也、赤胡鬚。

茲于大永稱發應鐘上湖日 朱印全

前永平澄江淵象外叟栖幻子書焉 存育外記。

同五年十月二日、大江孝廣寺領ヲ澄江寺ニ寄附ス。

あんどつのちやとうふんよ、いるまのうちたりとりもきりまへよ五百かり、これを進し候、御心得候へく候。

大永五年きのとの十月二日、四郎

孝廣花押。

澄江寺。

參

同六年某月、本導寺尊永上人、湯殿山行人浴水法、并ニ上火鑽火ノ作法ヲ書記ス。

一湯殿行人之水を浴ひ申作法と、上火鑽火燒キ付申作法之切紙を、本道寺九代以前之先師、

尊永と申沙門大永六年ニ書申たる物御坐候。寛文六答申書

同七年二月朔日、寒河江城主大江四郎孝廣卒ス、弟種廣嗣ク。

天文元年十月、寒河江城主大江太郎四郎廣種、三社託宣ヲ手書シ、紺紙金泥ヲ使用ス、

其書頗ル觀ルヘシ、尾ニ題シテ、享祿五年壬辰霜月日羽州村山郡寒河江太郎四郎廣種

ト云フ。

同四年十月八日、古河公方足利高基卒ス、男晴氏嗣ク。

同年十二月某日、北寒河江庄谷地城主、中條又四郎首服ヲ加ヘ長昌ト稱ス。

元服

中條又四郎殿。

長昌

天文四年乙未十二月吉日。

同九年十一月、是ヨリ前伊達植宗男晴宗ト相悪シ、兵ヲ以テ相攻戰ス、最上義守植宗ヲ援ケ、置賜郡長井庄ニ入ル。

同十五年十二月二十四日、寒河江城主大江種廣卒ス、年四十六、福泉寺殿陽嚴春公ト法諡ス、男兼廣嗣ク。

同十六年二月十四日、足利義藤將軍ニ任ス、後ニ義輝ト改ム、四月某日、大江兼廣寒河江庄大谷村浮島社ニ諸役免除ノ證判ヲ給ス。

右此度明神爲祈念、工事工役之儀○申、此未有間敷間判形相渡候、仍爲後日之狀如件。

天文十六年卯月吉日、

大江兼廣花押。

弘治二年十二月某日、古河公方足利義氏關宿城ニ移ル、義氏ハ晴氏ノ子ナリ。

永祿三年三月某日、最上義守來リ寒河江ヲ攻ム、大江兼廣擊テ之ヲ退ク。

同四年六月二十六日、是ヨリ前、最上義守馬ヲ足利義輝ニ獻セントス、義輝仍チ上杉政虎ニ内書シ、道途ノ便ヲ與ヘシム、政虎ハ謙信ナリ。

出羽最上山形孫三郎ヲたより、早道馬可差上之由、言上之間、分國中無異儀様、馳走可頼入候、於様体者、從關白殿可有御演說候、猶晴光可申候也。

六月廿六日

花押義輝。

上杉彈正少弼殿。

同八年五月十九日、三好義繼、松永久秀等將軍足利義輝ヲ弑ス、弟義昭嗣ク。

同年八月十五日、最上義光東五百川新宿鳥屋ケ森城將岸美作守義滿、八沼城將原美濃

守ヲ攻殺ス、義滿ノ男、某山野邊ニ遁レ僧トナリ、西岸寺ヲ創ス、初メ義滿女アリ、和合城將和合但馬守秋廣、八沼城將原美濃守ト並ニ婚ヲ義滿ニ求ム、義滿之ヲ美濃ニ許ス、但馬怒リ其婚期ヲ伺ヒ、之ヲ助卷ノ渡ニ邀撃シテ、勝タス、走リテ義光ニ降ル。義光因テ兵ヲ舉ケテ八沼城ヲ攻陷シ、進テ鳥屋ケ森城ヲ攻ム、義滿遂ニ戰死ス、之ヲ福昌寺ニ葬ル、此役秋廣亦戰没スト云フ。

本願寺寺花押(真如)。

其方父岸美作守殿、就落城、重而軍功之思無之、剝欲浴大谷之流、尤殊勝覺候、一字草創之刻、須宜稱西岸寺者也。

慶安五歲_辰壬八月卅日、

願主釋道真。

岸美作守ノ戰死ハ、永祿八年乙丑八月十五日ニシテ、氏ノ位牌及石碑ハ現福昌寺ニアリ、戒名光輪院殿天香玉桂大居士、岸美作守源義滿トアリ。

按、

釋道真ヲ以テ岸義滿ノ子トナス、恐クハ是非ス、今古書ノ考證スヘキナシ、姑ク傳説ニ從フ。

同十一年十月十八日、足利義昭將軍ニ任ス、織田信長之ヲ補翼ス。

同十二年六月朔日、將軍足利義昭二條第二移リ、大館晴助ヲ遣ハシテ、邸第造營ノ資ヲ出羽ノ諸侯ニ徵求ス。

今度逆徒等早速有御退治、委屬御本意候、然者此節至諸國、御殿料被仰付候、被成御内書、爲御使差下晴助候條、御馳走尤可然候、次一廉之御馬、御所望之旨、得其意可申入由、被仰出候、恐々謹言。

六月朔日、

惟政(和田伊賀守)

伊達殿、

人々御中、

同年某月湯殿山一世行人、入定圖成ル、其圖今燒失シテ傳ハラス。

一一世之行人入定之圖を見申候得者、眞言乘之八代高祖を書立て候、其圖を書立候年代者、

永祿拾貳年與御坐候、寛文六年答申書。

元龜元年正月、是ヨリ前、最上義守少子義時ヲ鐘愛ス、因テ嫡子義光ト隙アリ、義光願文ヲ立石寺ニ入レ、義時ヲ除キ、其素懷ヲ達センコトヲ祈ル。

謹言上。

義光於本懷者、立石寺於一山中地宗住居之儀不可有之候、其上諸篇威徳院殊我々以談合

可相調之旨、不可有相違候、依如件。

義光花押。

立石寺。

永祿十三_{庚午}年正月吉日。

同三年六月十日、慈恩寺塔中寶城坊某、坊地ヲ寶林坊某ニ賣却ス。

依有要用賣渡申坊地之事。

合而三分二_{三分二之内半分東二付而遣申候}

右件之坊地之事、田澤之内ニ、流芳院秀圓坊地三分二半分東ニ付而、永代未來四百廿五文賣渡申事實正也、其上於院役已酉丑歲舞童守先例無懈怠可令勤仕者也、又ハ世間徳政申入候共、異儀違乱申間敷候、総別何事成とも、造作之儀、全此坊地ニ有間敷候、仍而爲後日之狀如件。

賣主

禪林坊之兄弟寶城坊。

買主

寶林坊之息己之坊。

元龜參年_{壬申}六月十日。

天正元年四月九日、慈恩寺別當坊幸曉、寶林坊某ヲ西院職ニ補任ス。

補任、慈恩寺西院田澤之内。

合而三分一。

右以人為彼職任賣狀之旨寶林坊之第一位公補任之處實也、但有限於寺役守先例無懈怠可令勤仕者也、仍而寺家宜共勿為承知違失仍而補任之趣如件。

元龜四年癸酉四月九日。

別當房幸曉花押。

同年七月十九日、是ヨリ前、將軍足利義昭、織田信長ト相惡シ、兵ヲ舉テ相攻ム、是ニ至リ義昭質子ヲ送り、信長ト和シ、河内若江ニ入ル、尊氏幕府ヲ開キシヨリ、十五代二百三十八年ニシテ兵馬ノ權ヲ喪失スト云フ。

同二年四月二十四日、是ヨリ前中野義時、兄最上義光ト相鬪ク、會津ノ城主葦名盛氏、書ヲ米澤城主伊達輝宗ニ送り、最上ノ内難ヲ鎮定センコトヲ勸ム。

急度為飛脚令啓之候、去頃申入候之處ニ、御當口堅固之由承候、誠以簡要之至候、其後珍布儀無之哉、無御心元候、最上口靜之由、及承是以專用心易存候、乍此上御兵談を以早々御靜謐可為肝要候、存分遠内(遠藤内匠)申越候、恐々謹言。

四月廿四日

止々齋花押。

米澤江。

同年五月四日、中野義時兄最上義光ト江股村ニ戦ヒ、義光ノ兵二十四人ヲ倒シ、之ヲ伊達輝宗ニ報ス。

五日、天きくもる、らいなり候、中野より到來昨日四日若木へ自由山形てきれ、助左衛門山形へひき候らへ、外城やふれ候との事、又中よりハ江股と申候所まで、りつせん候て、廿四人山かたし、越度候との事。

同年同月七日、伊達輝宗將ニ中野義時ヲ援テ、最上義光ト戦ントシ、出テ新宿ニ陣ス、書ヲ中野義時寒河江兼光以下諸將ニ送り、戦期ヲ約ス。

七日、天き上々、新宿へ出馬、くらく候てつき候。

八日、天き上々、(中略)中野天さう高橋くらすさりへ左澤白岩本間さまの助てんさう衆くさかりまやうけん、此りたへ狀指越候。

同年六月九日、伊達輝宗築澤壘ヲ襲撃シ、收メテ米澤ニ歸ル。

八日、天き上々、やち澤へえたらき、その日あらとへりへり候。

九日、天きよく、東風ふく、八頃より少つゝ雨ふる、米澤へりへり候、宮にてまたゝめふろへ入。

同年八月二十五日、伊達輝宗復々中野義時ヲ援テ、最上義光ト戦ハントシ、新宿ニ陣シ、書ヲ送リテ之ヲ報ス。

廿五日、天き上々、新宿へ出馬。

廿六日、天き上々、ひるよりりたち、八頃まで小中新地より御参り候、中野たりたまてんと、うくらまへ狀り、せ候、就出馬。

同年同月十六日、大寶寺義氏書ヲ左澤城將日野左京ニ答書シ、寒河江兼廣、伊達輝宗等ト共ニ、最上義光ニ對抗セシム。

頃日自其元節々音問附而、每度之書面、快悅候、仍先日ハ其口忿劇、始末之様、可有如何之旨申届之處、連々山形手刷候様、大切之由存知舊候間、知與等之儀、一向罷成間敷候、當坐他家之間さへ、度々覺の事共候條、定而可爲其分別、由令識察候、伊達口之事、不及申候、天童筋、寒河江白岩、其外近邊無斷申繼弓矢、永々相支擬肝心候、内々自是可及手合候得共、少く存意候事故、使才覺之旨候間、延引候、尙巨細任口話不具候、謹言。

八月十六日、

義氏(大寶寺)

日野左京亮殿。

同年九月十日、伊達輝宗最上義光ト媾和ス。

十日、天き上々、たいめん、山形より谷柏、こあたよりハ孫兵衛。

十一日、明日入馬ニさたまる。

同五年五月四日、最上義光天童城ヲ攻陥ス、天童頼澄遁レテ宮城郡ニ走り、國分盛氏ニ依ル、後チ伊達政宗ニ任フ、其家猶ホ存スト云フ、義光尋テ東根藏増諸城ヲ攻陥ス。

同年七月十五日、谷地城將、白鳥長久(異本義國)檣清光ヲ遣ハシ、馬ヲ織田信長ニ贈ル、信長之二謝答シ、且ツ佳鷹ヲ贈ランコトヲ求ム、長久蓋シ大江氏ノ庶族ニシテ、白鳥村ヲ領有シ、後チ起リテ谷地城將中條長昌ヲ攻滅シ、遂ニ傍近ヲ略有セルモノ、然ル其世系事歴ノ如キハ、起録絶無、其詳今得テ之ヲ記スヘカラス。

馬壹疋、白雲雀牽上候、相尋候時分悦喜不斜候、殊逸物候間、別而可秘藏候、仍段子三十局、縮羅三十端、紅五十斤、虎皮三枚、豹皮二枚、醒々皮二赤白相送之候、次鷹之事、鶴取鴻取所持之段、其間候、鷹共所望候、上着候者、可悦入候、猶使者可申理候也。

七月十五日、

朱印(信長)

同九年七月二十日、大寶寺義氏、馬鷹ヲ織田信長ニ獻ス。

天正九年七月廿日、出羽大寶寺より、爲御音信御鷹并御馬進上、翌日御返禮、御小袖卷物等被遣候也。(太田和泉守日記)

同十年三月二十二日、最上義光鮭延愛綱等ヲシテ、大寶寺義氏ヲ攻撃セシム、愛綱援ヲ義光ニ請フ、義光乃チ庭月廣綱ヲシテ之ヲ援ケシム、既ニシテ義氏ノ將前森藏人叛キテ義光ニ屬ス。

庄中へ鮭延典膳さく越候處ニ、手まへ無人數のよく申候間、其方之事者彼仁さく添、何分よもよき様ニ談合被申候、ていけんにまりせられ本意のとりあ、此節可極候、吉事重而恐々謹言。

三月廿二日、

義光。

庭月和泉守殿。

天正十年ノ時、義氏繁昌士民陣勞、前森無本、(無本ハ謀反ノ通字ナリ)

同年六月二日、織田信長、其將明智光秀ニ弑セラル。

同年十一月二十五日、是ヨリ前、最上義光既ニ河東ノ地ヲ略有シ、(最上川東ナリ)專ラ大寶寺義氏ヲ攻滅センヲ謀ル、時ニ白岩四郎八郎義氏ト姻セリ、因テ供ニ力ヲ協セテ義光ニ抗ス、義光乃チ白岩ヲ攻撃ス、會々秋田愛季書ヲ義光ニ送り、義氏ヲ挾攻センヲ求ム、義光答書シ、以テ明春ヲ俟シム、八郎四郎ナル者ハ、盖シ大江堯基ナラン歟。

如輪什之未令啓書候處ニ、急度之御到來、祝着之至候、隨而意般鮭延へ從庄中致乱入候條、彼口爲引立之動、騎之支度候キ、然處ニ白岩八郎四郎、大寶寺方へ以縁約之首尾、企別心候條、爲退治、向彼地、令發向、先々屬本意之形候、到春中者、清水鮭延以相談、庄中可押詰候、雖無申訖候、於其時者、爲引汲三庄境目へ可被責入、事肝要候、毎事砂越入道方へ及細書候條、不能腐毫候、恐々謹言。

霜月廿五日、

源義光花押。

謹上 下國殿。

如御禮未申通候處ニ、被及注進大慶之至候、仍當郡中、正印靜謐之分ニ候、御用所候者、涯分馳走可被申候、依之、白岩庄内縁邊之筋目、以横馬相立候、先々爲退治之被逮出向、彼口過半本意之体ニ候、爰元於春中、清水鮭延令相談、庄内へ動可有之兵談、無餘儀候、隨而大寶寺唯今於其口も、疎遠之由、被相斷候、當方致引汲可被遂遣、恨事肝要候、委曲之段、砂越入道可有

御才覺候條、不能一二候、恐々謹言。

十一月廿五日、

氏家守棟花押。

謹上 下國殿。御報

同十一年三月六日、大寶寺義氏、叛將前森藏人等ニ迫ラレ自殺ス、大江堯元出援ク、及
バス、其弟丸岡兵庫頭義興ヲシテ、義氏ノ後ヲ嗣キ、庄内ヲ領知セシム。

大浦一城四方ヨリ發火、急ニ燒却、則、義氏切腹、次ニ丸岡兵後守義興國守三年。

同十一年四月一日、最上義光、古口城將秋穗飛彈ニ答書シ、庄内ノ平定ヲ賀シ、越後軍
乱入ノ日必ス將ニ赴援セントスルコトヲ報ス。

其以往者、其元之様子無其聽之間、内々無心元候處、態與音問、大悅之至候、仍而今度其方以
取成大寶寺所持之刀、前藏前森藏人を以被爲相登、誠以外聞之覺、我々本望不過之候、隨而連々
如申候、無意趣、大寶寺向當方相求等閑候紛々、前藏以計策就切腹者、累年之散遺恨候、如此
之上者、向後互ニ可致懇切之旨、令逼塞候、就中庄内之儀も、出羽之國中ニ候條、万一自越後
筋、奥口へ乱入候共、其節者我々自身着申可及其防之條、心易可被存候也、前藏へ傳達頼入
候、依之自今以後之儀、當方へ取寄無別心懇切被申、永庄内ニ風波不立様ニ評議可然候、隨
分自爰許可致介法候、此段其方宜取成任入迄ニ候、事々彼使行申述候、恐々謹言。

追啓如何様、自是態々可及音信候間、早々申越候。

卯月一日、

義光花押。

古口殿。

同四月五日、大江堯元、天台弘法兩大師像幅ヲ慈恩寺彌勒堂ニ寄進ス、其幅現在ス。

天台大師。

右此表楷者、大檀那大江之堯元、彌勒尊令達詢望、奉掛斗帳、師門之眞濟、以戈徹令表楷云々、抑大師得名者、周易曰、大師二字、勝軍、讀以迥武運長久當天所也、故繁檀門、榮師門事、證據多端也而已、仍如件。

天正十一年癸未四月五日。

弘法大師。

右此表楷者、大檀那大江之堯元、彌勒尊令達詢望、奉掛斗帳、師門之眞濟、以戈徹令表楷、抑大師二字、勝軍、讀以迥武運長久當天所也、故繁檀門、榮師門事、證據多端也、仍如件。

天正十一年癸未四月五日。

同年六月二十一日、是ヨリ前キ、庄内ノ乱逆アルヤ、大江堯高出テ之ヲ援ク。會々大寶寺義氏戰没ス、堯元即チ軍ヲ收テ退ク、其歸ルヤ、其戰利品三千佛像三幅ヲ慈恩寺彌

勒堂ニ寄進ス、像ハ僧惠心ノ所畫ナリ、現ニ堂中ニ存ス。

三千佛今一幅ノ背記ヲ録ス

右此本尊者、自庄中乱物、大檀那大江之堯元令詢望、彌勒尊奉寄進云々、仍如件。唯我性々、釋迦獨尊、无方域、天上天下教主、薩埵常樂。

天正十一年癸未六月廿一日。

同十二年六月七日、谷地城主白鳥十郎長久、山形城ニ誘殺セラル、白鳥氏亡フ、今略系ヲ左ニ録ス、然凡他ニ據ルヘキノ書ナシ、其是非未タ之ヲ判スル能ハス。

賴重、康正頃政義、賴廣、享祿頃義春、大永頃義久、大文頃長久。

羽柴宗古曰、谷地の領主、城鳥十郎、寒河江領主、寒河江四郎隆基、柴橋村の領主、羽柴勘十郎、白岩の館主、大江備前守、左澤館主、左澤政周、萩ノ袋の館主、萩袋冬政、高屋の館主、高屋六郎元詮、是等ハ寒河江廣元の支別也ト云。

同年同月二十八日、大江堯元最上義光ト中野原ニ戦ヒ、軍敗レ走リテ貫見村ノ民家ニ入り自殺ス、小楯山ニ葬ル、從者十有餘人皆之ニ殉ス、大江氏滅ス、其將柴橋城將、羽柴賴綱、亦戦死ス、是ヨリ義光全ク河西ノ地ヲ畧有スト云フ、文久二年、林長孺(梁鶴)ノ

柴橋ニ郡宰タリシヤ、屬吏佐藤某ニ命シ、里人ニ諭シテ、其墳墓ヲ掃ハシムト云フ、墳

墓現存ス、義光寒河江外記光俊ヲシテ、寒河江ヲ守ラシム、光俊ハ大江氏ノ庶族ナリ。

寒河江、大江四郎隆基。

天正十二甲申年六月廿八日、爲義光落城、貫見村百姓彦二郎宅ニテ自殺。

柴橋、羽柴勘十郎。

寒河江隆基旗下、最上ノ先手足輕浦野源右衛門ニ鐵砲ニテ打レ死ス。

文久二年戊七月、縣令林伊太郎手附佐藤駒之助ニオホセテ、貫見村ナル舊記ヲシラヘカッ墳墓見分有リテ、修理オロソカニスヘカラスト嚴シク、里人ニ命セラレタル事アリ。

同十三年七月十一日、羽柴秀吉關白ニ拜セラレ、豊臣姓ヲ賜フ。

同十四年、某月大寶寺義興嗣子ナシ、越後守護上杉景勝ノ將、本庄繁長ノ二男千勝丸ヲ養フ、義興ノ將東禪寺某之ヲ喜ビス、竊カニ最上義光ニ通ス、義光陰ニ某ニ勸メテ、義興ヲ圖ラシム、伊達政宗間ニ居リ之ヲ和睦ス。

丸岡兵後守(兵庫)號義興、國主三年、次ニ範州ト功輪兵乱起、國中乱(範州ハ藥州ノ誤リ功輪ハ口論ノ誤リナルヘシ)

同十五年十月五日、是ヨリ前最上義光、東禪寺筑前ヲ援ケ、大寶寺義興ヲ襲殺ス、義子

千勝丸、越後ニ遁ル、伊達政宗之ヲ聞キ、大ニ義光ノ不義ヲ惡ム、義光既ニ大寶寺氏ヲ攻滅シ、其將中山光直ヲシテ庄内ヲ守ラシム。

來章喜悅之至ニ候、仍今月朔日、ニ對談候由可然候、其口無何事候而尤候、田澤ニ新庄在番之由、此方へも其間候、万端察入候、隨而山形庄内無爲成就然處ニ、東筑再乱、義興筑前守在所へ令懸入候、由其間候、畢竟自山之表裏迄候、愚拙無事始而取扱、一年不暮如此之儀、世上覺絶言語候、併何事も、可抛不足訖候、其口靜謐候由、此方へ近日被登候先可然候、恐々謹言。

追而如此可取乱莊内一度無事ニ取扱候事、不思議ニ存候、さても、愚拙面目失事、難書紙盡候以上。

拾月五日。

政宗 花押。

白石。

丸岡兵後守、號義興、國主三年、次ニ範州ト功輪、兵乱起、最上山形義秋、様出馬三庄マテ、大浦落城、源番守(中山)國主二年、次ニ越國繁長(本庄)打入平安三年。

天正十五年、二男千勝丸十五才、羽州庄内之城主大寶寺出羽守義興カ養子ニ遣シタル所、義興妹、賀東禪寺筑前守、同弟右馬頭、兩人、最上義光ヲ頼テ、逆心シ、義興ニ腹ヲ切セ、夜込ニ

千勝丸ヲモ可打果之催有之ニ付、千勝丸庄内清水ノ城ニ引取。

同十六年八月七日、本庄繁長兵ヲ庄内ニ出ス、二十六日、繁長中山玄番等ヲ擊破シ、悉ク庄内ヲ平ク、最上義光之ヲ關白豊臣秀吉ニ訴フ、秀吉因テ繁長ノ進撃ヲ停止ス。

態染筆候、仍山形出羽守領分ト哉覽、莊内城本庄乘取候由申越候、事實ニ候哉、双方被逐御糺明、雖可被仰出候、年内無餘日之間、至來春山形をも可被召上候條、其刻本庄をも可被差登、様子被聞召理、非次第可被仰付候、其中互手出不可有之候、山形かへも被仰遣候條、下々猥儀無之様ニ可被制候、其上往還之輩聊無滯様、堅可被申付候、猶増田右衛門、石田治部少輔可申候也。

十二月九日、

華押秀吉。

越後宰相中將殿。

同十七年五月三日、是ヨリ前、最上義光寒河江光俊ヲ京師ニ遣ハシ、徳川家康ニ縁リ、庄内ノ事ヲ訴ヘシム、光俊ノ歸ルヤ、徳川家康答書ヲ義光ニ托送ス。

今度寒河江外記、就被差上音簡委細示給候、爲悅之至候、兼又庄内之儀付而從、殿下被成御書候如御存分、被仰付一段御懇之御様、体中々難盡紙上儀共候、誠御本望目出候、然者上洛之儀、遅延候而も不苦候、由御意候間、御領内無異儀候様ニ、御仕置肝要候、其元之時宜、家

康直ニ申上候處、御懇之旨不大方候、具外記口上相含候、猶追而可申達候間、令省略候、恐々謹言。

五月三日、

家康花押。

山形出羽守殿。

同年七月十一日、大寶寺千勝丸從五位下ニ叙シ、出羽守ニ任シ、名ヲ義勝ト賜ル、是ニ於テ庄内復々大寶寺氏ニ歸ス、上杉景勝將士ヲ遣ハシ、義勝ヲ掩護ス、義光爭フ一能ハス。

同十八年、最上義守卒ス、年七十、山形城北龍門寺ニ葬ル、義守ハ義光ノ父ナリ、是ヨリ前、關白豐臣秀吉北條氏直ヲ小田原城ニ攻圍ス、義光最上内匠介山邊義忠ヲシテ陣ニ參セシム。

同年五月十五日、關白豐臣秀吉、小田原ヲ攻圍ス、書ヲ黑田孝高二與ヘテ、戰況ヲ報シ、又將ニ會津ニ入り奥州ニ一州ヲ經畧セントスル一ヲ告ク。

此表事小田原二町三町内ニ押詰、二重三重塙柵土居雲鷹丈夫ニ相付、一人も不落拔様ニ取卷候、此來者仕寄近々與被仰付候條、落去不可有程候、關東之武主共、楯籠候間、縱經年候共

悉^{ホシコロシ}干殺ニ可被仰付御覽候、八州之義ハ諸城明渡候間、被差遣御人數、被作請取、番勢被入置候、來月者至于會津被移御坐、出羽并陸奥之儀被相改候て、置目等之事可被仰付候、猶石田治部少輔可申候也。

五月十五日、

朱印 秀吉。

黑田甲斐守殿。

同年七月五日、北條氏直降ヲ請フ、關白秀吉之ヲ宥ス。

同年八月朔日、關白豐臣秀吉前田利家上杉景勝大谷吉繼等ニ令シテ、出羽ノ地ヲ檢セシム、奥羽ノ地古來未々曾テ正確ノ檢地ヲ經タルコトアラス、其田畝ノ廣狹、貢賦ノ多寡、皆各郡各庄ノ自爲ニ放任ス、秀吉ノ檢地ニ及テ二州ノ地籍、始テ統一ニ歸シタリ。

出羽國御檢地條々。

一上田一段、永樂錢貳百文。

一中田一段、百八拾文宛。

一下田一段、百五拾文宛。

一上畠一段、百文宛。

- 一中島一段、八拾文宛。
- 一下島一段、五拾文宛。
- 一屋敷麻島者、上島なみよ年貢可取事。
- 一漆木見計年貢可相定事。
- 一川役相改、御代官可被仰付事。
- 一田島共ニ一段ニ付而五間六十間ニ可相定事。

天正十八庚子八月日、

木村常陸介、大谷刑部少輔。

同年同月九日、關白豐臣秀吉會津ニ入り、興德寺ニ館ス。

最上義光妻、天童氏及ヒ男清水義親ヲ携ヒ、會津ニ詣リ、秀吉ニ謁ス。

尙以最上妻子をハ、山形殿御自身御同道よて、昨九日ニ被上事候、一段之御機嫌よて候つる、不及是非候已上。(伊達文書)

同年同月十二日、關白豐臣秀吉、奥羽二州ヲ所置シ、會津ヲ發シテ西上ス、十月二十六日、大谷吉繼等ノ地ヲ檢スルヤ、土寇蜂起ス、最上義光ノ將、寒河江光俊、鮭延愛綱等、湯澤ニ出陣ス、是ニ至リ書ヲ大森ノ守將色部長眞ニ與ヘテ、山形ニ歸陣ス、長眞ハ上

杉景勝ノ屬將ナリ。

兩度御注進、併昨日者爲仁体蒙仰候事、大悅不斜候、如承其口御在堪之儀、御苦勞不及是非候、内々以參謝万々可申承、処、明日者未明ヨ罷歸候條、以脚力申展候、已來之儀、可蒙仰候聊不可有如在候、尤最上口御案内可申入候、諸事來音任之候、恐々謹言。
追而、昨日御音信之方々、不懸御目候、無心元令存候、乍去難去子細候而、無其儀事候、意外迄候以上。

鮭延 典膳、愛綱、寒河江外記介、光俊

色部殿、御陣所

同年十一月二十八日、最上義光京師ニ詣ル。

十一月廿八日、出羽守殿、おつ年ニ御下り候。

同十八年正月八日、最上義光侍從ニ任ス、二月邸地ヲ伏見ニ賜フ、因テ邸第ヲ起ス、六月廿日はヨリ前、陸奥土寇蜂起ス、九戸政實又反ク、關白秀吉令ヲ下シ、徳川家康、羽柴秀次、上杉景勝、佐竹義宣、蒲生氏郷、伊達政宗等ニ命シテ、之ヲ擊平セシム。

奥州爲仕置被指遣御人數道行之次第。

- 一番、羽柴伊達侍從、
 - 二番、羽柴會津少將、
 - 三番、羽柴常陸侍從、
宇津宮彌三郎
 - 四番、羽柴越後宰相中將、
 - 五番、江戸大納言、
 - 六番、羽柴尾張中納言、
- 以上。

- 一 江戸大納言、尾張中納言、二本松通可被相越候事。
 - 一 羽柴常陸侍從、岩城相馬宇津宮彌三郎、其外一手の衆、相馬通可相越事。
 - 一 羽柴越後宰相、并出羽衆最上通可相越事。
 - 一 二本松通、白川より城々へ人數を入置、可罷通事。
 - 一 江戸大納言、尾張中納言、大崎邊程近ク有之、先々之儀、人數ヲ入候者、可指遣事。
 - 一 葛西大崎悉平均ヨ申付、立置城々、伊達侍從申付次第、城々また無之様、相究普請申付、其外城々可令破却事。
 - 一 右之普請申付候内ニ、郡分知行替以下の仕置可相究候、會津江近郡者、會津へ可被付候、葛西大崎へ近き郡ハ伊達りたへ可被付候事。
- 以上。

天正十九年六月廿日、

朱印(秀吉)。

同年九月、陸奥平ク、十月中納言秀次、山形ニ入ル、義光迎饗甚々盛ナリ、義光ノ女美ニシテ艶ナリ、秀次悦ヒ之ヲ容ル、女名ハ駒姫、後ニ今之局ト稱ス。

文祿元年、正月二日、最上義光將ニ征韓ノ師ニ會セントシ、山形ヲ發ス、三月十三日、太閤秀吉義光等ニ令シ肥前名護屋ニ陣セシム、十七日、義光京師ヲ發ス、二十八日、義光書ヲ藏増大膳亮ニ與へ、近狀ヲ報告ス。

猶々用所候て、山城相下候間可傳達候、以上。

三月十七日ニ、洛中打立、同二十八日ニ境自渡海候て、唐御陣へ打立候、筑紫なこやと申處まであるよゝニ候、可御心易候、何様秋中者下向可及面談候、爾ゝ其許普請以下火之用心等馮入申候、又者細々ト出仕候て、総領殿へ可被掛詞事、所希候事々重而恐々謹言。此由船越同左馬殿兩人へ傳言馮入申候。

三月廿八日、

義光花押。

藏増大膳亮殿。

同二年五月十八日、最上義光名護屋ニ在リ、遙ニ山形、牙城ノ工事ヲ指揮ス。

一 其元うちたてのほりふくんいり、候哉、一度よつりまつり候てよく候とんと存候、ほり